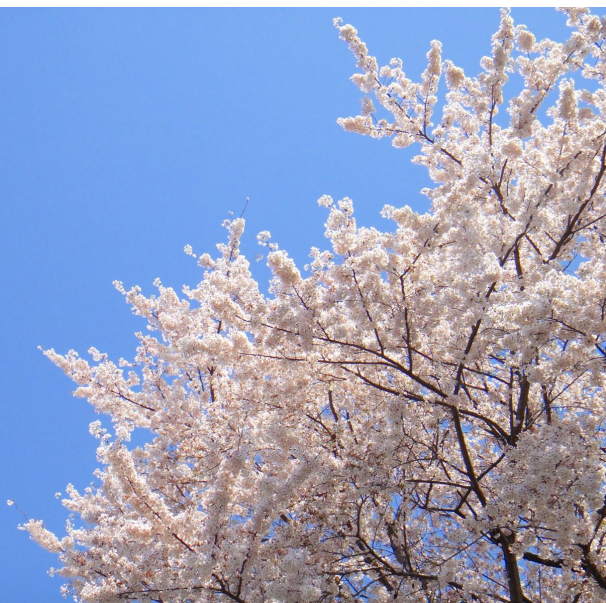


あーちゃん先輩の **恋**の空騒ぎ！

瀧川新惟



あーちゃん先輩の
恋の空騒ぎ！

瀧川 新惟



鶏卵文庫

目次

プロローグ	二木佳奈多、剣を振るう	…… 005
枯葉散る十一月	あーちゃん先輩うじうじと悩む	…… 016
粉雪舞う十二月	あーちゃん先輩バスターズに来る	…… 060
透き通る一月	初詣などの幕間	…… 108
チョコレート色の二月	決戦、そして死闘	…… 142
桜咲く三月	棗恭介の卒業	…… 172
エピローグ	少年たちとの別れ	…… 222
あとがきに代えて	棗恭介と虚構世界と永遠に関する試論	…… 230

プロローグ 二木佳奈多、剣を振るう（直枝理樹の補記）

これは、天野先輩の恋の物語だ。

当時二年生だった僕たちには、卒業というのがいつたいどんなものなのか、よく判っていないかった。三年生になった今なら、あの秋から春にかけての季節に、恭介や天野先輩が何を思っていたのか、すこしだけ判る氣もする。

そんなわけで僕は、まったく個人的な記録として、この物語を残しておこうと思う。この物語を誰が読むのか、それとも誰も読まないのか判らないけど——多分にプライバシー的な話だから、公になるってことはないだろう——それはひとまず氣にしないことにしよう。

この記録は、僕、直枝理樹が色々な人から聞いた話を、物語調にまとめたものだ。一部は僕の想像も入っているけれど、そんなに間違つてはいないはずだ。が、なんならフィクションとして読んでもらってもいい。

視点について。基本的には全編通して、天野先輩の一人称で纏めてある。一部、天野

先輩が出てこない重要な出来事もあるから、そういう部分だけは三人称の体裁になっている。まあ、読んでもらえれば判ると思う。

どこから始めるかは結構迷ったけど、最初は少しだけ脇道から始めることにしよう。あれはそう、九月のころ、夏が過ぎ、心地いい風が吹き始めるような季節だった。



寮会の買い物は、直枝理樹を誘っていく。

前寮長から役職を引き継いでからも、二木佳奈多の、それは変わらない習慣だった。

一通りの買い物を終えて学校に戻る道すがら、夕暮れには早すぎる堤防を歩いてみると、二人の見知った姿が、見下ろす河川敷を走っていた。

「あ、謙吾」

理樹が声を上げて手を振った。宮沢謙吾、男子剣道部のエース。美男子で女子にも人気がある。ただし、文武両道と褒めるにはいささかネジの飛んでいるところがある男だ。

謙吾も二人に気づいたか、コースを変更して、ゆっくりと堤防に駆け上ってくる。

「買い出しか？ 寮長も大変だな」

息ひとつ乱さず、謙吾は言う。

「邪魔しちゃったかな？」

「いや、この程度で呼吸が乱れるようでは、修行が足りないというだけのことさ」

この男が言うのと、妙な説得力がある。

「真人たちは？」

「三角ベースが終わって、ちょうど休憩の時間だ。その合間に、少しランニングをと思つてな」

ということとは、葉留佳がクドリヤフカを追いかけ回していると言うことか——佳奈多は思う。いや、それはゲーム中も変わらないか。それにしても、

「……あなたたちも飽きないわね、宮沢？」

「俺に言わせれば、二木、」

謙吾が佳奈多の方に向き直る。

「部屋に籠もって書類整理とハンコで放課後が終わるなんて、そつちのほうが信じられないぞ。それこそ、よく飽きないものだ」

「そこは人それぞれね」

佳奈多の中立的な発言に、何故か理樹の方をちらりと見て、謙吾は笑った。

「ま、理樹と二木はいいコンビだと思うけどな」

「だいたいんだけどね」

さらりと流すと、謙吾は少しだけ驚いた顔をした。そして、考え込むようにして腕を組む。

「どうしたの、謙吾」

「いや……」

言葉を濁して謙吾は、佳奈多の顔をまじまじと見た。

「な、何よ……？」

「なあ、二木……それに理樹」

「だから、何？」

「このあと時間、あるか？」



場所は変わって、女子更衣室。寮長室の片隅に放りっぱなしになっていた段ボールを開けて、佳奈多は剣道衣に袴、防具一式を身に着ける。その感触は、懐かしい、と表現しうるものだった。

竹刀を持って、静かに息を吐くと、心なしか空気が引き締まったような気がした。そのまま剣道場に入る。

この場所に来るのは、もうひと月以上ぶりのことだった。

郷愁とまでは言わないけれど、かつて自分が属した場所に対するそれなりの愛着と
いうものが、自身の中に残っていることに、佳奈多は少し驚いた。

それなりに広いその空間にいるのは、佳奈多の他には、理樹と謙吾のふたりだけだった。剣道場のすみの方に座り込んでいる。

理樹は声には出さないものの、興味津々といった風に佳奈多の方を見ている。佳奈多のこの姿を見るのは、今日が初めてだ。

一方謙吾は、面の向こうで

「結構、様になつてるじゃないか」

とだけ言うと、すらりと立ち上がった。

礼、帯刀して三步で竹刀を抜き、ぞんきよ蹲踞の姿勢。審判もない、申し合わせたように呼吸があつて、ふたり、そのまますつと構えをとる。そこから試合は始まったが——佳奈多はどうにも勝手がわからなかった。

だいいち、佳奈多は謙吾に手合わせを請われただけで——というか押し切られた形であつて、要するに積極的に打ち込む動機がない。

困った——などと、明らかに場違いな感想が佳奈多の脳裏を過ぎる。

そのとき、

すう――

と、佳奈多の右足が動いた。

動いてから佳奈多は、右足を動かしたことに気づいた。

謙吾と自分の位置関係が、反時計回りに少しだけずれていた。

奇妙な感覚だった。

今のは、どちらだ。

どちらだ、というのは、果たして佳奈多が謙吾に対応して位置を変えたのか、それとも真実はその逆なのか、佳奈多自身が判らなかつたのだ。

また、

右足がすつと動く。謙吾との相対位置関係は僅かにずれるが、これもまた一体、自分自身がまるで意識していない動きなのが、佳奈多はひどく不思議だった。

その佳奈多の視界の端に、理樹が呆気にとられた顔をしているのが映った。奇妙に視界が広がった。

そのまましばらく、にらみ合い――と表現するしかない。佳奈多の語彙では対応する単語が他にない――が続いた。

どれだけの時間が、過ぎたか、

ふつ、

と何かしらの動機があつて、佳奈多は竹刀を振り上げ、前へと踏み込んだ。

謙吾が一本を取りに来ていた。竹刀が交錯する光景——時間の進みが何故だか遅く感じられる。

迫る竹刀、それに掠めるようにして、体を右によじると、僅かな隙間に、竹刀がすつと吸いこまれていった——

——ぱあん！

という音が剣道場に響き渡り、断絶的に時間が動きだす。

気づくと佳奈多の竹刀は、謙吾の面を直撃していた。

慌てて引き戻す——残心もなにもあつたものではない。試合だったら、これでは一本にはなり得ないだろう。

取り繕ったように構えをとると、しかし、謙吾は竹刀を下ろす。

そして、そのまま試合場を出ると、佳奈多に向かって礼をした。
何を考えている——？

呆氣にとられ、佳奈多は竹刀を下ろすことも忘れていたが、そのうえに聞こえてきた声は全く理解を越えていた。

なぜなら、謙吾は、面を着けたまま、からからと呵々大笑しだしたのだから。



ひとしきり笑い転げると、謙吾は面を脱いで、

「降参だ」

と言った。

佳奈多の顔は実に不満げであった。

自分がどうやって勝ったものか、よく判らない上に、その勝ち様を相手である謙吾に大笑いされたのだから。

だが、その不満のかたちもどうやって表現したものか。

「二木」

少しだけ真面目な目で、謙吾が言葉を口にした。

「今までで一番、澄んだ太刀筋だった」

「澄んだ……？」

その評価も、佳奈多にはよく判らない。

「ああ。いい試合だった」

「宮沢が満足なら、私はそれで良いけれど……」

「ああ、俺は満足だ。出来ればこれから手合わせをお願いしたいところだが——剣道部に戻る気はないだろうか？」

「ええ」

それについては、佳奈多は即答した。

「そう言うだろうと思った。そういう太刀筋だった。まあ、手合わせはこれが最後だな」
ひとり納得し、

「良い経験をさせてもらった、まだまだ修行が足りないな、俺も」

そう言っただけで頭を下げた。

そして、ふっと肩の力を抜くと、

「それより、二木」

「何よ？」

「もう少し、気楽にやれることがある」

そう言っただけで、謙吾は理樹の方に顔を向けた。

「理樹、今度の試合のことは二木に話したか？」

「え？」

理樹は今まさに夢から覚めたような顔をして、それから慌てて首を振る。

「いや、まだだよ」

「試合？」

訊くと謙吾は、バスターズの顔になった。

「再来週の週末、試合をするんだ。理樹はもう戦力に数えているが、できれば二木、お前にも参加して欲しい」

「私!？」

しかも野球!?

「なあ、理樹？」

佳奈多の哑然とした顔を一顧だにせず、謙吾は理樹に声をかけた。

「え、ああ、うん。二木さんにも来て貰えたら嬉しいなって、謙吾と話してたんだ。それに、きつと葉留佳さんも喜ぶよ」

「そういうことだ。考えておいてくれ。ま、」

謙吾は言うのと、佳奈多に背を向け、歩き出した。

「あとは理樹と相談して、お前が決めることだな。だが、みんな待っているぞ」

理樹が佳奈多のそばに歩み寄り、二人は揃って、謙吾が去っていく方を見やった。

その後ろ姿が何故だか、佳奈多の目に、ひどく清々しく映った。



……とまあ、そんなわけで、二木さんはバスターズの一員となった。十月頭のころだ。寄り道にしては、ちよつと長かったかも知れない。そろそろ、天野先輩の物語を始めよう。天野先輩の、一世一代の恋の物語を。

枯葉散る十一月 あーちゃん先輩うじうじと悩む

特に、棗君の前では

その日、寮長室を訪れてきたのは、げに珍しき棗君だった。

「よう、理樹、それに二木」

「あ、恭介」

「棗先輩、何かありましたか？　こんなところまで、わざわざ来なくてもかなちゃんに怪訝そうな顔で訊く。」

「スクレボの設定資料集の件、どうなったかと思ってな」

「ああ……」

棗君のその言葉に、かなちゃんはやれやれとばかりに苦笑を漏らした。

「このまえ発注したって言いませんでしたか？」

「それからどれだけ経ったと思ってるんだ」

「まだ一週間ですよ」

「一週間もか……」

大げさに肩を落として見せる。

「なあ二木、今時、ネットで注文したら、どんな本だって三日もあれば手元に届くぞ？
しかも今回のお宝は^{タレゲット}何と、押しも押されぬ人気漫画、スクレボの設定資料集なんだぜ

——！」

熱く語り出す棗君を見て、やれやれとばかりにかなちゃん首を振った。子供かこの人は、と顔に出ている。

「まあまあ、恭介——届いたら、一番最初に教えるからさ」

「絶対だぜ、理樹？」

「判ってるって。少しは信用してよ」

「もちろんさ。信じてるぜ、理樹。いやあ、持つべきものはまさに寮長の仲間だな！」
ばんばんと背中を叩かれて、直枝君は、まったく調子いいんだから……というふう
に笑顔と困り顔のハーフ・アンド・ハーフだ。その横で、やれやれとばかりに、かな
ちゃんが椅子に座り直した。

「別に良いけど……」

手に持った書類をとんとんと揃えて、口を挟む。

「あんまり直枝を困らせないでくださいね。それと、直枝も公権力を必要以上に私的
目的で振るわないこと」

かなちゃんの言うことも実にもつともだ。が、棗君は悪びれる様子もなく言い切った。「俺が無理を押し通すのは、二木——スクレボに関することだけだ!」

「どうだか」

かなちゃんの言葉はあくまでも冷たい——が、

「……ま、丸く収まつているうちはいいですけどね、あんまり周囲の反感、買わないでくださいよ」

そう、付け加えた。おや、成長の跡ありか。

「その辺りは抜かりないさ。それに、いざとなったら二木にも頼るつもりだぜ? なにしろ二木も、我らがバスターズのメンバーなんだからな」

「はあ……」

棗君の一途なスクレボファンっぷりに、思わずかなちゃんが、ため息を漏らした。

「あーちゃん先輩といい、棗先輩といい……どうしてこう、エキセントリックな先輩ばかり巡り逢うのかしらね」

む、と私は眉をひそめる。かなちゃん、それはちよつと聞き捨てならないぞ——さて、そろそろタイミングかな。すう、と息を吸いこむ——

「——あら、誰がエキセントリックですって?」

いいながら、柱の影から姿を現わした。かなちゃん、直枝君、それに棗君。みんなが一斉に私の方に振り向く。これぞまさに、私参上、というわけだ！

「天野か」

「あら、随分なご挨拶じゃない？」

せっかく奇襲攻撃と洒落込んでみたのに、なんだその淡々とした態度は。ちよつとむくれた。芝居がかりすぎかも知れない。まあいい、感情表現はたつぷりと、つていうのが私の主義だ。そう、

特に、棗君の前では。

ともあれ。

「で、棗君のお目当ては、もしかして……これ？」

悪戯そうな目つきと声色を作って、私は背中から一冊の本を取り出してみせた。

「うお、天野!? それは!」

棗君が仰け反る。それはまさしく、棗君が喉から手が出るほど熱望していた、『学園革命スクレボ』の設定資料集だった。

「あーちゃん先輩、それ、どこから持ってきたんですか」
ちよつと棘のある口調で、かなちゃんが尋ねる。

「いやー、寮長室宛の荷物が届いててね、ここは前寮長としての義務感が沸々と湧いてきてね!」

「それで、荷物を勝手に開けた、と」

「拙者、お代官様のお手間を省いて差し上げようと愚考いたしました次第にござります」

「狂言みたいに戯けてみせると、かなちゃんの今日の第二号ため息がスタンドを直撃した。やれやれ。」

と、仰け反ったままの棗君が、手をわなわなと震わせながら言った。

「な、なあ、天野……それ、貸してくれないか?」

「ふふうん?」

私は、にゅつと猫のように目を細めた。何て子供、とかなちゃんの目が雄弁だ。そりや判つちやいるんだだけどさ。

「寮会の規約だと、こういうのはまず、娯楽室に持つて行かなきゃいけないんだけどね」

「お、おい、理樹……」

棗君が加勢を求めるけど、規約を盾にされると、直枝君は立場上、困るだろうな。

「ま、まあ……規約だと、そうだよね……」

「まさか……裏切るのかっ……俺を……」

ガーン、とか、ドーン、とかの音響効果がして、棗君が青ざめた。

「あら、直枝君もなにか、トリヒキみたいなこと、してたの？」

「い、いやあ……」

たじたじだった。初々しいなあ！

と、かなちゃんの辛辣な視線が私に突き刺さる。む。見返すと、そのへの字の唇が意外な言葉を発した。

「ところで、あーちゃん先輩？」

「ん？ なに、かなちゃん？」

「かなちゃんって呼ばないでください……じゃなくって、規約の話をするなら、寮会宛の荷物は、誰が開けるんですしたつけ？」

「う……」

額から汗。そういえば、規約といえばそんな規約もあつたかも。たしか、

「まあ……あの……寮長、よね？」

「で、今の寮長って、誰でしたつけ？」

「かなちゃんと……直枝君？」

「疑問符つけないでください。あとかなちゃんって呼ばないでください。それで、今この荷物の封が解かれているのは、果たしてどうしてでしょうね？」

「うう……」

すっかりしよぼくれて、私は小さく言つた。

「ごめんなさい。私が悪かつたです」

「ということだ」

かなちゃんは無情にもスクレボの設定資料集を取り上げると、ぽん、と棗君に渡した。

「お、おお……」

棗君は、一瞬状況を理解できないようだったけれど、

「二木！ 判つてくれるか!!」

言つて飛び跳ねんばかりの勢いだ。一方のかなちゃんは淡々としたもので、

「勘違いしないでください。寮会の一員たる棗先輩に……」

段ボール一杯の書籍を指さす。

「……これを娯楽室に持つていつて、本棚に並べておいて貰えないかと思ひまして」

「何を言つてるんだ、お安いご用さ!」

なるほど、さすが元風紀委員長、こういう人の使い方は、さすがに上手いっ!

「それじゃ早速、行つてくる——恩に着るぜ、二木!」

棗君はそういうと、段ボールとお宝を抱えて、いそいそと娯楽室に向かつていった。



足音が去ると——うなだれっぱなしの私はそのまま、よよよ、とばかりに机の脚にすがりついた。

「うう……」

「自業自得ですよ、あーちゃん先輩」

「でも、恩に着るって——かなちゃんってば、おいしいところ全部持って行っちゃうんだもの……直枝君だけじゃ不満だっていうの!」

「まさか」

一刀両断だ。

「でも、あーちゃん先輩、あのあとどうやってオチをつけるか考えてました?」

「オチ?」

きょとんとして鸚鵡返す。

「ぜんぜん?」

「はあ……」

かなちゃん、ため息第三号。逆転満塁コールドゲーム級、つてな雰囲気だった。

「あのですね、言っておきますけど、ボケとボケはかみ合いませんよ」

「確かに、ツッコミ役は二木さんしかいなかったよね……」

直枝君が合いの手を入れた。ナイスフォロー、とかなちゃんが視線を返す。このナイスコンビめ。

「もう少し、考えたらどうですか？」

言つてからかなちゃん、少し考えるようにした。そして付け加える。

「その、もし……本気なら」

親身かつ、辛辣だった。

私は黙つて椅子に座つて、顎に手を突くとそのままぐつたりと机に突つ伏す。ばきりと髪が広がった。たぶんひどく滑稽なザマだろうなと思う。

直枝君が立ち上がる気配がして、急須に茶葉を入れ、ポットからお湯を注ぐ音がした。やがてお茶セットが載っているであろうお盆が机に置かれる音。かちやり。

「天野先輩、とりあえずお茶でも……二木さんもね」

「ん、ありがと」

二、三分の静かな時間を待つて、二人がお茶をすすする小さな音が聞こえてきた。突つ伏す机の冷たさや。暖かいお茶の有り難さがきつと身に染みる季節だ。

要するに今は十一月も半ばで、

あと半年もせずに――

私と棗君は、この学園を去ることになるのだ。

寮長室を辞して自室に戻ると、上着を脱ぐのも面倒になり、そのままベッドに突っ伏した。

深い深い息を吐くと、ぐったりと力が抜けていき、私の体はまるで軟体動物のようにぐんにやりとした。

『もし、その……本気なら』

その遠慮がちな言葉の意味を勘ぐって、たぶん自分はひどい顔をしているのだろうなあとと思う。

耳年増というのはあくまでも結果に対する評価だ。まあ、おばさんくさいという私の特性をかえって武器として使っている自覚があるので、耳年増というその評価自体は別段気にもしないのだが……その原因に対する評価を自ら行ってみると、そこには暗惨たる自虐ワールドが待ちかまえている。

この手の話題に関しては、要するに私は、へたれなのだ。

行動しない理由なんて、いくらでもつけられる。そのいわば権利を行使する人間を、へたれという。

理由のたとえば筆頭は神北さんのことだ。
神北さんと棗君。

耳年増……もとい乙女のカンが、二人のあいだにただならぬ関係性があると告げている。

そもそもあの棗君が、下の名前で呼んでいることからして怪しい。法則に従うなら「神北」と名字で呼び捨てにするところだろう。何なんだ一体。

……思考が熱を帯びてきて、それが嫉妬からくる熱だと気づいたときほど、自分が情けなくなる瞬間はない。

思考がぐるぐると際限なく落ちていく。

本気なのか。

本気だと思う。

たぶん。

それならなぜ、行動に移さないのか？

そりゃアあれよ。

あれですよ。

軽口をたたき合うくらいには仲のいいクラスメイトなのだ（もしくはそれを演じてきたのだ）。

振られるのが怖いからに決まっている。

それに、なにしろ自分が神北さんに勝てる自信なんて、微塵もないのだ。

ほかの誰かなら、あるいは勝てる自信がある子もいるにはいるが、しかしまあ、彼の周りの女の子たちの魅力的なこと！

家庭科部の後輩の能美さんになちゃん、三枝さんだつて、私にない魅力——いくらかはた迷惑エキセントリックなきらいがあるが——持っている。我が女子寮の子たちだ。それくらい事は知っているのだ。当然。

まったく、両手に花どころか両手に花束つてもんだよ。

わたしのようなおばさんが混じれるような隙が、果たしてそこにあるのか。たとえあつたとして、私が選ばれるようなことがあるのか。

思考がどん底まで落ちる。いつものように。

勝ち目のない戦いを続けられるほど、私は強くない。

そう定義づけてしまうのが自分だとは、頭では判っている。でも、判っていたつて、体も心も、そう簡単には動かない。

猫を囲む

「やつぱりクロフォード五世は偉大だな」

棗さんがクロフの顎を撫でながら言う。寝転がったまま鳴くときに口から時折見える犬歯が、棗さんのお気に入りだった。

「気持ちよさそうねえ……」

自分の声に、羨ましがげな響きがあることを自覚して、より一層憂鬱になる。棗さんと並んで座り込んだまま、空を見上げた。

最近猫が羨ましい。クロフもドルジもレノンも、猫というのは実に、自分を持っているといけななというか。こうやって棗さんに遊ばれているときですらそう見えるのだから、まあ、これは私の欲目かも知れない。

シューマツハとファールブルが寄つてくると、クロフは、にやあと一声鳴いて立ち上がる。何に興味を引かれたか、そのままどこかに行ってしまった。

棗さんというと、寄つてきたファールブルのまえに猫じゃらしを垂らして遊んでいる。その棗さんの背中を登り、シューマツハがその肩にちょこんと座った。

ドルジがぬおつと鳴いて（いつも思うけど、コイツは一体本当に猫なんだろうか）、ごろごろと転がってきた。こいつはこいつで、世はすべて事もなし、みたいな顔をしやがるので、別の意味で羨ましい。二十一世紀の人類のテクノロジーでは雌か雌かも判らないドルジだが、いつそこのくらいおばさんくさくなつてしまえば、色々と諦めもつくのだろうか。

まったく、恋する乙女なんてキャラに合わないこと甚だしい。

「どうした、寮長」

棗さんがこつちを見上げて言う。

「あ、いえね……何でもないわ」

「そうか、ならいいが」

言つてファールブルの相手に戻る。棗さんも棗さんで、たいそう猫っぽい。空気みたいなものをかき分けるのだ。あるいは表情に出てしまったか。

別に、棗君の妹、ということでもつきあっているワケじゃない。そういう策を弄することができるなら、もう少しくらは進展しているのではないだろうか。ともかく、棗さんとは要するに猫仲間だ。寮長職を退いてからはとくに、そんな時間が多くなった。

「猫っていいわね……」

「そうだな、猫はいいな」

ぼんやりとした会話。秋の馬肥ゆる天高い空。ちよつと違うか。

「りんちゃん」

少しむこうから声がした。ほんわか神北さんだ。棗さんが顔を上げて、手を振った。

「こまりちゃん」

「こんにちは、りんちゃん。寮長さんも、こんにちは」

「ええ、こんにちは」

今日も神北さんはいい笑顔だ。そのまま座り込むと、棗さんの肩のシューマツハが、びよこんと神北さんの前に飛び降りた。

「よしよし」

なでりなでりとする。棗さんと猫も大概絵になるが、神北さんは神北さんで別の味わいがある。絵本か何かから飛び出てきたような図だ。シューマツハも、うにやあといささか絵本的な声を上げる。

「あのね、りんちゃん」

「なんだ、こまりちゃん」

「恭介さんが、ゾリオンどこにいったか知らないかって」

「ああ、あれか……」

棗さんが顎に手を当てた。

「そうだ、前に預かって、あたしの部屋にあるぞ」

「やつぱりりんちゃんの部屋かあ。恭介さんが、ちよつと使いたいって言ってたよ」

「ゾリオンって、あの赤い光線銃だよね？」

口を挟む。

棗さんは呆れたような顔をしている。

「そうだ。まったく恭介も物好きだな」

「なんだか、商店街のパン屋さんと対決するんだって言ってたよ」

「パン屋さん？ おもちゃ屋さんじゃないのか？」

「うん。パン屋さんだつて」

「相変わらずよくわからんな……」

「言いつつも立ち上がる。」

「……まあ、あの馬鹿兄貴じゃしかたない。渡しに行つてやろう」

「うん、それがいいよ」

「どうせあたしたちも巻き込まれるんだろうけどな」

「言葉とは裏腹に、棗さんの顔はとても楽しそうだった。」

「それじゃ寮長、あたしは先に帰る」

「うん、せっかくだから楽しんでくるといいわ」

「まあ……そうする」

「寮長さん、またね」

「はい、神北さん、また今度ね！」

棗さんは淡々と、神北さんは天使の笑顔で手を振って、二人は校舎の方へと消えていった。端から見ても、とてもいいコンビだ。

まったく、仮想恋敵に設定するには、勝算がなさ過ぎて笑えてくる。帝国海軍の机上演習でもボロ負けするレベルだ。

にやあ、という声に振り向くと、いつのまにかクロフが戻ってきていた。私の横にちよこんと座ると、大あくびをする。

……赤い稲妻ゾリオン、か。

やれやれ、まるで子供っぽいつたらありやしない。なんであんなのに惚れたか自分、と思い返してみるも、実際自分じゃよくわからない。それが故に恋なのだと客観的に理解できる。盲目とか病気の類だ。

「まったく、あんたたちはいいわよね……」

クロフに八つ当たり気味の声をかけるけど、彼は我関せずとひなたぼっこに興じるばかりだ。こんななにもうっとしていて、恋煩いでもないのかしら。そんなことを考える自分こそが恋煩いなのだと気づいて、私はおもわず苦笑いする。苦笑いというか泣き笑いだったかも知れない。だって、棗君はあんまり遠すぎる。

ガールズストーク、喫茶店、冬の暖かな町並み

十二月になって、冬用のコートを出すと、なんとなく町に出てみたくなる。かなちやんが私を誘ったのは、そんな他愛もない理由だった。

行きつけの喫茶店にはいつて、とりあえずのケーキセットを頼むと——私はエスプレッソにチョコレートケーキ、かなちゃんは焙じ茶に抹茶ケーキだ——私は少し小声で言った。

「寮会のほうはいいの、かなちゃん？」

「直枝に押しつけてきましたから」

その言いかたに、私は思わずすすくすと笑った。

「あなたたちホント、仲がいいわねえ」

「そうですか？」

怪訝な声で訊きかえされた。

「そりやまあ、あたしだってオンナノコだからね。熱々のカップルを見てれば、そう思うわよ」

「熱々、ですか」

「かなちゃんには自覚ないかも知れないけどね。端から見れば、そりやあもう、ゴチソウサマデシタ、つてな具合！」

言いながら両手を合わせる仕草で戲ける。まだドリンクも来ていないのだけれど。

「……やっぱり、あなたたちで正解だったわ」

「何ですか？」

「寮長よ。よかったでしょ？ 直枝君と二人で」

「少し公私混同気味ですけどね」

「いいじゃない、ちよつとくらい。それでうまく回るんだったら、誰も文句は言わないわ」

「そのところに抜かりはありません」

「よッ、さすが鋼鉄の風紀委員長ドノ！」

「昔のことを蒸し返さないでください」

かなちゃんのちよつと顔が赤くなる。あの時代は、昔話で笑って話すには、まだ少しヘヴィなのかも知れない。

やがてケーキとドリンクがやってくると、私たちは、まるで年頃の少女のように遠慮なくがつついた。

いや、そのつもりはないのだけれど、箸——もといフォークが進む進む。

かなちゃんの和風ケーキセットもいだけれど、洋菓子の王道と言えばチョコクレート味に限る。その横に添えられた、甘さをごく控えめにしたホイップクリームとカスタードクリームが、チョコクレートケーキの甘さを引き立て、あくまでも嫌味にならない程度の味わいの演出がニクい。

シンプルに見えてその実計算され尽くされた構成は、これはコンビニや学食のケー

キでは、ちよつと太刀打ちできないシロモノだ。

「いやあ……このケーキは絶品ね！」

主観的にはあつという間の時間が過ぎ、私は、天晴と言わんばかりにエスプレッソを啜った。

無論、ケーキの皿はとつくにカラである。

かなちゃんも同様、カラになった皿を横目に、焙じ茶をひとくち。

「直枝に教えて貰ったんですよ」

「ほほう？ 直枝君もなかなか店を見る目があるわね。それともタウン誌で下調べしたのかしら？」

「寮を出る前から『行つてみたい店がある』つて言つてました」

「やるわねえ、直枝君。最初はちよつと頼りないところがあつたけど……それとも、我が愛しのかなちゃんのためなら、男つて変われるものなのかしら？」

ちよつとからかつてみるけど、かなちゃんは澄ましたものだ。

「確かに、随分とこう……頼れるようになりましたね、直枝は」

「相変わらずやられてるわね」

「のろけてるつもりは、ないんですけどね」

なんと淡々としていやがりますかね、かなちゃんは。私は思わず何かのスイッチが入った！

「かなちゃん！ それは自覚が足りないわ。あなたのそれは、そりやもうノロケよ。どノロケよ。ノロケ以外のなにものでもないわよっ!!」

「ううん……のろけるほど、いいものじゃありませんよ」

「あーもうっ！ 自覚していないところが何ていうのずるいわよかなちゃんっ！ いいじゃないのうらやましいっ!!」

「なるほど、うらやましい、と」

「……え？」

かなちゃんの声色が変わった。聞き間違えるはずがない、これは交渉ごとに成功したときの声だ。なにか言ったか、私は。

意にも介さずと言った風に、しれつとした顔で、かなちゃんは平然と言葉を放った。
「あーちゃん先輩、『あなたたちは』いいわね、とはよく言いますけど、『自分が』うらやましい『と思う』って明言したのは、はじめてですよね」

理解するのに一瞬、

「かゝなくちゃくんくっ!!」

恨めしげな声でかなちゃんの名前を呼んだ。確かにそれは——言わないようにしていた言葉だったのだ。

「謀ったわねっ！」

「こうでもしないと、あーちゃん先輩、はつきりしないじゃないですか」
かなちゃんはあくまでも粛々と焙じ茶を口にする。私はがつくりと項垂れた。



「諸々、お察しの通りでございます、お代官様」

喫茶店の一席は臨時のお白洲となつて、被告たる私は、ただただ頭を垂れるばかりだった。

「一度、直枝のいないところで話をしようと思ひまして。寮長室だと人の耳もありますから」

「今の発言すらノロケに聞こえる今の私に隙はなかった！」

「はあ……」

かなちゃんは本気のアきれ顔だ。あれを引き出すとは私もなかなかやる。気をとりなおしてかなちゃんは、じつと私の目を覗き込んだ。

「で、あーちゃん先輩、本気なんですね？」

——それを言われると、急に自信がなくなる。おどおどと口を開く。
「たぶん……本気……だと思ふ」

自分のことながら煮え切らない。

「……それじゃ、他の子に取られてしまっても、構わないと？」

「そっちの方がリアル」

今度は即答できた。

「自信ないもの、私」

「そんなところだろうと思いました。でも、そんなこと聞いてるんじゃないです」

「……？」

「棗先輩を他の子に取られてしまっても、いいんですか？」

私は今度こそ押し黙った。

かなちゃんは黙って、私の言葉を待っている。

そういうことか——と、私は悟る。そこは自分で踏み出す必要がある、と、かなちゃんと言っているのだ。

沈黙が続く。

二人、どちらともなく、窓の外に目をやった。

一面分厚い灰色の空、冬景色だった。

雪が降ってくるまで、そう時間はかからない。

クリスマスを抑えて、町は浮き足立っている。
コートとマフラーに身を包んだ男女の幾組かが、楽しげに笑いあいながら通り過ぎていく。

この冬が通り過ぎていく。

厳しい寒さの中、決して強くはないであろう人たちの、ささやかな幸せを乗せて。
そして、私には、次の冬はもう、ないのだ。

そんな町並みをぼうつと眺めていると、なぜだか、ふつと頬が緩んだ。

「みんな、幸せそうね」

ぼつり、言う。かなちゃんも淡々と返す。

「そういう季節ですから」

「そうだね……」

私は頷く。

どちらかという笑顔だったと思う。

そしてその笑顔のまま、

「棗君があんな風に誰かと歩いてるのは……嫌だな」
観念したように言った。

遠い日の記憶

いざ自分の気持ちをぶっちゃけてしまうと、思ったよりラクになった。付き合いの長いかなちゃんに話を聞いて貰ってるっていうのが、より一層ありがたい。

自分ひとりで処理できないのが情けないがぎりだけど、こういうのは仕方がないよねとも思う。

「そういえば」

かなちゃんがふと顔を上げた。

「どしたの？」

「あーちゃん先輩が棗先輩のことをその、好きになったのって、どんなきつかけなんですか？」

「きつかけ？」

「はい。そういえば、聞いてなかったと思って」

「そうねえ……」

確かにそうだ。棗君のことをこういう形で誰かに相談するっていうのも初めてなんだから。そして、問われて考えてみれば、それがずいぶんと懐かしい頃の話だっていうことに気づいた。

即答しないのを気にしてか、かなちゃんが小さく付け加える。

「話したくないなら、別にいいんですけど」

「いえ、そうじゃないわ。でも……」

思わず頬が弛む。

「ずいぶん、昔のことになっちゃったなあ、って思つて」

「昔のこと？」

「告白が成功する確率が高いのつて、だいたい会つて三ヶ月くらいが限度つて言うじゃない？ それを考えたらねえ」

「どれくらいなんですか？」

「まる二年ね」

「二年？」

「そう」

目を丸くしたかなちゃんに、おどけた調子で言った。二年前——私も棗君も一年生の秋で、かなちゃんや直枝君、それにバスターズの面々がこの学校に入学する前のことになる。

「それは……知りませんでした」

「意外でしょ。結構長いのよ？」

「あーちゃん先輩らしいです。これと決めたら動かなさそうで」

まあ、そういうところはあるかも知れない。

「ね、かなちゃん」

私は軽く目を瞑った。思い出されるのは、あの春のことだ。

「よければ……聞いてくれるかしら。そのころの話」



あれは、もう2年半も前のこと。つまり、私がこの学園に入学してすぐの春のこと
で、要するに、私が棗君と出会った春、のことだ。

私の実家はちよつとだけ田舎にある。だから、それなりに成績の良い生徒は、だいた
い全寮制の進学校に通うものと相場が決まっていた。これでも地元じゃそれなりに
優秀で通っていて、天野は高校は寮生活だなどというのは、(三者面談とかで)先生や両
親にも予定調和的な事実として認識されていた。

あんまり地元を出たこともない中学生にとって、寮生活といえど、これは結構な冒
険心をくすぐられることだ。

だって、ひとり暮らしよ、ひとり暮らし！

ご飯の時間はテレビを切って、卓袱台で家族総出の夕餉時^{ゆうげ}、なんて生活をしてたわ
けだから、そりやどきどきもする。マンガの読み過ぎかも知れないけど。

とにかくそんなわけで、そもそも私は入学前から、学生寮やら寮生活やら、そこで日々起こる悲喜こもごものハプニングとラブストーリーの予感に目をきらきらと輝かせていたわけだ。ううん、やっぱりこれマンガの読み過ぎかもね。

ともあれ。

そんなわけで入寮式と入学式とを無事迎えて、新たな場所、新たな友人、新たな旅立ちが、一山いくらで怒濤の如く投げ売られ押し売られる最初の1週間の最初の日の放課後、私は逸る心を抑えたすまし顔で、寮長室を訪れたのだった。

もちろん新人生歓迎週間なわけだから、どの部活もドアを全開にして呼び込みに大わらわだ。活動場所が校舎の奥の方に引っ込んでる同好会とかはもちろん、超大手のサッカー部やらバスケット部、ESSに科学部に古典部なんかまでが校庭に繰り出して、幟を立ててメガホン片手にチラシを撒いている。

そんなわけだから、私は寮長室の前でぶっちゃけ躊躇した。ちゅうちよなぜって、そのドアがあんまりぴしつと閉められているもんだから——いや、そりや普通なんだけど、今は普通じゃない時期なわけで、普通じゃない時期に普通なことをしてるのはやっぱり普通じゃないよなあ、なんて思ったりして。

もしかして寮会執行部って、部活みたいなやり方では入れないのかしら。何かに立

候補して選挙して、あるいは推薦でももらわないといけないのかな……。

そんなことを考えつつも、まあとにかく、学校内なんだから入っちゃいけないってこともあるまい。気を取り直してノックする。はい、と中から返事が聞こえた。なるほど、一応、中に誰かいるわけだ。

迎えてくれたのは入寮式の時に見た女子寮長先輩だった（ちなみに黒縁眼鏡にショートヘアの完全インドア派と見受けられる）。何人かの寮会執行部員が黙々と仕事をしているなか、女子寮長先輩がお茶を淹れてくれた。隅っこに一応備え付けてある応接セツトのところで、そのお茶を頂きながら、話を聞いた。

なんでも例年、寮会にやってくる新入生は数少ないのだとか。意外も意外、私なんか真つ先に来ようと思つてたんですよ、と言うと、そりゃ大歓迎だけどさ、あなた変わつてゐるわね、と好意的に苦笑された。やあ、そうですか、と返事をしようとしたときだ。

「うわあーッ!？」

窓の外、叫び声——!!

誰もが咄嗟に振り向いた。その視線の先、開け放たれた窓のむこうを、人型の何かが真つ逆さまに落ちていく——!!

その光景が目には焼き付いた。スローモーションだった。ここは一階だ。やばい！ うおお……みたいな差し迫ったどよめきがあがつて——目を瞑る間もなく、スプラッタな光景が脳裏を過ぎつて——

——その足を、上からにゅつと伸びてきた手がぐつと掴んで——落下は止まった。

うええ、だか、ほああ、だか、気の抜けた声が満ちて、皆、腰が抜けたようにしやがみ込んだ。吊された男子生徒は、顔を真っ青にして無言だった。そりやそうだろう。そこに——上の方から、男の子の声がした。

「おいおい、ちよつとやりすぎなんじゃねーのか？」

まるでからかうようなその声に、窓枠に何とかすがりついて体勢を立て直しつつ、男子生徒氏は青い顔をわななかせて反論する。

「お前がやったんだろ！」

「はじめての共同作業ではあったな」

「二度としたくないよッ!!」

「まあ、そう言うなつて」

いいながら、男子生徒を死地から救った——しかし同時に、どうやら原因を作ったらしい——片手の主が現れた。

窓の上から——一体何を考えたか——ロープを伝って!!

そして体勢そのまま、すたつ、と場違いなスマートさで室内への着地を決めると、かれは口を開いた。

「はじめまして。新人生の棗恭介です——寮会の部屋って、ここですよね？」

それが、私と棗君との最初の出会いだった。あとついでに（失礼）、男子寮長氏とのね。



ありがたいことに、寮会執行部員のなかには、棗君に素でドン引き、というひとはいなかった。あとで女子寮長先輩にそつと聞いてみたところ、奇天烈な騒ぎを収拾するのために日々駆け回っているせいとか、実際やバイ級の大騒ぎ、というほどには思われなかったらしい。それはそれでどーなんだと思うのが半分、なるほど寮会執行部というのはおもしろおかしい場所なのだなと納得したのが半分だ。

ま、そんなわけで、なんだかんだ私たち三人はそのまま、寮会執行部に所属することになった。要するに何を言いたいかというと、決して一目惚れだとかそういうものではなかった、ってことだ。

出合いが最悪とかはよく聞くけど、こちらら出合いが異次元だった。パンダとかラ

イオンとかゾウとかいるじゃない。そうそう、動物園よ動物園。おもしろおかしいコトにやらないんだけど、完全に動物扱いというか人間扱いしてないというか、珍しい生き物を見る感じ。おもしろおかしいっていうより、異次元。

じつさい寮会の仕事も手際よくやるにはやるけど、男子寮長氏を巻き込んでわけのわからない騒ぎを繰り広げてたりするから、戦力的にはどうなんだろう、プラスマイナスゼロ？　せめてちよつとはプラスだと思いたいところだけど。

あーでも、男子寮長氏は基本真面目でお堅いから、棗君が引つ張りまわさなけりや貴重な戦力だったかもね。そういう意味じゃ、棗君がひとりでマイナスを稼いでたとも言えるかも。なんだか思い出したらイライラしてきたわよ？

そんなレンアイカンジョーなんてのとはさっぱり無縁の第一印象のおかげで、私と棗君は、いろいろと忌憚なく話ができる男友達、という後から考えれば得難い関係だった。

あれはたしか6月に入ったところで、ちょうど寮会執行部の先輩たちが部屋を空けていた梅雨の放課後だった。

男子寮長氏は例によって気難しそうな顔で眠くなりそうな本を読んで、棗君はその横で、持ち込んだマンガをけたけた笑いながらめくっていた。たぶんギャグマンガか何かだったんだろう。

私はそんななか、何となく所在なくなつて立ち上がり、書架の資料を引つ張りだしては眺めていたりした。窓の外にはしとしとと雨粒、横の方からは間欠泉的に沸き上がる笑い声と男子寮長氏の咳払い。

ふと、私たちがここにすることがひどく不思議に思えた。

先輩方からデコボコトリオの異名を有り難くも頂戴した私たちだ。それがこうやつて一室に集まつてそれぞれ勝手に好きなことをしているのはなんだかおかしなものだ。男子寮長氏が生徒運営の一方のトップである寮会にいるのは別にそりやそうかとも思ふけど、棗君に関してはこりやさっぱりだった。

ひょこりと書架のあいだから顔を出して様子を窺う。二人は相変わらずだ。まったく暢気なこと極まりない。私はやれやれと思つて、口を開く。

「あのさ」

ふたりが、ひょいとこちらを向いた。

「お茶でも、淹れる？」

男子寮長氏はたしか、宿題があるとかなんとかで少し早めに寮長室を出て行つた。なので、帰りは（といつても校舎と寮だから歩いて一分だけ）棗君と二人だった。

空模様は相変わらずのしとしとで、渡り廊下あたりで見ると、グラウンドのわずかな凹凸が水たまりになる梅雨だった。こういうときは、屋根でつながっているのが実

にありがたい。

「ねえ、棗君さ」

「なんだよ」

「どうして寮会に入っただの？」

棗君が目を丸くして、足を止めた。

「どうしてって、どういうことだよ」

「別に。なんとなくよ」

「ふうん……」

言々と棗君は、遠い何かを見る目になった。私の知らない何かだった。

「色々、知っておきたくてさ」

「色々？」

「ああ」

棗君が私を見た。なんだか優しい視線だった。どきり、とした。

「色々知っておけば、色々楽しいことができる。そうだろう？」

「まあ、そりゃそうねえ」

なるほど、普通の生徒が知らないであろう情報を駆使して、棗君（と男子寮長氏）の日々の大騒ぎを繰り広げているのは知っている。

「主客転倒ね」

「そうか？」

「つていうかマッチポンプ？ 学生自治組織の裏をかいて遊び回るために学生自治組織に入るなんて、おもしろおかしいいうかね」

「なるほど、そうかも知れないな」

「……？」

また、遠い目になった。一体何を見ているんだろうな。なぜだかすこし腹が立った。

「で、天野」

「ん？ なに？」

「おまえはどうなんだよ」

「どうつて」

「理由。寮会に入っただ」

「ああ、その話ね」

そういえば、私の話をしたことも、あんまりなかったかな……と、思い当たった。別に秘密の話でもなんでもないんだけど、プライベートと言えばプライベートだ。

「なに、興味あるの棗君？」

「なんとなくさ。俺の話はしたから。嫌ならいいけど」

「別にいいわよ。といつても、特に面白い話じゃないけど……」

そんなふうにして、私もまた私の話をした。そんな放課後だった。

◆ ◆ ◆
そんなこんなで秋になった。

秋と言えばもちろん、文化祭だ。学生自治を校是とする我が校のこと、文化祭もまた生徒主導のイベントとして実行される。なんでもありだけど、全部生徒がやらなきゃいけないので、確かにいい勉強にはなる。

寮会はあるまり関係ないだろうと思われるかも知れないけど、そうは問屋が卸さない。平時握っているヒト・モノ・カネを普通じゃないやり方で動かすので、麾下きかの委員会群ともども、ずんどこ仕事が降ってきて、とんでもなく忙しくなる。もちろん、入寮退寮の時期ほどではないにせよ、二大イベントの一方、という感じはあるのだ。そんなわけで、あの日も、私たち寮会執行部員は夜も遅くまで鍵を開けてもらって、仕事に励んでいた。

八時も回った頃かな。たしか、その机のところだったと思う。疲れも溜まっていた、そろそろさすがに引き上げようかと思いつながら資料を製本してたときのこと。

つまり私は、ばつさりやつちやつたのだ。

カッターナイフ。

人差し指をね。

そりやもう、どばーって血が出た。頭回ってないのもあって、もう完全にパニック

だった。うわあゝって、ひどい声を上げたと思う。

一番にすつ飛んできてくれたのが棗君だった。何を言われたか、何を言ったか、ま
るつきり覚えてないんだけど、とにかく手を掴まれたまま流し場まで連れて行かれて、
傷口を流した。そしたらアレだ、水が真っ赤に染まって——ちよつと血の色の付いた
水なのに、めっちゃくちや出血してるみたいに見えるのだ——もう大泣きだった。わけ
わからなくなっちゃったのだ。

後から考えれば、指先切ったくらいで死にやしない。でも、とにかくパニックだっ
た。そうしたら棗君、すぱつと決断した。

119番。

救急車だ。

そりゃ、破傷風とかの危険があるっちゃあるけど、冷静に考えればそこまでやるかつ
て思う。でも、棗君はやった。

思い返してみても、すごく棗君らしい行動だった。ある種のこう、見境ないところ
があるのだ、棗君には。身内にはとことん甘いというか。まあ、心配してくれたんだ
ろうなと思う。

五分もしないで救急車がついたけど、私は棗君にしがみつけばなしだった。物凄
く泣いてね。だなもんで、棗君、救急隊員に許可を取ったか取らないか、そのまま一
緒に救急車に乗り込んだ。病院についてきてくれたわけ。

まあ、誰かつきそいは必要だったんだけど。

夜も遅くて、救急外来に運び込まれて、治療を受けた。治療って言っても要するに消毒して、それだけ。まあ、指切ったくらいで他にやることもない。それで、一応つていうことだと思うんだけど、ベッドに寝かされて点滴打たれてね。

そうしたらもう、不安で不安でさ、横になってもずつと泣いてるの。点滴なんて初めてだったから、もう、気休めにもなりやしない、逆効果もいいところよ。

そしたら、棗君が怪我してない方の手を……握ってくれたのよね。

大丈夫だって言つて。頭なでてくれたかな。よく覚えてないかな。

で、何だか安心してねえ。

泣きっぱなしだったんだけど、質が変わるって言うか、不安で泣いてるんじゃないかって、気づいたら寝てて、起きたら点滴もはずれてて、それでも手を握つてくれたのね。

もう、顔、真っ赤よ。

大丈夫かって訊かれて、うんって言つたら、じゃあ行くかって。

そのまま二人で帰ってきたわ。

たぶん日が変わらないくらいの時間だったと思う。

コートも着てきてないから、ずいぶん寒かったはずだけど、なんだかぼーつとしちゃつてねえ。

棗君と別れて部屋に帰っても、のぼせた感じがとれなくてさ、そこでようやく自覚したわけ。

こりやもしかして、恋ってやつなんじゃないのかってね。

でもまあ、おばさんくさいで有名な私のことだからさ、告白とかもできないで、クリスマスもバレンタインもなにもなしで終わったわけ。なんにもなし。

寮会のパーティーとか義理チョコはあつたけどさ、それはワン・オブ・ゼムじゃない？

で、機会を逃して、かわいい後輩でも入ってこようものなら、こりやどうしたものかなって悩んだのが二月の終わり頃なんだけどさ……。

それが、棗君、突然、寮会をやめるって言い出して。

そりやびっくりしたわよ。

何か不満でもあるのかって聞いた。だって一緒に仕事したかったからね。できると思ってた。

そりや真剣に訊いた。詰問だったわね。

そしたらさ、棗君、何て言ったと思う？

妹が入学してくるんだって言ったのよ。

「ああ——」

納得、とばかりにかなちゃんが呻いた。

「話がつながりました。そういうことだったんだ」

「そ。棗君、最初っからそのつもりだったのよ。寮会にいたのは、悪く言っちゃえば要するに、バスターズのための下調べだったってわけ」

「策謀家タイプの行動ですね」

「かなちゃんに言われたくないと思うけどね、棗君も」

「まあでも、普通はびっくりしますよね。妹が入学するからって学校の人間関係まで辞めるっていうのは」

「そうそう。いったい何言ってるのかさっぱり判らなくてさ。もうほんとに——断絶を感じたわ。ま、今となれば、一年生の頃の棗さんの様子みれば判るし、それに、直枝君たちも入学してきたわけだから、分からなくもないんだけどさ。でも、当時は泣いたなあ。いつそ私も辞めちゃうおうかつて思った」

「でも、辞めなかったんですね」

「結局はね。当時の寮長——あ、そのころはもう、元寮長か、とにかくその先輩に止められたのね。何て言ったと思う？」

「さあ」

『無理心中なんて、いい女にする事じゃない!』 って」

「無理心中!」

復唱してかなちゃん、思わず笑った。

「すごい言いぐさよね。無理心中よ無理心中」

「大時代的というか、昭和の映画みたいというか」

「そうそう、思わず笑っちゃって、それで——ずっと何かが抜けてね。よし、あたしはここにしよう、って何となく思ったのよ。何があつたか知らないけど、とにかくここは棗君の居場所だった。そりゃ見てるから判る。絶対よ。そうね、だから私は、そこを守ってやろう——って思ったのかもね」

「かつこいいじゃないですか」

「恋する女は恐いわよ?」

「そうとも言いますね——それで、直枝たちが入学してくる、と」

「かなちゃんもね。だからあれが、かなちゃんと会う少し前の出来事ってわけ」

「それ以来、棗先輩とはいわゆる友達だと」

「そうね。仲のいいクラスメイト——ああ、二年の時はクラス違ったかな。教室近いし、廊下で遊んでれば顔も会わせるけど。でもね」
ちよつとだけ言葉を切る。

「要するに棗君って、二年生からは、バスターズの棗君、になったのね。一人だけ年上って事もあって、急に大人っぽくなっちゃってさ。あの悪ガキが何やってんだかって」

「欲目ですよ」

「そうかもね。そんな感じでもう一年半も経ってさ、忘れられないんだから、まったく未練がましい女よねえ、私も。イヤになっちゃう」

「……」

「でもさ、二、三年生の棗君を見てるとき、大切なものがあるんだなあって思うんだ。棗君ときたらバスターズで青春を謳歌しちゃってさ。それを邪魔しちゃ、女が廃るってモンでしょ？ だから私は、寮会にいて——ま、寮長になっちゃったしね、棗君のことを見守ってあげようって思ったわけ。で、今に至る……ってね。どう、かなちゃん。結構悲惨でしょ？」

おどけた調子で言う。悲惨な話を悲惨な口調でしたくはない。

「……きつと棗先輩も、感謝してると思いますよ」

「感謝？」

「黙ってみてくれるなんて、そうそういませんよ、そんないい女」

「それっておばさんくさいってことだよね？」

「ま、少し落ち着きすぎっていう感じはしますけど」

二人して何となく笑う。

「でもあーちゃん先輩、話を聞いていて、なんとなくですけど、勝算がありそうな気がしてきました」

「あら、そうかしら？」

意外な反応に興味津々だが、ちよつと抑えめに問うた。

「春がくれば、棗先輩はもう、この学校にいられませんからね。バスターズの面々とも別れることになる。それはあーちゃん先輩も同じですけど……でも、生活が変わっていく機会ですから、チャンスはあるはずです。少なくとも、バスターズが安定していた頃よりは」

「ま、そうとでも思わないと、やってられないわね……」

別れる、という言葉はちよつときついけど。若干凹む。まったく、この件に関して打たれ弱いことこの上ない。

「そういえば、棗先輩は、東京——でしたよね」

「うん……そう聞いている」

就職先のことだ。そして私は大阪——というのを、かなちゃんは知っているはずだ。ついでに言うなら、棗君も。

「勝負、ですね」

「そうね……」

実際、四月を迎えてしまえば、もう二度とチャンスはないだろう。いかにバスターズとはいえ、卒業してからの東京と大阪の距離は、ほとんど無限遠と同義なのだ。

春のことを思う。遠くて差し迫った春だ。

その道のりを想像して、私はため息をつこうとして——やれやれ、と無理矢理苦笑に変えた。

粉雪舞う十二月 あーちゃん先輩バスターズに来る

猫騒動！

十二月も半ば、期末考査も終われば、学生諸氏の話題はもちろん、緑と赤と白と金、すなわりクリスマス一色に染まる。

バスターズもそれは例外ではなくて、何でも全員集合、総勢十一人でのパーティが予定されていると風の噂だかで聞いた。たしかバスターズがあんな大所帯になったのは今年からだから、棗君はそりゃ張り切るだろう。大いに盛り上がるパーティになるに違いない。頑張れ棗君、それいけ棗君！

……はあ。

そんなことを考えながら私は、例によって机に突っ伏していた。こうして寮長室に入り浸るのもなんだか、日常になってしまった。

その頭の上を、廊下をわいわいと歩く女生徒のだれその言葉が通り過ぎていく。

——ねえ、クリスマスって……

——あるよ、みんなで……

うはあ、と妙な声が出た。ちくしょう、みんな幸せになつてしまえばいいんだ！

「そういえば天野先輩は……」

「どーせあたしはクリスマスに予定のひとつもない寂しいおばさんですよ……」

我ながら恨みがましい声になつてしまった。恋煩いは順調に悪化しているようだ。

「かなちゃんと直枝君は、バスターズでクリスマスパーティーでしょ？」

「あ、はい」

そのあとどーせ二人でらぶらぶな夜を過ごすんでしょ——と思わず皮肉が口を衝きそうになつた。あぶないあぶない、ひとに八つ当たつてどうするんだ。

「それに、その……棗君も来るんでしょ……？」

棗君に予定があるなら、そりや私としても誘いようがない。へたれを正当化する理由が出来てしまえば、足もすくむ。

まったくかなちゃんがうらやましいものだ——ともやもや考えていたときのことだ。

ばあんと派手な音がして、寮長室のドアが開いた。反射的に顔を上げた。

「理樹っ！」

駆け込んできたのは棗さんだった。かなちゃんが目を剥いて、私は呆氣にとられた。と、直枝君が私たちを目線で制して、

「どうしたのさ、鈴」

つとめて平静を装って訊いた。

「そ、それが……」

棗さんは動揺したまま、口を開く。



洗濯室置き場は酷い有様だった。壁から天井まで、びしょ濡れで、洗濯が終わって籠にあげてあるものまで、もう一度洗わなくてはならないみたいだった。

「……」

かなちゃんと私は、その有様に絶句した。これでは、掃除するにもひと手間だ。これまた直枝君が訊く。

「なにがあつたの、鈴」

「それが……」

棗さんが話すには、猫のテヅカとホクサイが、なにやら大げんかをやらかしたらしい（すごいカードだ）。勝敗はともかく、テヅカは結構ひどい傷を負っていて、とにかくにも傷口を洗って消毒をしてやろうと洗濯室の蛇口のところに付れてきたところ、大暴れしたのだそうだ。傷口を流すのは、それはそれなりに痛いだろうが……。

「それで、ホースのさがが抜けて、こうなった、と」
しゅんと項垂れたまま、棗さんは頷く。

鈴曰く、蛇口にはホースが刺さっていて、その蛇口はひねりっぱなしになっていた。ホースの先につけられたレバーのところで水が止まっていたわけだ。

ところが、テヅカが暴れて、ホースとレバーの繋ぎ目が外れてしまったと。そうなればもう、ホースは水をぶちまける巨大な蛇だ。洗濯機室が水だらけになるのも頷ける。「すぐにとめたんでしょ？」

「びつくりして、蛇口を閉めればいいって気づくのになちよつかかった……」
しばらく水を吐き出すホースと格闘していたってことか。まあ、びつくりはするだろうけど。

「ごめんなさい……」

棗さんはそれだけ言うのと、口をつぐんだ。直枝君がかなちゃんに視線を向けた。女子寮長はかなちゃんだ。しかし、かなちゃんは（どうするの）とばかりに直枝君のほうを見返す。棗さんと僕の付き合いの長さを知っているが故だろう。しかし、どうしたものかと直枝君もとても困った顔をした。

ふと、思いついた。

「棗さん」

声をかけると、棗さんは僅かに首をあげた。

「テヅカは？」

「わからない……」

言って棗さんは力なく首を振る。やつぱりそうか。なら、まずすべきことは、明らかだ。

「それじゃ、そっちが先ね。これ、棗さんでしょ？」

私は、そばに置かれた救急セット取り上げると、棗さんに押しつけるようにした。

「え……」

「ここはあたしたちがなんとかするから、テヅカをよろしくお願いするわ」

「でも……」

困った顔で棗さん。この惨状を放っておくのは、さすがに気が引けるのだろう。棗さんも成長したものだ、と妙なところで感心しながら、私は言葉を重ねる。

「棗さんが悪いんじゃないから、気にしないで。それに、棗さんの猫は私の猫って言っじゃない？ テヅカは最近、なんだか気が立ってたからね、私も心配してたのよ」

「寮長……！」

その顔がぱつと輝く。

「ありがとう」

「いいのよ、行つてらっしゃい」

「うんっ！」

棗さんはそれこそ脱兎の如く駆け出していった。余程テヅカが心配だったのだろう。

そして洗濯機室には三人が残された。

「どうするんです、あーちゃん先輩？」

かなちゃんが呆れたように言う。

「ま、何とかするしかないんじゃない？」

「はあっ……」

ため息。

「そんなことだろうとは思つてましたが、あーちゃん先輩も手伝ってくださいよ？」

「もちろん。判つてゐるって……直枝君もね？」

「はい。これでも寮長ですから」

「で、ちよつと直枝君、むこう向いて貰えるかしら？」

「はい？」

私はここぞとばかりににつこりとした。

「大掃除の前に、ここにある洗濯物、一度あげちゃいましょう。いかに直枝君といえども、オンナノコの洗濯物を触らせるわけにはいかないからね」

ここが女子寮の洗濯室、という重大事実に気づいて——直枝君は一瞬で赤面して、壁に向き直ると目を閉じた。にゅふふ、と笑って隣を見ると、かなちゃんの殺人的な視線が直枝君の背中に突き刺さっていた。

力仕事に汚れ仕事となれば、寮会執行部員は案外強い。洗濯機を動かして、その後の壁をぞうきんで拭く。寮会の仕事はこういう地味な仕事が多いから（デスクワークばかりとはいかないのだ）、慣れたことではある。

ともあれ、掃除が終わったのはたつぷり一時間以上は過ぎた頃だった。

日は沈んで、夕食の時間だ。

掃除道具を片付けて、とにかく女子寮の外まで出てきた。

寮長室はもう、鍵が閉められてしまう時間だから、途中で荷物は取ってきてあった。諸々残っている仕事はあるが、それは明日片付けることになるだろうな。かなちゃんがそれに気づいたか、遠い目をした。

そこに現れたのは、棗さんだった。

「お疲れ様、棗さん」

「う……ありがとうございます」

声をかけると、おっかなびつくり、それでも棗さんは感謝の言葉を口にする。

「で、テヅカは？」

「見つけた。きょーすけにも手伝ってもらって、校庭のの洗い場で傷口を流して、消毒しておいた。今はあたしの部屋にいる」

「そっか。安心したわ。申し訳ないんだけど、しばらく面倒見てくれるかしら？」

「うん……」

そして、おずおずと切り出す。

「洗濯室は……？」

「万事オッケーよ。私たちが片付けておいたわ。」

「ごめんなさい……」

棗さん、再び肩を落とす。

「いいのよ、気にしないで。暴れるテヅカの面倒を見られるのは棗さんくらいだから、お互い様よ」

「うん……ありがとう」

再び感謝の言葉。そして、少し迷ったようなふりのあと、言う。

「あの……よかったら、テヅカの様子を見にきてほしい」

それは有り難い提案だった。実はちよつと気に掛かっていたのだ。テヅカは結構やんちゃだから。

「もちろん！ 棗さんの部屋よね？」

「うん」

「それじゃ、行きましようか。二木さんは？」

声をかけると、かなちゃんは何を思ったか苦笑した。

「私はいいです。猫に好かれるタチでもないですし……刺激しない方がいいですよ、きつと」

「それもそうね」

私も僅かに笑いかえす。そして、

「それじゃ行きましようか、棗さん」

言って、女子寮に向かって歩き出した。棗さんが、たたつと走って、私の横に並んだ。

猫缶と招待状

冬の町並みをふたり歩く。お互い、両手の買い物袋にどつさりの缶詰。無論猫缶、相棒は我が偉大なる猫仲間、棗さんだ。

「大収穫だな」

棗さんが、何度目かの満足を呟く。ペットショップは幸運にもモンペチのゴールドデ

ン味（どんな味なのかはよく知らないけど）の大放出で、これだけあれば猫たちも安心して年が越せようというものだ。

「そういえば棗さん、テツカの調子はどう？」

「悪くない。傷口も普通だし、もうすこしで普通に歩けると思う」

「それはよかったわね」

「手当が早かったからな。寮長のおかげだ」

「気にしなくていいのよ。寮会って、そういうときのためにあるんだから」

「大変じゃないのか？」

「棗さんの口調がすこし変わった。」

「大変って？」

「みんなそういうことはやりたがらない。日直とかと同じだ。いや、日直より大変だろうな。そうだろう」

「ま、そうね。楽な仕事じゃないわ」

「それなのに、なんでやってるんだ？」

「そうね……」

理由はいくつもある。結局そこが私の居場所になった、つていうのが一番大きいかも知れない。人の世話を焼く仕事が性に合ってるっていうのもあるけど。

それとも、そこがかつて棗君がいた場所だから、だろうか？

「どうした？」

急に黙り込んだ私に、棗さんの少し心配そうな声。

「いえね」

真相のバランスなんて判らない。

「なんでだろうなあ、つて思つて」

「わからないのか？」

「色々あつてね」

「そうか……」

棗さんは、ちよつとだけ遠くに目をやると、

「あのな」

「なに？」

「なんだか具体的にあげられないけど、とにかくみんな、寮長に感謝してると思う。」

大感謝だ」

「あら、うれしいこと言ってくれるじゃない」

「ほんとだ！」

「ん……ありがと」

言うと棗さんは、少し顔を赤くした。

「それに、理樹とかなただけじゃ、まだまだ不安だ。寮長には、なんていうのか？ ししょー？ になつてびしびしきたえてもらわなくちゃ困る」

その妙にお姉さんぶつた言葉に、思わずくすりと笑いが漏れた。

「私はオビ・ワン・ケノービ？」

「けのび？ 水泳か？ こんな寒いのに？」

ぽかんとした棗さんの顔が可愛い。このために軽口を叩くことが、実は結構ある。

「冗談よ……でもね、棗さん」

「何だ？」

「今の寮長は、直枝君とかなちゃんだからね。もう、ふたりでしつかりやっていけるはずよ。あとは、卒業するまで見守ってあげることしか、私のやることも、出来ることも、それくらいしかないの」

「ふうん、そんなものか」

「そんなものなのよ。実際、この季節になつて、まだ寮会に顔を出してる先輩なんて、あんまりいなかったからね。前寮長ならなおさら……」

そう自分で言つてみて——自分の言葉にはつとした。そうか、もうそんな季節なのだ。寮長継承なんてちよつと前のことだと思つていたのに——。

「そろそろ、お別れしないといけないかなあ……」

思いが呟きになつて漏れ、十二月の灰色の空に吸いこまれていく。

「寂しく、ないのか？」

ぽつりと棗さん。

「寂しさを背負うのは、先輩の役目だからね。老兵は死なず、ただ消え去るのみ。若人の仕事は、お祭りよ」

「……」

「……ガラでもない話しちゃったわけ。ごめんなさい。でも、訊いてくれてありがとう。自分が『老兵』だつてこと、ちよつと忘れてたわ」

ただ消え去るのみ。

幽かな思いの欠片を残して、ただ消え去るのみ――

「寮長」

「……棗さん？」

棗さんの言葉が私を現実に戻した。

「いいことを思いついた」

その声が妙に自信満々だ。

「いいこと？ なにかしら？」

「あんな、寮長は、寮会を辞めたら、バスターズに来ればいい」

「はあ？」

思わず変な声が出た。なんだそれ。

棗さんは得々と語る。

「バスターズは永遠に不滅だ。引退とかも特にない」

「でも——卒業はあるわよ」

「それはそうだが、少なくともそれまでは引退はないぞ」

棗さんの言葉に——ある種の打算もあるのを判りつつ——私は惹かれた。

「……野球をするの？」

「いや、最近はゾリオンが多いが……とにかくこんど、クリスマスパーティーがある」

「クリスマスパーティー？」

「寮長もくればいい」

「行つて、いいものかしら？」

「寮長ならみんな大歓迎だ。かなたもそうだった。そうだ、テヅカのお礼ということにすればいい。うん、それがいいな！」

棗さんは一人で盛り上がっている。

「どうだ、来るだろ、寮長？」

「え……う、うん。せっかくのお誘いだから、そうさせてもらおうかな」

「うむ、それがいい！ 決まりだな！」

棗さんが大きく頷くと、くりっすまーす、くりすますー、と妙な節で歌い始めた。

神北さんの癖が移つたのだろうか。

ともあれ、妙な展開になったものだ——と内心私は頭を搔いた。

嬉しき半分、こわごわが半分——まあ、今年のクリスマスは、退屈だけはしないですみそうだった。



そしてその翌日、棗さんから手渡されたのは、クリスマス・パーティーの招待状。なんとバスターズ全員の連名だった。みんなの一言づつのなか、かなちゃんの「普段通りでどうぞ」、直枝君の「みんな待ってます!」、それに、棗君の「期待の新人現る!」が妙におかしくて、私は思わず微笑んだ。

クリスマス・パーティー!

「それじゃいっちょ景気付けに、クド公つ!!」

「はいっ!」

ぱぱあん!

能美さんと三枝さんがクラッカーをならすと、わあつと皆が歓声を上げた。

男子寮、直枝君と井ノ原君の部屋、要するにバスターズのたまり場たるここ。もちろん、私が入ったのは、今日が初めてだ。

その歓声が収まらないうちに、棗君がひととき大きく声を上げる。

「それじゃみんな、今日は天野も含めて……楽しもうぜ。メリー・クリスマス！」

「「メリー・クリスマス!!」」

唱和してグラスをぶつけ合うと、またクラッカーが鳴った。

「いやっほーう！」

宮沢君だ。やもすると井ノ原君よりアホの宮沢君が、クラッカーをばんばん消費している。飾り紙が宙を舞い、わずかな煙がパーティに華を添える。

グラスを傾けると、ご禁制の代物が喉を焼く。うむ。いい気分だった。

「あーちゃん先輩、羽目外しすぎないで下さいよ」

「大丈夫、わかってるって！ ハレの日のご禁制はっ！」

「「見ざる言わざる聞かざる」」

かなちゃんと直枝君が復唱した。

「上限度数はっ！」

「「三パーセント」」

「よろしいっ！」

顔いてまた一口。寮会裏規則その一及び付則。今回は、運用する側にも運用される側にもある私たち、やり放題な立場ではあるが、一応その規則は守っている。はずだ。

「天野さん、七面鳥食べますか？」

「ああ、能美さん、ありがとう。いただくわ！」

えきぞちつくを自称する家庭科部員・能美さんの大活躍で、実にパーティーパーティーしている食卓だ。もちろん、私や二木さんも一緒に作った。

それに、棗君もいるのだから、主張するチャンスでもあるし。

と思っていると、

「お、このホワイトシチュー、旨いな」

棗君が言う。よしっ！

「それは天野さんがつくったのですよ」

ナイスフォロー能美さんっ！

「へえ、天野がか。やるじゃないか」

「シチューの元を使つてないのよ。いちから手作り。なかなかのものでしょ？」

「自分で言うなって……だがまあ、腕は確かのようにだな」

その笑顔！ 心の中でガッツポーズ。しっつ、ごく当たり前のような顔をする。

「このくらいなら、いくらでも作れるわよ」

「へえ、そいつは心強いな」

言つてまたホワイトシチューに戻る。その姿にちよつと見入つた。

「あーちゃん先輩」

かなちゃんの声で我に返つた。

「顔、ものすごくにやけてますよ」

かあつと血が上る。

「そ、そりやまあ、つくつたものをおいしく食べてもらえれば、幸せよね！」

「俺は食べてるほうが幸せだな」

その棗君の言葉が追い打ちだ。たぶん自覚してないだろうところが憎らしい。

「これだから男の子はねっ」

言つてグラスを呷る。呷つてむせた。げほげほとやると、かなちゃんがティッシュ

を差し出してくれた。その向こうで棗君はホワイトシチューをほうばっている。やれ

やれだ。

「天野先輩からすると、恭介も『男の子』なんですな……」

感慨深そうに直枝君が言う。

「そりやあ、そうよ。同期だからね」

「バスターズには、いないですからね」

「ま、兄貴分つてとこよね。あの棗君が」

「あのつてのは何だよ、天野」

不満そうな顔で棗君。反撃のチャンスだ。

「あの悪ガキがつて意味よ。一年の春の……」

「あーあー、悪かった。俺が悪かった。すまん天野」

「判ればよろしい」

皆まで言わんと降参だった。

「恭介氏がやりこめられるとは、なかなか珍しい図だな」

「デスネ。なにしろここじや、姉御と恭介さんは、無敵キャラで通してますからね！」

来ヶ谷さんと三枝さんが、興味津々とばかりにこちらを見て言う。

「あら、騙されてるわよそれは。棗君も兄貴風吹かせすぎじゃないの？」

「ふっ……あの頃の過ちは、そうは繰り返さないさ。人は成長するものだけ、なあ、理樹？」

「え、あ……そ、そうだね」

直枝君が同意する。

「確かに、恭介が一年生の頃のことは、あまり知らないな」

「興味あるなら、教えてあげまようか？」

「シャラップ天野！」

「貸しひとつね！」

「それを人は脅迫というんだぞっ！」

棗君の額に汗。まあ、あの諸々を全部バラされると思えばそれも無理ないことだろう。にゅふふ。

「恭介さん、またやりこめられてるねえ」

「なのですっ」

三枝さんと能美さんが顔を見合わせて笑った。



かなちゃんと直枝君によると、この手の集まりはなにかの機会につけて行われているという。近いところだと、かなちゃんたちの誕生日（これは十月十三日だ）や十月三十一日のハロウィンなんかのイベントがあつたそうだ。

ちなみにハロウィンにあたっては、巨大カボチャを買ってきては中身をくりぬいてジャック・オ・ランタンを自作、その中に蠟燭を点し、あとはひたすらお菓子を食べていたという。広大な学生寮を舞台にしたトリック・オア・トリート計画が却下になったのは、かなちゃんのいささか冷ややかな説得の結果であつたらしい。

そんな勢いだから、バスターズのこのクリスマスパーティも、がつつり気合いが入っていた。

女の子陣の手作り料理の数々、紙リボンにふわふわの綿、星やトナカイやソリのオブジェにデコレートされた部屋も目を惹くが、なにより圧倒的な存在感を放っているのが、本物の——生きている——もみの木を使ったクリスマスツリーだ。天井の高さのほぼいっぱいの若木に、きらきらと七色に輝く電飾が施されていて、そのてつぺんには大きな星が飾り付けられている。例によつて棗君がどこから調達してきたのだそう。重要かつ無駄なところで発揮されるバイタリティはさすがという他ない。

そしてもうひとつ、非日常を演出しているのが——皆の装いだ。壁にもたれかかり、グラスを手にしたまま、ひとりひとりのその姿を眺める。

まず、棗兄妹がサンタクロース。コート、ズボン、帽子の赤を、白いふわふわが縁取る王道スタイルだ。棗君はそれに長いつけ髭、棗さんはどつきりとお菓子の入った真つ白な袋を背負つてご満悦だ。

井ノ原君と宮沢君はいつもの格好だけれど（これはポリシーなのだろう）、ふたりともなぜか頭にお星様のかぶり物。結構大きい。ガタイのいい肉体派ふたりがお星様とは、頑張つて好意的なことを言えば、なかなか印象的なバランスだ。

能美さんはどういうわけだか、犬耳をつけている。犬ぞり？ まあ、三枝さんチョイスだろうが、こんなに犬耳が似合う子もそうそういない。自然体過ぎて、ほとんど仮装になっていない。

その三枝さんはなんと、キリスト教カトリックの神父の格好をしている。そんな服

どこで手に入れたんだとか、宗教的真摯さの問題とか色々あるけど、ここは敢えて突っ込まないことにしておこう。日本人の宗教観だから、まあ、そんなものだ。ドラクエだつてそうだし、なんて。

話を戻して、神北さんは、雪だるま——これは着ぐるみで、まんまるとあつたかそうだ。赤いマフラーと黒いシルクハット。手袋にステッキはさすがに外して横に置かれていた。

西園さんは淡々と鼻眼鏡。クリスマスとさつぱり関係ないあたりがシュールだ。

来ヶ谷さんは棗兄妹と同じサンタクロースだけど、こちらはスカート、おまけに超ミニ。おっぱいぼーん（三枝さん談）のうえにこれだから、もうどうなんだ——とは思うが、皆慣れたもので、一通りツツコミを入れるとあとは誰も気にしなくなった。

直枝君とかなちゃんはといえば、ふたりでおそろいのトナカイの衣装だ。オンナノコ向けの短いワンピースの下にジーンズ、それからツノのついたカチューシャ。直枝君にしたら女装だ、これは。おまけに直枝君の鼻には赤い球体がつけられている。真っ赤なお鼻のトナカイさん、というわけだ。中に豆電球でも仕込んであるのか、ぼんやりと光を放っている。熱くないのかな、あれ。

そんな彼らが、ひとつの部屋に集まって、わいわいがやがやとメリー・クリスマスだ。正直ちよつと突き抜けすぎているような気もするけど——ともあれ、料理に衣装に装飾にと、まったくここまで白熱したクリスマス・パーティははじめてだった。

そして私はそのとき、なるほどと、はじめて腑に落ちた。これがバスターズなのか、と。

楽しむためには全身全霊——この青春^{イマ}を駆け抜けろ。

小さく息を吐くと、BGMに小さく鳴らされているクリスマス・キャロルが急によく聞こえた。やわらかなメロディが心地いい。顔が火照っている思ったよりお酒が回っているようだ。やっぱり緊張してるのかも、私——。

緊張？ そうだろうか。

その表現は何か違う気がした。こんなお祭りの場において、たのしい、不安、わくわく、どきどき、そして恋、そういった類の色々なアンバランスがないまぜになって、気分がすつごく高揚している。そこにアルコールがしのびこんできたのだ。

ほんとうにアルコールの回ること回ること——これは少し頭を冷やしてきた方が良くかもしれない。そう思っただけで立ち上がる。

サイレントナイト・ホーリーナイト

直枝君の部屋から廊下に出ると、室内の熱気の凄まじさに気づく。ガラスの内側一面に水滴がついていたからそりやそうかとは思うけど、それは中にいるときには決して気づけない熱狂だ。

この時間の廊下は薄暗い、コートを羽織り、きちんとボタンを留めてから男子寮を出る。

ふらふらと女子寮のほうに足を進めて、その真ん中あたりで、ふと空を見上げた。雨は夜更け過ぎに、雪へと変わるだろう――

いましも、闇に閉ざされた空から、ちらちらと、白いものが舞い降りてこようとしていた。

ほお……と息とも声ともつかぬものが漏れた。

冬だった。寒い季節。暖かい季節。人肌が恋しくなる季節。春のさきがけ。

「ホワイト・クリスマス、か……」

そんなロマンチックなものではない。どちらかというと馬鹿騒ぎだ。棗君一味、バスターズは、こんな日でも変わらない。

なんとなく、そのまま足が止まる。直枝君の部屋に――バスターズに戻るのがため

らわれた。

あそこは、あたたかい。どこまでもどこまでもあたたかい。だから、果たしてそこに自分が居ていいのか、全く自信がない。あそこは棗君の王国で、私は異邦人であり、もしかすると、あの場所のあたたかさそのものに対する侵犯者だ。だとしたら、そんな暴虐は許されない。

雪は粉雪、永遠の繰り返しのようにさらさらと降る。ポケットから手を出して空にかざすと、雪は私の体温ですつと溶けて消えた。いつそ、こんな風に消えてしまえばいいのだ。

じわりと涙が浮かぶかと——その瞬間、

「天野？」

私を呼ぶ声がした。



「雪だな」

彼は——棗君は私の隣に立つと言って空を見上げた。

「初雪かしら？」

「ああ、確か」

棗君は空を見上げたままだ。

「どうしたの？」

「それはこっちのセリフだぜ」

ようやく棗君の視線がこちらを向いた。

「なかなか戻ってこないから、どうしたのかと思ったらこんなところで……」

その語尾が消える。

「子供じゃないんだから、大丈夫よ」

「だからこそつて事もある」

「あら、心配してくれてるの？」

「……何だか、やたらとテンション高かっただろ、お前」

どきりとした。平静を装う。

「そうかしら？」

「緊張すると口数が増えるんだ」

「……」

よく知ってるわね、と軽口を叩こうとして失敗した。どうやら、これは相当だ。

「せっかくのクリスマスに、鈴が無理矢理誘っちゃって……なんか、すまん」

「そ、そんなことない！」

遮る声が上がった。棗君がびっくりしたように顔を上げる。

「あ……ただ、」

何かを言おうとして——ごく自然に、想いが口に出た。

「——棗君、居場所つくったんだなあって」

ふと、棗君の顔が、優しい微笑みに変わった。

「ああ」

小さく力強い頷き。そして、少しづつが悪そうに続ける。

「寮会を抜けちまったのは、その……悪かったといまでも思ってる。すまなかったな」
その言葉に驚いた。態度でなんとなく判ってはいたけれど、言葉にされたのははじめてだったのだ。一瞬、色々な想いが去来するが、しかし私は意図的に頬を緩めてみせた。

「……いいのよ。そりゃあの時はずいぶん頭にきたけどね、今なら判るわ」

その場に顔を出してしまえば、嫌でも判ってしまう。棗君が何を考えて、何のために寮会を辞めたのか、その判断が正しかったのかどうかも。

「苦労したのは、主に男子寮長氏だしね。彼の面倒は、裏で見てたんでしょ？」

「まあな」

「だったら言うことないわよ」

私の淡い恋心を除いて——とは言わない。言えない。

「ただ——」

今でも思うのは。

「——私も誘ってくればよかったのにね」

今度は無言だった。棗君は何も言わず、口元をきゅつと締めた。それが不思議にも……まるで泣きそうな顔に見えた。

「つ……」

慌てて表情を切り替える。これも意図的だ。

「ごめんごめん！ そんなつもりじゃないんだって。冗談よ冗談！」

手を大げさに振って見せた。

今のは失言だった。侵犯だった。本音だった。こんな日に——言っていることじやなかった。

棗君は空を仰ぐ。

雪が降っている。

降り続けている。

「天野」

ぽつり、言う。

「な、なに？」

「今日——楽しかったか？」

「――」

どちらかというと、苦しい、のほうが大きい。だって私は恋をしている。だけど、楽しいかどうかと問われれば、それはもちろん答えは決まっている。

「うん――もちろん」

「そっか」

棗君は――破顔した。そして親指を立てると、言った。

「合格！」

「は？」

思わず素で突っ込んだ。何だそりゃ。

「何によ？」

「バスターズの入団テストだ」

「にゅ、入団テスト!？」

ボール投げたりバット振ったりってことか。

素振りの仕草を見ると、棗君は、そうそう、それだ、と笑う。

「えーと、二軍からかしら？ それとも育成選手？」

「バスターズは全員一軍だ。しかも、試合があれば必ず出場することになっている」

「私、野球のルールなんてあんまり知らないわよ？」

「それはおいおい勉強すればいいさ。マンガを貸してやるから」

「マンガなんだ……」

とりあえずマンガで始めてみる。棗君にありがちなことだ。

「とにかく」

バスターズのキャプテンの顔で棗君は言った。

「入団テストに合格したんだから、明日からちゃんと参加すること。な？」

「明日からって……」

だって、あと三ヶ月しかないのだ。だが、私の思いを察したか、棗君は言う。

「時間の長さは関係ない。ただ、この青春^{イマ}を駆け抜けるだけさ」

その、まるで子供みたいな言いように――

「そう言われちゃ……」

私は思わずくすりと笑みを漏らした。

「仕方ないわね」

「そうこなくちゃな！ それじゃ今日は、天野入団祝いも兼ねて――しまった！」

「どうしたの？」

「そろそろケーキを切るんだって――だから探しに来たんだ。みんな待ちくたびれるかも知れないぜ」

「あら、それは大変ね」

「行くか」

「そうしましょ」

ふたり自然に、男子寮へと足を向けた。

歩き始めると、改めてちらつく雪に気づく。

男子寮に入る直前、私は口を開いた。

「棗君？」

「ん？」

「メリー・クリスマス！」

きょとんとした顔が、私の大好きな笑顔になった。その笑顔で、棗君が応えた

「ああ——メリー・クリスマス！」

静かな年の瀬と大掃除（直枝理樹の補記）

そんなわけで、バスターズの一年は、こうして幕を閉じた。

終業式は二十二日に終わっているから、二十四日の夜、クリスマス・パーティが終れば、寮生のほとんどは実家へと帰る。

夏休みなれば、クドみたいに学校で趣味に走った実験をするとか、延々図書室で読

書するとか、運動部なら部活の練習とか、お盆前後の時期以外には結構残っている寮生も多いのだけれど、冬休みとなればそうでもない。そもそも年末年始の短い休みだし、概ねずっと実家にいる、という生徒が多いのだ。

バスターズのみんなも、二十五日、二十六日あたりには、ぼつぼつと実家に帰ってしまった。県下有数の全寮制進学校として知られる当校のこと、聞いてみれば、みんなの実家は相当にバラバラだった。東西に広いこの県の、県西の大きな湖の畔もあれば、東の半島という子もいる。飛行機でテヴァに飛んでいったクドなんかは、まあ、例外 فقط。

ともあれ、年の瀬も迫る十二月二十八日、最後まで寮に残っていた来ヶ谷さんが去ると、残されたのは、僕と二木さんのふたりとなった。

さて、寮会とは言えば、こちらも早々に店じまいとなっていた。

長い夏休みや（事情は既述の通りだ）、寮生の入れ替わりで地獄の繁忙期となる春休みと違って、寮会の冬休みは一般寮生のそれと変わらない。ごくごく平穏な休みになる。

基本的な業務は終業式の日には終わって、あとはクリスマス周りのどんちゃん騒ぎにやんわりと釘を刺すくらい。二十六日になればもう、仕事はないも同然だ。寮長室には僕と二木さんの直通電話番号を張って鍵を閉めてしまった。

そんなわけで、僕と二木さんは、主に二木さんの部屋で、久しぶりのまつたりのん

びりとした休日を過ごしているという次第だった。



「直枝、大掃除しない？」

「大掃除？」

十二月二十九日、今年も残すところあと三日の遅い朝。

ご飯に味噌汁に焼き魚、という二木さん好みの朝ご飯を食べながら、そんなことを二木さんは言った。

「大掃除って、どこのさ」

「直枝の部屋と私の部屋。ここは窓ふきとか、普段しないところの掃除をするくらいだけど、直枝の部屋、まだ片付いていないでしょう？」

「まあ、そうだね」

男の二人部屋だ、そりゃ、そんなに綺麗ってワケでもない。おまけに、あのクリスマス・パーティーの後片付けも、十分じゃない——もちろん、食物類と水回りだけはきちんと片付けてあるけど。

「なんだか、今日は時間がありそうじゃない？」

「そうだねえ……」

デート……と考えるはしたけれど、年の瀬の市は早くても明日って感じだろうし——
せつかくだから、混雑を楽しみたい——確かに一日時間がある。

「うん、やってみようか、大掃除」

「その意気よ、直枝」

二木さんは妙に意気込んで言うのと、茶碗を持ち直すと、がつつりと気合いを入れるかの如く食事を再開した。

まず最初にとりかかったのは、二木さんの部屋だった。

「前哨戦よ」

とは二木さんの談。基本的にはきちんと掃除をしているから、表側は特にやることもない。窓と床を雑巾で拭いて、本棚の裏とか普段動かさないものの裏を掃除する。重いものを動かすのにちよつと手間取ったけど、それでも小一時間もすれば仕事は終わった。

終わると、この三階の窓の外の雪景色と、澄んだ空気に映える山がくつきりと見えた。

「掃除した甲斐があつたね」

「そうね」

言葉少なな二木さんも、満足そうだ。

腰に手を当て、ふん、と鼻を鳴らす。そして仰る。

「ここからが本当の戦いね」

そのとおり、戦いが始まった。

僕の部屋は、そう物が多いわけじゃないけど、二木さんの部屋に比べたら、そりや毎日掃除をしつかりできているというわけでもない。机の隅とかも、見れば埃が溜まっている。見ない事にしてきたツケだ。

「直枝は井ノ原のほうをやつて。私は直枝のところをやるから」

「うん、わかったよ」

一瞬どうかと思つたけど、確かに逆はない。真人の領域を二木さんに見せるのは、ちよつと忍びないし、僕は特段、二木さんに隠す物もない。

ああ、オトナ向けの本の諸々も、とつくに摘発されて夢の島行きだから、心配する必要はないな……。

「なに遠い目をしているのよ」

「いや、人生の理不尽について、ちよつとね……」

「何よ、それ？」

「僕が真人の方だね？」

「そうだけど」

ともかく手を動かし始めると、二木さんは、なんだかわからないけどまあいいか、みたいな顔で掃除をし始めた。まあ、彼女に掃除して貰うっていうのも、よく考えてみれば得難いシチュエーションではある。

気を取りなおして、真人の机の上のものを、ざっと床に下ろす。メインは筋トレグッズだけど、学校の机に突っ込みっぱなしの教科書が、まとめてどさりと置いているのが、ふだんの真人の机にはない存在感だ。

案の定、隅の方には埃が溜まっている。雑巾を濡らして絞ると、隅から隅まで拭いて、から雑巾で拭う。それなりにぴかぴかになるものだ。今度は、床に下ろしたものを必要に応じて綺麗にしてから机の上に戻す。それから机の周り、最後に机の下を、濡れ雑巾とカラ雑巾で拭いて、それで真人の机の周りは一通り終りだった。隣はというと、二木さんも概ね、僕の机の周りを掃除し終えたらしい。

「本棚もやっておいたわよ」

見ると確かに、埃ひとつない、というふうだ。

「手慣れてるね」

「そんなに汚れてなかったから。直枝の方が大変でしょう」

言って真人の机のほうをちらと見た。二木さんの中で、真人がどんな扱いなのかちよつとだけ気に掛かった。想像はつくけれど。

「ともあれ、次は床ね」

「それと、こたつ」

「そう」

まずはこたつの天板を外して、壁に立てかける。それからこたつ布団を剥がして、窓を開けて——冷たい空気が忍び込んでくる。寒い！——ベランダに出て、手すりに干す。ふとんたたきでばんばんとやると、やはりというか、埃がばらばらと落ちていった。掃除をする甲斐もあるうというものだ。その後ろでは、二木さんがこたつの枠をこれまた壁に立てかけている。部屋に戻ると、こたつの下に敷かれていたマットレスをこれまた持ち上げて、ベランダに干し、これもふとんたたきの餌食とする。

しばらくそうしてから部屋に戻ると、二木さんがこたつの天板と枠を拭き終わつたところだつた。

「床をやろう」

「ええ」

これまた濡れ雑巾で、マットレスに隠されて見えなかった床を拭いて回る。終わつたところは二木さんがから拭き。ベッドの下は小さなモップとの合わせ技、さすがに埃がごつそりといつてきた。それでも、そう広くない部屋のこと、それなりに手早く終わらせることができた。あとはしばらく風を通して、それからこたつセットを戻すだけだ。夕方くらいにやればいいだろう。

ふたり、ベッドに腰掛けて一息つく。

「あとは水回りだけど——」

「さすがに、それは僕がやるよ」

「うん」

一人部屋ならまだ良いけど、真人と一緒に使ってるわけだから。

「この機会に掃除しちやいたいところだけど——」

時計を見ると、二時前。結構な時間だった。

「——お昼にする？」

「食堂は閉まつてるわよ」

「そうだったね……」

冬休みは実家に帰れ、という学校側の意向なのだろうか。

「どうしよう？」

「何か作るわ。その間に、水回りの掃除を済ませちやいなさいよ」

「そうしようかな。お願いできる？」

「二時半でどう？」

「もう少しかかるかも。でもそれくらい目標で」

「判ったわ。終わったら連絡して」

「うん」

二木さんが部屋を出て行くのを見送ると、さて、とひとつ気合いを入れる。水回りは面倒だと思われがちだけど、きちんと洗剤を選べば、そうでもないのだ——もつとも、これも寮会の活動で、二木さんから教えて貰った事なのだけだ。

結局水回りの掃除が終わったのは二時四十分だった。急いで携帯で連絡すると、

「ごめん、ちよつと遅れちゃった」

『大丈夫、だいたいそれくらいかと思っていたから』

読まれていたらしい。ともあれ、鍵を閉めると二木さんの部屋に向かった。



二木さんの部屋のこたつの上には、ポータブルコンロに火がついて、小さな鍋が置かれていた。鍋？ 昼からにしては、ちよつと重いんじゃないかな。

と、表情に出たか、二木さんがくすりと笑う。

「違うわよ。五目ラーメン」

蓋を取ってみせる。醤油系の少しとろりとしたなかに、色とりどりの五目の食材が煮えていた。鍋の脇には生ラーメンの袋。

「……いいね、おいしそうだ」

「体も冷えてるし、ちよつどいいわよ」

言われるとたしかに。体がぶるりと震えた。

「こたつに入ったら？」

「そうさせてもらうよ……」

いそいそとこたつ布団に体を埋める。至福。

その横で、二木さんがラーメンを鍋に入れて蓋をした。火力を少し強くすると、

「三分待つてちょうだい」

「うん」

鍋はことごとと音をたてる。二木さんとふたり、こたつに入ってそれを眺める。窓の外には青空、白い鳥が悠然と飛んでいる。白鷺だろうか。

冬の日だ。

ぼうつとそれを眺めていると、一年も終わるんだなあ、と妙に実感が沸いた。大掃除も終わって、もう、今年中にやらなくちゃいけない事も残っていないのだ。

一年、か。

今年は色々あった。新生バスターズの結成、修学旅行のバス事故、獄門島事件、ロケットの夏、そして天野先輩の恋——これは継続中か。ともあれ、何て濃密な一年間だったんだろう。

一年前には、こんな年になるなんて、思ってもみなかった。今、二木さんとうろしていることだって、想像の埒外だっただろう。そもそも二木さんとは知り合つてすら

いなかっただけで。

ふと、来年はどんな一年になるんだろうな、と思う。そろそろ鬼も笑うのをやめる頃だ。そして、いや、違うな、と思った。来年は、どんな年にしよう？ それは、僕が考える事だった。

一年後のことを考えた。

一年後も、こうして二木さんとふたり、穏やかに過ごせていたらいいな、と思う。そして一年後もまた、何て濃密な一年間だったんだろう、と思えていたらいいな、と思う。

そのために——僕はどうしよう？

そう思うと僕は、なんだか、とてもわくわくしてきた。素敵な気分だった。

そんな僕に気づいているかどうか、二木さんは鍋の蓋を取る。ふわりと五目ラーメンのいい匂いが広がる。

「できたわよ」

「うん……それじゃ、いただきます」

「ええ、召し上がれ」

二木さんとかわす、そんな何気ない会話も、これからやってくる新しい一年を祝福しているかのように、僕には思えたのだった。

大晦日点描

直枝理樹は、寮の居室でひとり、『ゆく年くる年』を見ていた。寮には数名の寮生が残っているはずだけど、その気配はまるで感じられない。人気のない寮は、いつもよりもずっと漠として巨大な鉄筋コンクリートの箱に思われた。そのなかで、自分一人がぼつりと生きているような感覚。

それでも、僕は独りではない、という感傷を覚えるのは、きつと二木さんのおかげだった。

こたつの上、蜜柑をひとつ取って皮を剥くと、一切れを口に放り込む。そしてケータイを取り出すと、未送信のメールを確認する。もうすぐ二木さんに送るためのメールだ。

今頃、二木さんは、葉留佳さんや晶さん、家族と一緒に除夜の鐘の列に並んでいるだろうか。



二木佳奈多は、列の後ろから三割あたりのところに並んでいた。整理券は妹の持つ「七十二」。一家五人で一枚の整理券だった。

燃える篝火の柔らかな熱と、ポケットに入れた懐炉で、結構暖かい。もちろん、真冬の真夜中という時間にしては、というだけで、長くここにいたいとは思いつても思わない。

時計を取り出すような無粋はしない。その必要もない。除夜の鐘が鳴れば新年だし、いわゆるあけおめことよろのメールがきつと、今年は何通か届くだろう。そう思うと心も躍る。

直枝も来ればよかったのに、とやはり思う。せっかくの一家団欒だから、と笑っていたけど、もう直枝は家族みたいなものだ。

やっぱり明日は、うちに来てもらおう。そして一緒におせち料理を食べよう。これは私の我が侘だけれど、きつと直枝は笑って許してくれる。新年早々だけど甘えてみよう。そんなことを思う自分がいた。



棗恭介と棗鈴は、二本佳奈多と同じく、除夜の鐘の列に並んでいた。もつとも、違う寺院であつたから、顔を合わせることもない。

猫はこたつで丸くなる、の言葉通り、棗鈴は圧倒的な重装備だった。正確に述べるなら、上下がスキーウェアだった。どんだけだよと棗恭介は突っ込んだが、そうじゃな

きや行かん、と物凄く行きたそうな顔をするので、結局好きにさせることにした。物凄く寒いのは確かだし。

「きよーすけ」

「ん、何だ？」

「おまえ、何をお願いするんだ？」

「お願い？ 初詣のか？」

「とーぜんだ」

まずは除夜の鐘を突くことしか頭になかった……が、それはすぐに思いついた。考えるまでもない。

「バスターズみんなが、無病息災、笑って楽しく過ごせますように、だ」

「おまえはいつも、そればっかだな」

「ああ。俺はずっと、それを願って生きてるからな」

「……」

裏鈴は、なんだかビミョーな顔をしてみせたが、ひよつと妙に真剣な顔をして付け加える。

「それは、寮長もか？」

「天野か？」

「うむ」

「ああ……そうだな。あいつももう、バスターズの一員だからな」

即答ではないが、ほぼ即答だった。

五十一パーセントの満足の顔で、棗鈴は頷く。

「ならいい」

「おまえ最近、妙に天野になつてゐるな。どういふわけだよ」

「しね、ばーか」

年の瀬の寺院にまったく相応しくない罵声。かわいらしい女の子の声なのがせめてのも救いか。

棗恭介は、やれやれとばかりに受け流す。棗鈴のいささか呆れ気味の顔には、あまり気がついていないようだった。



その天野元寮長は、実家のこたつで「ゆく年くる年」を見ていた。奇しくも——というにはあの番組の視聴率は高すぎるが——直枝理樹と同様だった。

「今年も終り、か……」

ふと天野元寮長は呟く。長い一年だった。良いこともあれば悪いこともあった。でも、終わりよければ全てよし、それなりの幸せに天野元寮長は浸っていた。

もちろん、時間はあまり残されていない。それは判っている。年が明けたら勝負よ、と彼女は自分に言い聞かせた。よし。

「何だか気合いが入っていますね」

「あ、わかった？」

同じくこたつに入っている、一回り年上の女性が微笑む。ショートカットだが、少し赤みがかってゆるくカーブがかかった髪は天野元寮長ととても似ている。

「『恋はいつだって唐突だ』」

「別に唐突ってわけじゃないんだけどね」

「じっくり腰を据えるのが、たぶんいいんですよ。特にあなたは」

「そう？」

「一見しただけでは、あなたの一番いいところはわかりにくいですからね」

「ええー」

天野元寮長は不満げに唸った。

「おねえちゃん、それって褒めてる？」

「褒めてますよ、もちろん」

「ならいいんだけどさ……はあ」

「大丈夫、見ている人は見えていますよ」

「棗君はどのようなのかなあ……それこそ、わたしのことを見てくれたら、奇跡みたいなものよ……」

「奇跡、ですか」

女性は、ふと遠い声で言う。

「？」

天野元寮長は頭にクエスチョンマークを浮かべた。女性はそんな天野元寮長に気がつくと、小さく笑った。

「あなたの棗君は、あなたの手の届くところにいる。そうでしょう？」

「え……うん、そうね」

言葉の裏に、手の届かないところがある——というニュアンスを感じ取る。そうではない、と直感した。

「……確かにそう。手が届くところにいる」

「それなら、やるだけやってみるのがいいですよ。大丈夫、あなたは素敵な恋する乙女ですよ」

「恋する乙女って……」

それには半ば自覚がある。素敵かどうかはさておいて。

「さしあたり、新年のメールですね。送るつもりでしょう」

「え、うん……そのつもり、だけど」

「頑張ってくださいね。狙うのは年明けの瞬間ですよ」

ただでさえ繋がりにくい時間に私までメールを使うのはどうかと思わないでもないけど——たしかにそうだ。

どうせやるなら覚悟を決めて。

「……ありがとう、おねえちゃん。送ってみることにするわ」

「それがいいですよ」

言って女性はずず……とお茶をすすする。私はポケットからケータイを取り出した。



そうして、やがて年が明け、幾通のメールが飛び交い、除夜の鐘が百八の煩惱を散らした。

新しい春が来るまで、あと三ヶ月だった。

いくつもの想いを秘めて、夜は更けていく。

透き通る一月 初詣などの幕間

年明け、二木家へ行く（直枝理樹の補記）

初夢というのが一体どの夢を指すのか、いくつかの議論がある。

大晦日の夜の夢……つまり元日に目覚めたときに記憶のすみに残っている夢、というのが勘違いされがちな例で、元日の夜に見た夢、つまり二日に目覚めたときに覚えている夢というのが定説だけど、その根拠は「新年になつて初めて寝たときの夢」なので、それなら起きたまま年越しをした場合、元日の（少しゆつくりの時間に）起きた時の夢の記憶こそが初夢になるのではないかという気もする。

ともあれ、最後のケースに該当する朝、気がつくと、特段に夢の記憶は残っていなかった。さわやかな朝だった。ナルコレプシイから目覚めたような漆黒ですらない虚無とは違う。ああ、新しい年がきたのだなあ、と思えるような朝だった。

時計をみる。朝八時。少しゆつくりだ。

起きあがつてカーテンをあけると、抜けるような青空が広がっていた。ガラスの向

こうには、きつと澄んだ空気が広がっているだろうけれど、起き抜けの身にはちよつと冷たすぎる気がするので遠慮しておこう。

ともあれ、顔を洗って着替えをして、さて朝ご飯はどうしようかと考えているところに、携帯が震えた。電話だ。ディスプレイには「二木佳奈多」の五文字。

「はい、直枝です」

「あけましておめでとう、直枝」

「うん、あけましておめでとう、二木さん」

まずは新年の挨拶。今年もよろしく願います。で。

「どうしたの、こんな朝早く」

「もう八時よ——それは置いておいて、直枝、ご飯まだでしょう？」

「うん。どうしようかって考えてた」

「そんなことだと思つたわ。あの……」

電話の向こうで、二木さんはちよつと口ごもる。

「どうしたの？」

「あの、ご飯、食べに来ない？ お節料理」

「いいの？」

「たくさんつくつたから。で、どう？」

答えを急かす。たくさんあるのは事実だろうけれど（まあ、お節料理だしね）――
来てほしいの？ とはさすがに訊かない。

「せっかくだから、お言葉に甘えることにするよ」

「よかった」

ほつとしたような声。僕がそういう誘いを断るはずもないんだけどね。

「何時くらいになりそう？」

「もう着替えてるから、一時間かからないと思う」

九時ちよつと過ぎ、くらいかな。

「それならちようどいいわね。待つてるわよ」

「うん。それじゃ」

ぴつと通話を切ると、ひとつのびをする。のびをすると、年明け早々、二木さんに逢えると、意外なくらいにうきうきしている自分に気がついた。



二木さんの実家までは、自転車で一時間弱。電車の待ち時間が判らないときは、こっちのほうが早い。

まだ人気のない元旦の朝の町、ギアを上げて自転車を駆る。元旦特有の澄んだ空気、

遠くの稜線が少し近くなったが如く映える。コートを着込んでいても、さすがに顔に当たたる風が冷たい。耳当てでもあればよかったかなと思う。いや、それだとちよつと自転車には危ないか。

旧街道の車道に行く。長距離トラックはバイパスを行くから、これが一番走りやすいし安全だ。いくつか過ぎるシャッター商店街も、この日この時間なれば、特段の寂しさを醸し出すこともない。

ともあれ、川を越えて山を少し迂回したあたりが、二木さんの家だ。

旧街道を少しそして、新興住宅街にはいると、なじみの家がすぐに見える。門扉のところに自転車を止めていると、かちやりと音がして、家のドアが開いた。

「おはよう、直枝」

二木さんだ。

「うん、おはよう……つと」

チェーンの鍵を抜いて、二木さんに向き直る。

「あけまして、おめでとう」

「さつきも言ったわよ、それ」

「そうだったかな」

「電話で——ま、でもいいわ。ことしもよろしくね、直枝」

「こちらこそ、だよ、二木さん」

笑いかけると、二木さんは顔を赤くして、ふっとそっぽを向いた。



黒豆、田作り、伊達巻に昆布巻に栗きんとん……二木家の食卓に並べられたおせち料理は、なんと殆どが二木さん達の手作りだった。もちろん、カマボコやら数の子やら、どう頑張っても手作り不可能なものについては、市場で買ってきたということだけど、何かしらの調理を加えるものに関しては、これは全部お手製ということだ。

二木さんが家に帰ったのが三十日の夕方だから、まる一日料理のお時間、といったところだろうか——と訊くと、曰く、

「いやア、大晦日は大騒ぎでしたヨ！」

「騒いでいたのは葉留佳だけでしょう？」

「おお、こりやまた失礼シマシタッ」

というわけだ。そこへご相伴にあずかっているわけだから、感謝の一言の他にない。どれが二木さんの手によるものか——ということに、もちろん特段の区別はない。たぶん、お母さんと三人で料理をしていたわけだから、まさに合作というやつだ。

それでも、箸を伸ばした先によつて、妙に二木さんがちらちらとこちらを見るので、そこは二木さんが力を入れたところなんだろうなあと判る。

「うん、おいしい」

そう言うとき（実際美味しいのだ）、二木さんは何も言わず、くるくると髪の毛を弄る。照れているときの二木さんのクセだ。そのむこうで、晶さんが嬉しさ半分冷やかし半分といったふうに笑っているのが見えた。

ご飯が終わってリビングルームで一息つくとき、もう時計は十一時前といったところだった。食べ始めるのが遅いんだから当然ではある。ひどくのんびりとした、正月元旦の特有の時の流れ。

「そいえば理樹くん」

抱き枕を抱えて寝ころんでいた葉留佳さんが、うによりと顔をこちらに向けて言う。

「初詣って行った？」

「初詣？」

首をかしげる。

「まだだよ。ていうかまだ元旦の朝だし……そうか、葉留佳さんたちは行ったんだよね」

「うん。おねーちゃんと、おとーさんたちと。除夜の鐘をついてきたよ。ゴーン、つて。凄いな音がしたよ！」

鐘のすぐそばで撞くわけだから、そりやそうだろう——と思ったが、葉留佳さんは

やたらと嬉しそうで——その様子を見て、僕はようやく思い至った。葉留佳さんたちにとつて、こんなにも平穏な正月は、はじめてなんじゃないだろうか……？

特に、宗教的概念を伴う行為である除夜の鐘なんて、まるで縁がなかったはずだ。昨日の夜は、五人で行ったと二木さんからのメールにはあった。それが如何に得難い光景だったか——ふつと頬が弛んだ。

「……よかったね、葉留佳さん」

「へ？」

言うた葉留佳さんは、何言ってるんデスカ？、みたいな顔をした。なるほど、ツツコミ待ちのタイミングだったわけだ。

「……いや、耳が潰れなくてよかったねと」

「いやーそれがさー！ わーん、つて耳鳴りがしてさ、結構大変なんだよ、あれ。ね、おねーちゃん」

「そうね……」

僕たちの様子を見ていた二木さんが苦笑した。その奥の柔らかな笑み。僕の思うところを、二木さんは理解してくれていたようだった。

「直枝は行かないの？ 初詣」

二木さんが、ふと顔を上げて問うた。

「毎年、恭介たちと行ってるんだけどね。たぶん、今年も行くんじゃないかなあ」

「バスターズで？」

「そうだね——」

バスターズ、か。去年の正月は、バスターズと言えばまだ、恭介たち五人だけだった。でも、今年は違う。

「——みんなで行きたいね。二木さんたちは二回目だけど、いいでしょ？」

「構わないわよ。お祭りみたいなものだし」

「うん、実際、屋台の食べ歩きのほうがメインって感じだよ、毎年」

「それじゃ、本当にお祭りじゃないの」

「あはは……」

的確なる指摘に思わず苦笑。

「ま、あなたたちらしいけど」

二木さんは呆れ顔だ。いわゆる秋祭りだって、神事が執り行われているはずなんだけど、屋台を回るくらいしかないよなあ……なんて言い訳を頭の中で転がしてみたり。

「まあいいわ。で、いつ行くの？」

「そうだね。恭介たちは四日に帰ってくるって言ってたけど……みんなはどうなんだろう。ちよつと訊いてみるよ」

「お願いね。あーちゃん先輩も」

「もちろんだよ」

新年早々のイベントだ。天野先輩も万難排して駆けつけてくれるだろう。

「そうだ、おねえちゃん」

脈絡無しの葉留佳さんが、ばつと飛び起きた。

「何？」

「初詣！ せっかくだから、着物で行かない？」

二木さんが目を剥いた。

「着物って、その、振り袖？」

「もちろん、たしか、あつたでしょ？」

「あるけど……」

もごもご、口籠もる。

「理樹くんはどう思う？」

「え？」

「おねーちゃんの着物姿、見たいでしょ？」

答えを聞くまでもなしと、悪戯そうに目を細めて、葉留佳さん。

「な、何言ってるのよ……」

そんなことを言いながら、二木さんの視線はちらちらとこちらを伺っている。恥じらう乙女だ！

「うん……見てみたいな」

わき上がる感情を抑えめにして言う、二木さんは再び髪をくるくる、何事かをこによごによと呟く。その様子を見て、葉留佳さんは、にしし、と笑った。

「決まり、ですネ！」

よし、と僕は心の中でがつつりとガッツポーズをした。毎年楽しみな初詣だけど、今年はより一層——眼福を望めそうだ！



そんなこんなで、二木さんといればなんだかんで話は尽きない。

寮会のあれその話だけでもすぐに一日が経ってしまうくらいに考えることは多い。でもまあ最近、二木さんといえども、そんなお堅い話ばかりじゃなくて、四季折々のなにやら、バスターズの誰がどうか、そんなどうということもない世間話で時間を潰すことも多くなった。

そんな『バスターズの誰がどうか』の話題のなかでも、やつぱり戻ってくるのは天野先輩の話だった。

「何なのかしらね、あの浮つきようは……」

「まあ、進展と言えば進展だからね。それに、おどおどするより、ずつといいよ」

話題は、クリスマス・パーティの会場に二人が戻ってきたときのことだ。皆が、お、何だこのいい雰囲気の男女一組は！ と軽い驚きの表情を見せた。葉留佳さんあたりは、すわカッパル成立なるか!? みたいな顔で目を輝かせたけど、直後の恭介の台詞で、やれやれとばかりに白目になった。恭介の曰く、

「改めて紹介しよう、バスターズの新人選手、天野だ！」

——まあ、進展？

ともあれ、それから年末の帰省までのごく短い間でも、天野先輩の浮かれっぷりはまったく、微笑ましいのギリギリのラインに何とか踏みとどまっているかな、といった有様だったのだ。

「まあ、いいんじゃないかな。おどおどするより、ずっといいよ」

「それはそうだけど……あれじゃあ『私恋をしています！』って吹聴して回っているようなものじゃない」

二木さんが頭を大きく振ってそう漏らした。素っ気ない顔のおくのか心配。

「……微笑ましいと暑苦しいの間？」

「そうじゃなくて」

二木さんの口調に不機嫌の影が顕われた。

「情報戦の時点で負けているっていうの。恋敵の存在を認識しているのかしら。当たり前だと思っ言わなかったけど、失敗したわね」

「恋敵？」

「直枝も判つてないのかしら？」

ジト目。二木さんの言いたいことはもちろん判る。

「他に恭介を好きな子がいるつていうこと？」

「想定しなさいつて事よ。あれでも棗先輩、女子には人気なのよ」

「そうなのかな……」

恭介と言えば、バスターズの頼れるリーダーだけど、客観的に見れば相当なバカだ。もちろんそれはいい意味のバカなんだけど、それがもてる要因になるとは、なかなか思えない。そうすると。

「……顔？」

「それもあるわね。でも、顔立ちがいいつていうより、子供っぽい表情つていう意味よ。私たちと遊んでいるときのとか」

「ふうん？」

それは判らなくもない。無邪気な表情つてことだろうか。確かに恭介は、遊ぶときは徹底的に遊ぶ、楽しむときは徹底的に楽しむタイプだ。

「どっちかつていうと、庇護欲をそそのめるのよ。一見ね」

「ちよつと意外だけど、言われてみればそうかも」

「見ている子は見ているものよ」

「でも……正直、簡単じゃないとは思うよ、恭介は。これは天野先輩だけに限らずね」
「そうね……。棗先輩の一番つて、やっぱりバスターズみたいだし」

「だからこそ、そこは天野先輩がやるしかないわけだけど。恭介からのアクションは期待できないけど、動き出せば僕たちでフォローもできる」

「ずいぶんあーちゃん先輩の肩を持つのね」

少しつんけんして二木さん。嫉妬？ まさかね。だが、二木さんは言葉を続けた。

「前から気になっていたんだけど、直枝はどうしてあーちゃん先輩を応援しようと思ったのかしら。棗先輩とのつきあいの方が長いんだから、普通はそっちの肩を持ちそうなものだけど」

そう問うと、二木さんは、黙ったまま僕の顔をじつと見た。

「そうだね……」

ふむ。

「恭介のことだけど、恭介は、もうすこし自分のことを考えてもいいと思うんだ。そうや、恭介が鈴のことを大切に思っているのは判るけど、それじゃ恭介自身はどうなのかって考えるとね」

「ふうん？」

「それで、いい機会なんじゃないかと思ったんだよ。天野先輩とは相性もいいと思う

し。あれだけ無茶するんだから、よつぽど面倒見がよくないと、とてもつきあいきれないでしょ」

「バスターズのこと？ 自分で言うかしら」

「自覚はしてるんだよ」

あきれた風の二木さんに、苦笑気味に答えると、二木さんはなぜか苛々としたように、とんとんと靴で二、三度床をたたいた。

「ねえ、直枝」

「ん？」

「棗さんのことだけど」

「鈴がどうかしたの？」

「直枝は気づいてたの？ 棗先輩が、直枝と棗さんを、その——くつつけようとしていたの」

ちよつと目を丸くした。その話、か。意外な展開だ。僕は少し黙り込む。二木さんはまた、僕の答えを待っている。今日は『どうして』が多い日だ。

「……まず、恭介がそう思っていたっていうのを、僕はちゃんと聞いたわけじゃないよ。ただ、何となくそういうことなんだろうなあ、とは感じてはいた。でも……」

「でも、どうしたの。棗さんは、ちよつと難しいところもあるけれど、いい子よ。ずっと近くにいたんでしょう。それくらい判るはずよ」

二木さんの鈴の評価が意外に高いのに、少し驚く。でもまあ、それは今は置いておこう。

「そうだね……」

自分の感情の動きが一体どんなものだったのか、それを正確に思い出すのは難しい。時を遡れば遡るほど。

「確かに、そういうことを意識したことが全くなかったかと言えば、そうじゃない気がする」

よく思い出せないのだけど（ひどい話だ）、そんな心の動きが確かにあったような気も、する。だけど……

「だけど、なんていうのかな。決定的な機会はなかったんだ。鈴がどう思っていたのかも、知らないしね。それに——ああ、決定的と言えばたぶんこれが一番決定的な理由なんだけど——」

僕は思わず、くすりと笑った。二木さんが眉をひそめる。

「——二木さんを好きになっちゃったんだから、仕方ないよね」

ボン！——とマンガなら効果音がついているシーンだ——二木さんの顔が真っ赤に染まった。



「まったく。新年早々何てことを言ってくれるのかしら、直枝は……」

ぶつぶついいながら、二木さんはお茶（台所を借りて僕が淹れた）を啜る。顔が赤いのはまあ、だいぶ落ち着いてきている。

「まあ、そういうことだよ、二木さんの疑問への答えは」

「ああもう……」

二木さんはくしゃくしゃと頭を掻いた。珍しい。

「こういうのは、仕方ないんだよね。好きだと思っちゃったら、仕方ない」

「それは——そうかもね……」

なぜだか二木さんは、ひどく遠い目をして、独り言のように言葉を紡ぐ。

「仕方ない、か……」

僕は黙ってお茶を啜る。鈴のことを考えているのだろうか。あるいは葉留佳さん？

まあ、詮無きことだ。どういう経緯か不思議なものだけれど、僕はいま二木さんの隣にいる。それはほんとうに文字通り、他に仕方がないのだ。

「……もしかしたら、恭介の件も、そう思ってるのかも。僕は」

「どういうこと？」

「天野先輩が恭介のことを好きになっちゃったなら、それは仕方ないんだなって」

「そうね……」

何だか納得したようなふうの二木さんだ。

「だからまあ、天野先輩を応援するだけだよ、僕は。さつきも言っただけど、相性いいと思うし。もちろん、最終的には恭介次第なんだけど」

「どうなるかしらね」

「それこそ、神のみぞ知る、だよ。チャンスも少ないし」

「バレンタインデー？」

「それとホワイトデー。とにかく二月十四日は勝負に出るしかないでしょ」

「このタイミングだとそうなるか。それまでにどれだけ棗先輩に近づけるかがカギね」

「まず第一歩目は……初詣かな」

「あーちゃん先輩、どんな顔で来るかしらね？」

二木さんが嬉しそうなとうんざりなところが半分づつの顔で言った。

初詣／歩く

初詣というのは、氏神様——近所のお寺または神社に参るのがそもその起りだという。ただ、明治期以後、都市部での鉄道網の発達によって氏神の概念が薄くなつて以降、名のある神社仏閣に参る人が増えて、一体初詣というのが如何なる習慣である

のか曖昧になったらしい。ようするに、正月（これも正月三日なのか松の内なのか、論がある）にお参りをする、という以上の縛りはなくなつたわけだ――

「――そんなわけだから、こういう初詣もアリなんじゃないかなあ」

「牽強付会ね」

新年早々、かなちゃんの冷たい一蹴が直枝君のハートを直撃した。かなちゃんと一緒にいると、相対的に直枝君がボケになる。これはコミュニケーション上の必然ではあろうけれど、もしかすると直枝君にマゾヒストの素質があるのかも知れない。なんちやつて。

ともあれそんなわけで、私たちは――バスターズは――私を含めて！――年始の一大イベント、初詣にやつてきたのだ。

「うわあーっ、もう破けたっ！ おじさんこれ何か仕込んでないっ!？」

「それは三枝のやり方が悪いんだ……よつ、と」

「わふーっ……宮沢さん、もう十匹も捕っています……」

かなちゃんと直枝君が漫才を展開するむこうで、三枝さんと宮沢君が興じているのは、出店の定番、金魚すくいだった。剣の心は和の心、宮沢君のすくい網捌きは、明鏡止水の境地とばかりに圧巻だ。次々と水槽から金魚を掬っていく。

一方、井ノ原君はと言えば、健啖たるがその身の上、お好み焼きにフランクフルト、

大阪焼きにおでんにアメリカンドッグと、見かける屋台を片っ端から攻略している。攻略しては道ばたで筋トレを始めるので、ちよつと異様な感じがするけど、バスターズのみんなは慣れたものでツツコミひとつない。

その横で、これまた買い食いに励んでいるのは棗さんと神北さんだ。こちらは井ノ原君と違つて極めて健全な少女趣味、お菓子フェスティバルが展開されている。あんず飴、チョコバナナ、綿菓子にベビーカーステラと両手に抱えてほくほくだ。

「しあわせいっぱい、だね、りんちゃん」

「うん。初詣ときたら縁日であまいものと、憲法でも決まっている」

「お菓子王国だね」

「うむ、お菓子王国だ」

展開される会話もさつぱり女の子だ。自分が一応女の子だということの自信を粉々に粉碎せんばかり……。

さて、遊び回っているのは大体その辺りで、残りのメンバーは、列に並んでお留守番。外回り組の様子を必要以上にこにこしながら眺めているのは来ヶ谷さん。その隣には西園さんが本（ちらりと見たところ文庫本のようなが、どうやら一般流通のものではなさそうだ……）を片手に文学少女。

「やはり、和服は乱れてこそだな」

来ヶ谷さんの不埒な視線は、金魚すくいに七転八倒の三枝さんに向けられている。

彼女は和装、それがしゃがみ込んで金魚すくいなのだから、通常とは違う気の使い方をする必要がある。まあ、それでも見えそで見えない、という乙女の絶対防衛線が破られる気配がないのはさすがと言ったところ。

だが、来ヶ谷さんの不埒発言に水を差す者がいた。美的感覚にはちよつとうるさい、我らが西園さんだ。

「その意見には素直には同意できかねます」

「おや、西園女史は別の見解が？」

「普段きつちりと着こなしていてこそ、着崩れが映えるというものです。見てくださーい、あの宮沢さんの——」

西園さんの目がきらりと光る。

「——あのほんの僅かな着崩れ。冷静淡々と金魚を掬っているように見えて、そのむこうに見え隠れする童心の為せる技です」

「なるほど、たしかに葉留佳君の立ち居振る舞いは、艶やか過ぎの嫌いがあるな」

「艶やかかどうかはまた別の議論ですが——着崩しの神髄には程遠いですね、三枝さんは」

西園さんの注釈突きの同意に、来ヶ谷さんは、ほう、と興味深そうに笑う。

「なるほど、さすが西園女史」

「文学少女ですから」

幽かな笑いとともに、西園さんは静かに言つて、それから手元の本に目線を戻した。

和服を着ているのは、三枝さんだけではなかった。三枝さんの艶やかな（子供っぽい——じゃないんだよなあ）姿と対照的に、かなちゃんが実に優等生的な着こなしを見せていた。双子姉妹の、ここはひどく対照的なところが如実に反映されている。さつきから直枝君が時たま鼻の下を伸ばしているの、ああ、かなちゃんその格好は正解だよと微笑ましく思う。

まったく、棗君もそれくらい素直に反応してくれればいいのに！

自分で言っちゃあなんだけど——一番気合いが入っている格好をしているのが、実に私だった。待ち合わせ場所に現れた私を見て、棗君なんかは、誰だよお前！と目を丸くしていた。あら失礼ねとむくれたけど、いつもとひと味違う姿を披露したことは満足であつたので、一瞬あとには猫のように目を細めて笑つてみせた。

実際、朝一番に美容室に駆け込んで（もちろん予約で）、髪をレンタルの振り袖の着付けと日本髪のかき上げをしてもらったのだ。鏡を見て、あなた誰よとは言わなけれど、どれだけ気合いを入れているのかと自分のことながら笑った。まあ、積極的なつたのはいいことですよ、とはかなちゃんの談だ。

一方で、和服姿を見慣れないからか、さつきから棗君は少々困惑気味だった。長年付

き合いのある友人の新鮮な姿に——ということだといんだけど——と思っていると。

「なあ天野、その格好疲れないか？」

「何よ、疲れるってどういうこと」

あ、思わず言葉に刺が。

「いや、なんか、いつもと違う格好するとき、二木もそうだけど」

「……棗君、本っ当に女心が判ってないわよね。ね、かなちゃん？」

大げさのため息をついて同意を求めると、かなちゃんも肅々と頷く。

「それについては同感ですね」

「おいおい、何だそりゃ」

たじたじとする棗君、どうやら本当に判ってない？ やれやれ、これは懲罰ものだ。

「あんず飴」

「はあ？」

「買ってきて。それで許してあげる」

唐突な（そう見えているんだろうな……）袖の下要求に、さらに困惑する棗君（珍しい！）。と、見かねたか、直枝君がアシストに入った。

「今のは恭介が悪いよ。ほら、あんず飴はあっち」

少し離れた屋台を指さすと、棗君、何だかよくわからないけど……といった風に頭を掻く。

「判ったよ。天野と……二木もか」

「あ、僕にも」

「げ、理樹もか」

「いいでしょ？」

「やれやれ、仕方ないな……行ってくる」

棗君が列を離れると、私はやれやれとばかりに肩をすくめて——心の片隅を不安の色が過ぎった。

「通じてるのかしら？」

「何がですか？」

「そりやまあ……色々」

「さあ。私は棗先輩じゃありませんから——でも、奇襲攻撃は効いてるんじゃないですか？」

「意外性？」

「奇襲戦法だけで最終的に勝利を収めるパターンって、歴史上そんなにないですけど」

「うへえ、かなちゃん厳しい……」

「ま、緒戦としてはまずまずですから、これからが勝負ですよ」

「かなちゃん、だいたいいつも、そう言うわよね」

「手を緩めません勝つまでは」

「ま、そうよね……」

はあ、とひとつためいきをついて、それから鼻息ひとつ、よし、と気合いを入れて見せた。おお、やる気だ、とかなちゃんが目を見張る！

「ここは一丁——神頼みでもしてみますか！」

——かなちゃんと直枝君が、盛大にずっこけた。

「なんでそこで神頼みなんですかつ！」

「いやほら、初詣だし、今日」

敢えて突っ込みようのない答えを返すと、第二撃を放てずになかちゃんは沈黙。

「まあ、いいですけど……初詣だし……」

「決意を新たにするとて意味もあるしね」

「そっちのほうでお願いしますよ……」

そんな会話をしていると、諸々の元凶、棗君が両手にあんず飴を一杯に戻ってきた。そしてあんず飴を差し出すと、ひとこと、

「どうぞ、お姫様」

ぼん、と顔を真っ赤になるのが判った。隣でかなちゃんが目を丸くする。
「うむ、ご苦労であった」

照れ隠しなのが見え見えの言葉を返して、あんず飴をひとつ奪い取って口元へと運んだ。まったく、意識してやっているのか、そうじゃないのか——棗君のずる格好いいところだ。一体なんなんだね君は。

そんな様子を見ながら、かなちゃんがんばそりと仰る。

「直枝も真似してみたら？」

「いや……やめとくよ」

直枝君が苦笑する。実際にやったら、かなちゃんに一蹴されるのがオチだろうな。

と、そんな風にわいわいと騒いでいるうちに、列は石段のところまで進んだ。そこで屋台の列は姿を消して、ふっと、すうっと、静謐な空気が漂った。バスターズの面々もさすがに、ある種の神妙さを以て肅々と列に並んでいる。

町のはずれ、高台の中腹に張り付くようにある神社だ。石段を登り終わって振り返れば、塵ひとつない空気にくつきりと町の姿が眺められた。

抜けるような青空だった。



正月元日早々、直枝君から初詣の案内が来て、心が躍るとともに、何を願おうかと

ずつと考えていた。

もちろん、棗君とのことに進展がありますように、というのが直近の願望ではある。が、今年一年なんとかでありますように、とか、今年は何とかができますように、とか、そういう長いスパンの話ではないので、それを初詣の時に祈りするというのもどうなのか、とも思うのだ。

残り三ヶ月。いちねんのよんぶんのいち。二十五パーセント。数字になおしてみれば、あまりの短さに肝が縮む。四月から六月までの、あの新寮生対応の怒濤の日々と同じだけの長さしか残されていないのだ。

どうしよう、どうしよう……と悩んで、元日が過ぎ、二日が過ぎだ。三日目の朝、ふと思いつて外を歩いてみることにした。よく考えれば、二日間、家に籠もりっぱなしだったのだ。

遠出するときは、普段なら最寄りの国鉄駅までバスで二、三十分、そこからは、一応幹線なのでそのままどこにでも行ける。大都市までは鈍行でも二時間だ。

それらのものを使わず、ただ、歩いてみることにする。

方角をだいたい西の方と定めて、歩き出したのは午前十時と少しのころ。家からすぐの川沿いを少しくだつて、大橋を渡る。川面をわたる風が気持ちいい。遠くを鳥の群れが飛ぶ。鉄塔のくつきりとした格子模様。

狭い平野の山と海の間を歩く。国道を伝って、途中から旧街道にそれて静か、鳥のさえずりのあいだに、ときおり国道の方からトラックの音が遠く聞こえる。

しばらくは地元の中学校に通う道のりだけれど、隣の集落を過ぎればあとは知らない道だ。どこに通じているものかわからない。いや、街道だからまっすぐ行けば隣の市につながっているのだろうけれど、実感としてはやはり、わからない。わからない道を行く。

いつしか私の目の前には、まったく見知らぬ風景が広がっていた。

いつも見る光景とそう大きくは違わないものの、やはり違う場所。そして、状況にわくわくしている自分に気がつく。探検気分だ。小学生か。でも楽しいものは楽しい。こんな気分は、ほんとうに久しぶりだった。

あつという間に昼が過ぎた。途中のヤマザキショップでおにぎりとお茶を買い、道端にしつらえられた四阿あずまやで昼食とする。おかかと焼鮭。これでも乙女なので、おにぎり二つで十分な昼食になる。おなかがふくれたところで行軍再開。

気がつけば陽は西のそらに大きく傾いていた。冬の陽は早いからそう遅い時間でもないけれど、日が沈んで田舎の道を女の独り歩きというわけにもいくまい。少し歩いて見えた道路標識によれば、国鉄の駅まであと二キロという。日暮れまでにはたどり着くだろうか。

その駅は、最寄り駅からたった三つ向こうの駅だった。駅前の寂れたロータリーは見覚えがなかったけれど、ホームにあがると、すうつと音もなく、非日常が日常に転換した。見慣れた車窓の一風景がそこに存在していたのだ。その転換点たる、改札口からホームへと続く階段、それが今日のちよつとした冒険の終着点なのだと気づいたのは、電車に乗ってからのことだった。

車窓から差し込む夕日が、クロスシートの閑散とした車内を橙色に照らす。そのひとつのボックスに座って、私はふと思う。どこにたどり着くかなんて、わからないものだ、と。

向かう方角をだいたい決めて、周囲の風景を楽しみながら無心に歩く。そうすれば、たどり着けるところまでたどり着けるだろう。そしてそこが終点だ。

歩く道は、私の知らない道。それがどんな道かは、私が決めることもできない。どんな風景が広がっているのか、そこを歩くまでわからないのだ。

一寸先は闇のそこを、ただ歩いていくことしかできない。それでも、私は歩いていくことができる。

なら、歩いてみようか、と私は初めて腑に落ちた。歩いてみよう、と。そうすれば、たどり着けるところまでたどり着けるだろう。はたして、その道のりがどんなものか、たどり着いた先にどんな風景が広がっているか——それは、歩いてみないとわからない。だから歩くのだ。

◆ ◆ ◆
初詣が終わって、石段を下りながら、棗君の隣を歩く。

「ね、棗君はどんなお願いをしたの？」

「俺か？」

いつもどおりの——私の大好きな笑顔を浮かべて、棗君が言う。

「決まってるだろ、バスターズみんなが、元気に楽しく過ごせますようにって」

「うん、棗君らしいわね」

予想通りの答えに、しかし私は満足する。こんな棗君だから好きなのだ。その隣を歩くと歩きたいと思つたのだ。

「で、天野はどうなんだ？」

「私？」

「そ。彼氏ができますようにとかか？」

ぶふうっ!! 思わず何かを吹き出した。我ながらはしたないっただけありやしない。というかね!

そこへ棗君がまさかの追い打ち。

「お、凶星？」

「内緒よ！」

「なんだそれ、ずるいぜ。俺は教えたのに」

「乙女には秘密のひとつやふたつあるものなのよ」

「へえ……」

棗君が目を丸くした。乙女の自称に対するものか、それともほかの何かに対するものか、わからない。わからないけど、それもいいと思った。私は笑う。

「ま、いつか教えてあげるわよ」

「それじゃ、それを楽しみにしておくとするさ」

「それがいいわね！」

棗君の笑顔と私の笑顔がかきあった。そう、こんなことがずっと続きますように、そのために私が歩いていきますように——石段を下りきつて、鳥居の方に振り向くと、私はもう一度そう祈ったのだった。

節分の日小さな揺らぎ（直枝理樹の補記）

さて、二月から三月にかけての大騒ぎの話をする前に、ちよつとだけ余談をしておこうと思う。

あれは、二月三日、一般的には節分の日、と認識されている日のことだった。

「みんな、今日は節分だ！　だが訊いてくれ、この二月三日には、もっと別の意味が

——鈍い打撃音がして、鈴の長い尻尾の如き髪が、ふわりと翻った。

「しね、ばーか」

着地するなりそう言つて、鈴は猫たちを引き連れて校舎裏へと消えていった。まるでボス猫とその取り巻きのような様子だ。

そのボス猫に一撃でのされた当の本人——恭介は、地面に半ば顔を埋めてビクビクと痙攣していた。

「おい、恭介、大丈夫か？」

真人がその肩をちょんちょんと突く。

「いつものことだ」

と謙吾は動じない。

「だがまあ……鈴も、もう少し素直になればいいものを」

「？　……ああ、そういうことか」

謙吾の言葉を噛み砕いて、僕はようやく合点がいった。二月三日はたしか、『兄さん

の日』でもあるらしい。

「そういえば鈴、ちよつと顔が赤かったかも」

「そうか？ まあ、そうかも知れないな……さて」

頷くと謙吾は恭介の側に腰を下ろし、なにかしら活を入れるような所作をした。
「うおっ!」

間髪入れずに恭介が飛び上がる。

「お前もお前だ、恭介」

「さあ……な」

ようやく立ち上がり、服についた土を払いながら——そんな仕草でも絵になるからずるいよなあ、と思う——恭介は超然としたふうだ。

「俺が口を挟むことでもないだろうが」

「俺だつて馬鹿じゃない」

「どうだかな」

一言で会話を断ち切ると、謙吾は校舎に足に向けた。

「そろそろ行こう。そろそろ予鈴が鳴る——まあ、恭介には関係のないことだがな」
そのつつけんどんな言葉に、恭介はちよつとだけ苦笑した。



三時間目と四時間目の間、短い休み時間。ケータイが震えて、メールの着信を知らせた。ぱかりと開く。差出人は小毬さんだった。

『りんちゃん、なんだかご機嫌斜めかなあ？』

視線をやると、小毬さんはこつちを見返して、ちょこんと首をかしげた。ほんの小さく頷くと、短く返信をした。

『ちよつとね、朝方。大したことじゃないけど。今日は何の日か知ってる？』

ぴぴぴと送信すると、小毬さんはなるほどと頷いた。

『恭介さんかな？』

さすがの小毬さん、あれだけの文面で状況を推察したらしい。

『ご明察』

『わたし、あとでりんちゃんと話してみるよ』

おお、なんだか小毬さんがアグレッシヴだ——少し心配になって視線を送ると、（うん、大丈夫だよ）と例ののんびり口調を彷彿とさせる笑顔だ。

まあ、変につきあいの長い自分よりも、小毬さんに任せた方がいいかも知れない。お願い、と頷くと、わかったよ、と返ってきた。それならそれで任せておこう、と僕は思う。

結局、放課後の豆まき大会では、鈴はもういつもの調子に戻っていた。たぶん、昼

休みに屋上で二人のご飯会でもあつたのだろう。



あの時僕は、この出来事を、さすがは小毬さん、という程度の捉え方しかしていなかった。後から考えれば、これはかなり大きな伏線だったわけだけど——もちろん、当時の僕には、そんなことを知る由もなかった。

チヨコレート色の二月 決戦、そして死闘

決戦前夜

一月は緩慢に足早に去った。

この学校は一応の進学校であるので、高校三年生で年明けとなれば当然、一月半ばの一大決戦、センター試験対策講座ということになる。学年主任、組担任の先生は当然のこと、各教科担当は模擬試験にワークシートにと駆けずり回っていて、端から見ているだけでもお疲れ様ですというばかりだ。

もちろん、センター試験が終わっても、二次試験に向けた最後の追い込みは続く。景気の悪い話しか聞こえてこないこのご時世、どうせ大学に行くなら、いい大学へ！というのも判らないではない。実際、友人の多くは必死こいて勉強中だ。やれやれ、こういうのを仲間はずれ気分というんだろう。

ともあれなにしろ、そんな状況だから、数少ない就職組たる私たちは、とりあえず自習、という名目で基本的には放置される。まあ、大学生活を謳歌できる（うまくい

けば、だけど）彼らと違って、新社会人になる私たちにとつては、この三ヶ月間は、最後の猶予期間——青春の最後のページ、というわけだ。

その最後のページを、私たちは——これは私と棗君、という意味だ——惜しげもなくバスターズにつき込んだ。

もちろん冬となればウィンタースポーツ。近くにスケート場があるのでそれがメインだけれど、週末には二回ほどスキーにも行つた（寮会がスキー板とウェアを貸し出しているのだ）。雪が降れば雪合戦にかまくらづくり。それからこたつで鍋、鍋、鍋！まあ、これはスポーツじゃないけど。あとみかん。

近頃の特筆すべきイベントと言えば、二月三日の節分の日で、もちろん、鬼は外、福は内と豆を撒く。だが、そのままでは終わらないのがバスターズのバスターズたる由縁、そのまま鬼ごつこと相成つた。

鬼が誰かをつかまえても、鬼は鬼のまま鬼が増えていく「増え鬼」、遠距離攻撃を可能にした「ボール鬼」のコンビネーション、しかもそのボールの代わりが豆ときたものだ。飛び交う豆の嵐、鬼ごつことは思えぬ短期決戦で、これはさすがに豆がとつちらかりすぎて、かなちゃん怒髪天を突くといった次第になった。もつとも、直枝君がまあまあといなして、鶏小屋の鶏たちを使つた巧妙なる豆大掃除作戦が大戦果を収めると、二木さんもまあ納得せざるを得ない、ということでしょうし引き下がつたの

だけれど。

そしてその夜は、みんなで手作り恵方巻と相成った。あの黙って太い巻き寿司をひたすら食べるやつ。男の子たちが競い合うように巨大な恵方巻を作っては頬張っていくのを（ちよつときたない）、女性陣は冷やかし半分で眺めて楽しんだ。材料は港に揚がったいいものを朝市で仕入れたから、最早太巻きじゃないわよねこれってな味で、私たち女性陣は、一応の願掛けをすませると、あとは日本茶片手に和食会といったふぜいだった。

しかしあれだ。

恵方巻なんていうのは、所詮は大阪船場のローカル行事に過ぎない。しかも発祥は幕末、その歴史はたかだか百五十年だ。お正月とかに比べればなんと歴史の浅いことか！ みんなセブン・イレブンのマーケティング戦略に踊らされすぎなのよ！

と、八つ当たり気味に考えてはみたものの、我と我が身を振り返ってみれば、まったくそんなことは言えた義理じゃないことに気づく。マーケティング戦略って言ったってね、実際私も踊らされてるじゃないか。

踊らされていると言っても、それはもちろん、セブン・イレブンの恵方巻戦略のことではない。私が不安まみれで心待ちにしているのは、二月三日の節分の日から十と

一日たったあの日。製菓業界のこじつけと笑わば笑え。そう、それは――

――恋する乙女の決戦の日、聖バレンタイン記念日だ。



バレンタインデーは、言うまでもなく、女性から男性へチョコレートの贈与が行われる日だ。だけど最近は一昔前と違って、必ずしも夫に、彼氏に、射落とさんとする意中の男性に、というふうに限定されているわけでもない。

二十世紀から連綿と続く悪習（だと思う、私は）であるところの義理チョコをはじめ、友人にあげる友チョコ、自分へのご褒美としての活用、挙げ句の果てに、男性から女性へと渡される逆チョコなるものも、最近ではあるらしい。

男性が男性性を取り戻すということは、そりゃ結構なことだが、考えてみると、奥ゆかしい女性が、年に一度、意を決して男性にアプローチすることができる日、という意味合いにおけるバレンタインデーは、あるいはとつくの昔に消滅していたのかもしれない。バレンタインデーのようなきつかけが必要なのは、この現代においては、女性じゃなくて男性なのかも……なんて、へたれ日本代表であるところの私に言う権利もないか。

閑話休題。

ともあれ、バスターズの女性陣のチョコレートにも、これら様々な意味のものが入り交じっている。わかりやすいのは、かなちゃん。もちろん、直枝君にプレゼントするための気合いの入った手作りチョコレートを用意するという。これは本人から聞いた。それに、家族向けのチョココというのがいくつか。棗さんが棗君にというのは、それなりに長い習慣になつていゝらしい。それに、三枝さんが、今年はおねーちゃんとチョコレートを交換するのだと、やたらと張り切つていた。

あとはだいたい、友チョコ義理チョコ自分チョコとか、正確に言うとか、みんなが集まつてチョコレートとチョコレート菓子を思う存分につくつて食す、これはパーティのようなものが計画されている。もちろん、調理は女性陣によつて行われるわけだが、それじゃ男性陣はどうするかつていうと、棗さんの「なにもしないんだから、せめてお金を出せ」

という一言で決まつた。まあ、妥当な線ではある。そりゃ、女性もちゃんと、それなりの負担をするわけだけど。

さて、私はそれとは別に、チョコレートを手作りする心づもりでいる。もちろん、棗君に渡すための、だ。

これでも元家庭科部長なので、料理はそれなりに得意だ。お菓子づくりだってやるし——ちなみに、お菓子づくりのこつは、レシピに忠実に計量しレシピに忠実に時間を計ることなので、実は普通の料理よりも難易度は高くなかったりする。ともあれ、そんなわけで、私は家庭科部室でひとり、お菓子づくりの本を積み上げてはにらめっこをしているのだった。

チョコレートづくりと言っても、カカオ豆から云々、というわけにはもちろんいかない。手間がかかりすぎるし、材料も手に入りづらいし、そもそも美味しくできるかどうか。レシピを見ても、市販のチョコレートを湯煎で溶かして固めて、というのが普通。問題は、それを使ってどういうチョコレートを仕上げるか、つてことだ。

かなちゃんはどうかやら、かなちゃん好みのミント風味のチョコレートにするつもりらしい。

「ねえかなちゃん、これつてつまり、『私を食べてっ！』つてことだよな？」

「馬鹿なこと言っていないでちゃんと考えたらどうですか？」

一刀両断でありました。

「でも、いろいろ考えちゃつて、どうしようつて、ほんと、どうしよう……」

「手堅くハート型とかどうですか？」

「ありきたりすぎない？」

「わかりやすい方がいいんじゃないですか。棗先輩だし」

「あー」

あの朴念仁の全力少年のことだから、そんじよそこらのメッセージ性では、本命チョコだつて事が伝わらないかも知れない。さすがかなちゃん！

「要するに、あーちゃん先輩の場合、おいしいチョコレートを作るつて言うのは二次で、棗先輩に直接的アプローチをかけるのが目的なんです。それを忘れないで下さい。戦略目標からはずれた戦術は、たとえ成功したとしても無価値です」

「かなちゃん参謀さすがね！」

「誰が参謀ですかっ」

「いやあ、かなちゃんが話すとなんだか軍事作戦みたいに聞こえるから、恋のキューピッドつていうより参謀かなつて。あと軍師とか」

「はあ……それ、前に葉留佳にも言われましたよ」

「あら、かぶつちやつたか。かなちゃんよつぽど軍師なのね。彼氏持ちなのに」

「直枝の方が甘いですから、私はこれでいいんです」

「かなちゃん、それはのろけだというのだ！」

げつ、とかなちゃんが顔をしかめた。無意識にのろけ話をするとは、なかなかかなちゃんも隅に置けない。直枝君がよつぽど、いい影響を与えてるんだろくなあ。

それは私も、か。自分の感情にずいぶん素直になれるようになった気がするのだ。ふふ、と笑いを漏らすと、かなちゃんが不審な目でこちらを見た。



結局、その日の夕方早い時間に、チョココレートのレシピは決まった。その足でかなちゃんとは二人で町にでて、材料を買い揃える。それからバスターズのチョココレート・パーティーとは別に、かなちゃんと二人でチョココレートを作る約束をした。

これにて準備は万端、バレンタインデーの決戦まであと三日。

チョココレートでこんなに気合いが入っているなんて、そんなに短くもないこの人生で初めてのことだ。我ながらほほえましくもあり、苦笑いのごとき感情もあり、でもそれらはつまるどころ、わくわくどきどき、というやつだった。そんな高揚感のなか、その日の夜は更けていった。

バレンタイン作戦！

当日である。

例のブツは用意した。昨日の放課後、かなちゃんと一緒に家庭科部室でしこしここと作っていたのだ。

一応は家庭科部長で鳴らす私と、文武両道才色兼備、揺りかごから墓場までのかな

ちゃんが組めば、向かうところ敵はない。世間のにわかパティシエールちゃんたちには悪いのだけれど、年期と気合いが違うのだよ！

……なんて妙なハイテンションは、きつと緊張のせいなんだろうなと思う。脳内アドレナリンが胃痛を打ち消してくれるといいんだけど。思わず右手でおなかを押さえた。

ともあれ寒い日だった。寮から校舎までの僅かな外気だけでも、ぶるりと背筋が震える。

前の日には大陸から列島に寒波が押し寄せて（とテレビでお天気お姉さんが言っていた）、夜半にかけて雪が降った。雪と言ってもせいぜい二センチの積雪、朝方には結構溶けて、滑って転びやすい一番大変な状況。

特に、後者から少し低いところにあるグラウンドは、見下ろすと雪と泥のまぜこぜで、ここで雪合戦はちよつと遠慮したいなあという感じの……要するにチョコレート色だ。

まさに決戦に相応しい。

校舎に入ると、つとめて平穏を装う空気が、かえってわざとらしさを濃厚に醸し出ている。そこそこで、幽かな声、声、声。緊張、興奮、落胆、エトセトラ、エトセトラ。早まって既に戦端を切った戦士たちの様子がうかがえる。が——悠久の昔から、主戦

場は放課後、もしくは靴箱と決まっている。まだ慌てるような時間じゃない。

私はと言えば、かなちゃんの『迂遠な策は却下』戦略理論によつて、直接手渡しすることにした。

教室の中はそれなりに暖かいから、溶けないように保冷剤と一緒に鞆に放り込んである。当たり前だけど、ちよつと冷たくて困る。

教室に入り、席についてそつと見回す。棗君はいない。こんな日も、例によつて慌ただしい登校なんだろう。意識しているのか、いないのか。チョコレート・パーティの日、くらいの認識だろうか。

そんなはずはない。

あれでも棗君は、もてるのだ。

単純な事実として、これまでに受け取ったチョコレートの数は、それなりのもののはずだ。それをすっかり忘れてしまうほど、しまえるほど、棗君は——なんだろう——子供じゃない。ちゃんと判っているはずなのだ。

……

ぶんぶん、と頭を振った。そんなことを考えていたら、足がすくんでしまう。

頑張れ、私。歩いてみるつて、決めたじゃないか。

もやもやとした気分を無理矢理振り切ると、予鈴が鳴った。そして、遠くから騒がしい声が聞こえてきた——バスターズのみんなだ。棗君が教室に駆け込んでくるまで、

あと一分二十秒、といったところだろうか。



会敵予想時刻は、放課後一番。

チョコレート・パーティの会場は、バスターズの集会場こと、直枝君の部屋だ。そこに向かうまでの経路上で迎撃する必要がある。

ずっと同じ教室で授業を受けて、世間話に馬鹿話と毎日話はする間柄だけど、さすがに教室で突撃というのは特別攻撃的に過ぎる。なにしろチキン少女を自称しているのだよ私は。

ともあれ、棗君の行動パターンは大体認識している。放課後はすぐに教室を出るのが棗君のやりかただ。要するにそれはバスターズの時間ということ。

放課後、教室に廊下にと乱戦が予想される海域を、棗君はするりと通り抜けて寮に向かうだろう。それをさらに先回りするのが今回の私の戦術だ。

会敵予想地点は、校舎と寮の渡り廊下。

混戦が始まる前にそこを通りかかるであろう棗君に手渡すのだ。

……ホームルームの間じゅう、そんなシミュレーションを脳内で何度の展開させていた。先生が気怠げに終りを告げると、完全に準備された鞆を音もたてずひつつかみ、

誰よりも早く——そう、棗君よりも早く——足音も立てずに、私は教室を駆け出した。



決戦の場所には、人影はまだなかった。鞆の中のブツを確認し、渡り廊下の横、校舎の壁に背をもたれかけて、一息。

鞆の中のブツを確かめる。一見して判る本命チョコだ。ピンク色にラップピンクされ、リボンが結ばっている。結構な大きさだし、何より形がハート型だ。

棗君も判らないことはあるまい。これは——それなりの重さのものだ。果たして受け取ってもらえるものか——

ぶんぶんと首を振った。ええい、ここ一番が勝負。やってみなけりや判るまいっ！心臓がばくばくと言っているのは自覚している。深呼吸をひとつで、そいつを何とか釣り合いを保たせる。ハートは熱く燃え上がり、頭は冷静だ。完璧だった。



が——どうしたことか——棗君はなかなかやってこない。時計の秒針を眺める。一週、二週——何かが不穏だった。いつもなら、いの一番に教室を飛び出して、そろそろこのあたりにやってきても、いい頃だ。

それが、来ない。

やがて、ばらばらと生徒たちが校舎を出てくる。なかには——渡したり渡されたりしたのである。表情もある。

どうしたのかな、棗君。こんな日に限って……。

こんな日に限って？

焦りが心のすみからじわりと顔を出す。まさか、中でなにかあったのか？

そういえば、そのことはまるで考えていなかった。

鼻屑目なんだろうけど、棗君はいい男だ。そりやもてるだろう。他に狙っている子がいてもおかしくない。

振り返ってみりゃ、今日の私はやたらと高揚していた。抑えているつもりではあるけど、女の子からすればまるわかりかも知れない。

私がライバルなら、先に渡そうと考えるだろう。たとえば私が教室を飛び出した後に——とか——。

心臓が早鐘を叩いていた。何があつた。焦りは恐れに豹変していた。

後ろを向くのも怖い。何が起つていてもおかしくない。でも……確かめなきゃならない。

ゆつくりと、ゆつくりと、振り返って、扉の向こう、校舎の廊下を覗き込む。そこに、

棗君が、

いた。

望遠鏡のように、ぐわりと視界が歪む。克明にその情景が、脳に叩き込まれてきた。その横に、神北さんがいた。

手渡していた。

なにを？

そんなもの、決まっている。チョコレートだ。

明らかに手製のラッピングだった。市販のものじゃない。それも、物凄く——気合が入っていた。本命、だった。

ふたりの顔は、見えない。それがせめてもの救いだと思った。

その横に棗さんが立ち、猫が威嚇するかのような顔をしている。馬鹿兄貴、お前にはりんちゃんはやらんぞ！、といったところかな。ううん、微笑ましいな……

客観視という名の逃避が、バターになったトラの如く、コマの如く、脳内で暴走するのが判った。その客観は、こういうのを血の気が引くという、医学的には副交感神

經の活性による急激な血圧低下とされる、云々、意味にならない意味を脳内にぶちまけた。でも、その意味はどうやら正しいなりに正しくて、私は——意識が落ちる前に——その光景を、もう見ていられなかった——脱兎の如くその場から逃げ出した。

どうやって部屋に帰り着いたのか、よく覚えていない。
足が保たなくて、ベッドに倒れ込む。

暗闇が私を襲う。

もう何も、

考えられなかった。



どれだけ時間経ったか判らない。

コンコン、

という音で、我に返った。

コンコン、

また、音がした。

誰だこんな時に。ベッドにぶつ倒れたまま、気怠げに首を回して、ドアのほうを見る。

コンコン、

——違う。音はドアの方から聞こえてくるんじゃない。それは、窓の方から聞こえてきた。

カーテンが閉まっているが、陽は落ちて、どうやら夕焼けもなく、淡々と薄暗くなっている時間だ。そのむこうから、

コンコン、

と音がする。

誰だろうこんな時間に、と素朴に思つて——いやちよつと待て、と思ひ至つた。こ
こは、三階だ。窓？ ノック？ そんな馬鹿な。幻聴か？ とうとう私は頭までおか
しくなったか。

だが、ノックの音は続いて聞こえた——何度も、何度も。

ぞわりと背筋が凍った。いわゆる誰彼時だ。境界の時間には魔がうろつく。心の隙間だらけの今の私だ——これは結構、やばいんじゃないか。

やばいだろう。やばいが……確認しなけりゃならない。

倒れ込んだベッドから音をたてないようにそうつと起きだし、忍び足で窓に近づく。そして、ごくりとひとつ唾を飲み込むと。カーテンの端に手をかけて——

カシヤアツ!!

一気に横に薙いで——私の目に飛び込んできたのは、

「な、棗君っ!？」

口をあんぐりと開けて叫んだ。そのままのものがそこにあつた。いや、いた。棗恭介が私の部屋の——三階の部屋の窓をノックしていた。恐らくは屋上からロープを垂らして、それにぶらさがって——!!

「ちよっ……!!」

どうやら幻じゃない。訳が判らないけど、こんなところで落ちられたらたまらない! 鍵を外すのもどかしく、窓を思いつきりに開け放つ。

「天野っ」

言うた棗君は窓枠に足をかけ、蹴った。室内、体を小さく丸めた棗君が、くるくると回転して、私の目の前を廊下の方へとすっ飛んでいく。そのアクションシーンがスローモーションに見えた。

「俺を——」

虚空を飛ぶ棗君から声がした。そして、どうやって体勢を変えたのか——こちらを向いたまま着地した。止まらない勢い、ズサアアアーツ!! と派手な音と土煙をたてて、棗君は廊下を後ろ向きに滑りながら、叫んだ——

「卒業させてくれ——!!」

土煙の舞う中、ようやく静止したその棗君の姿勢は、今まで見たこともないような立派な——土下座だった。それはもう、感動的なまでに。



呆然として時間が止まった。凍り付いた時間のなか、土煙だけゆつたりと収まるの

に、一分か、二分か。

なんだって？

卒業——？

哑然としたまま、問う。

「あのさ……卒業させてくれって、どういうことよ？」

「成績が足りないんだ……!!」

「はあ？ 成績？」

大技・エクストリーム・スライディング土下座を決めたままの棗君に反射的に突っ込んだ。

「成績って、それどういう事よ」

「そのまんまの意味だ。このままだと俺は、留年することになるんだ……頼むっ！」

「りゅ、留年っ……!？」

哑然とした。
留年っていったって、三年生のこの時期、もう通常の意味での授業はない。そんなのは十二月の末でとつくにおさらばしている。それだつてほとんど受験対策講座みたいなもので……まあとにかく、三年生の二月に「留年しそうだ！」なんて、はつきり言つてあり得ないというか、ぶつちやけ制度上何が起つているのか意味不明というレ

ベルの出来事だ。

そんな意味不明の状況下で、棗君の土下座が無様に滑稽だ。

棗君はそりや真剣なんだろうが、私は妙にささくれ立っている。笑い話じゃないんだ、と思った。なんでもかかって考えて——思い当たった。

それもそうか。

だって今日は、バレンタインデーなのだ。

ふと気づいたあまりの温度差に、愕然とした。こっちは棗君にシツレンしてるわけ
で、それでこんだけどん底なのだ。それに見向きもせずに乱入してきたと思つたら成
績だ留年だ？

あれか？

カノジヨができてハッピーになって、そんでよく自分の成績に気づいたってか？
ざけんな——と昏い苛立ちを司る人格がぼそりと言った。ビジュアルイメージは
チャツカマン。胸郭の虚ろに満ちる爆^ガ発物^スに、火が——

「——っざけんなア!!」

拳が壁にめり込んでいた。

「あ、天野……!?!」

棗君が目をまん丸にしてこっちをガン見している。何だそのツラは!?

「ああ、なんだか知らないけど棗君も真剣なのかも知れないけどね。ただね——こつちも真剣なのよつ!!」

「それがのこのこと私のまえて『卒業させてくれ』だあ? 何様だあんたはつ! 舐めてんのかッ!? ざけんなよつ!! 留年ね! いいじゃない留年つ!!」

「え……はあ?」

棗君がようやく顔を上げた。その間抜けたツラに私は、これでもかと罵声をぶちまけた。

「さつき見たわよチョコレート貰つてたでしょ! だらしなさそうにして嬉しそうな顔して! それがなんなのよあんたは! いつそのまま留年して——神北さんと一緒に卒業すればいいじゃないっ!!」

沈黙が訪れた。

言つてしまった、という後悔が今更のように空虚に沸き上がってくる。でもしかたない。こういうのは溜めておけないことだつてある。後悔ならば溜めこんだこと自体で、今この瞬間のこと、ではないだろう。

言いたいことを言い終わつたのだ。私は口を真一文字に結ぶと、白目を剥いて棗君を睨み付けた。

「あの……」

恐る恐ると言った風に、棗君が口を開いた。

「なんだか判らないけど、これのことですか？」

敬語だった。なんのつもりの方の口の利き方だ、と瞬時に逆上した。だが——取り出されたものを見て——逆上は一瞬で、ビッグバン級の理解不能へと沸騰、相転移した。空気が止まった。

チョコレートの箱はほとんど粉々に粉碎されていた。

ピザボックスを小さくしたような薄めの箱のど真ん中に何か直撃した後があつて、破けたラッピングの合間からプラスチックの割れた破片が見え隠れしていた。

ぶん殴られた、のか……これは？

通常あり得るバレンタインデーのイベントには、これは、ない。しかも、さつき見たときには、ちゃんとしていた。それが今やこれで、あまつさえ、それを抱えて窓からの土下座、そして「俺を卒業させてくれ！」だ。

「あの……一体、何……ですか？」

口から出た言葉は、奇遇にもというかなんというか、敬語だった。

ミッション・ポツシブル

目眩のする頭、私は額に手を当てて、椅子にぽすんと身を投げた。そしてあたまをがしやがしやと搔くと、

「ああもう……とにかくっ!!」

ふんぞり返って腕を組み足を組み、地面に膝を突く棗君の尋問を始めることにした。

「一体何がどうなってるわけよ!？」

問われ、棗君がぼつりぼつりと語り出す。

「レポートの提出期限が近い」

「レポートって……この時期に一体なんの？」

「二期期の期末テストの追試の代わりの」

「ふうん、なるほど——って、何だそりやつ! そんなルール聞いたことないわよっ!!」

「押し通した」

「棗君、きみ、バカでしょ」

「そうかもしれない……」

さすがの棗君もがつつり凹んでいる。こんなに凹んでいる棗君なんて、入学以来見

たことがない。

「頼む。このままじゃ俺は……ただのヘタレだつ……!!」

まあそりゃそうだ。バスターズのみんなにも顔向けできないだろう。就職も決まってるわけだからこりゃご愁傷様じやすまないかも知れない。

ぼんやりと棗君の土下座した後頭部を眺める。

気合いを入れまくったバレンタインデーだつてのに、この顛末は一体なんなんだろう。本当にやれやれ、だ。

私のため息をひとつつく。

そんでもって——ぱつと頭を切り換えた。ほんのすこし無理矢理気味なのは承知の上だ。

棗君の身に一体何があつてこんなことになつてるか、知らない。知らないけれど——頼られちゃあ、仕方がない。大概お人好しだが、これが私なのだ。

「棗君」

「あ、ああ……」

「いいから、ちよつと詳しく、聞かせなさいよ」

棗君の顔が、ぱあつと輝いた。



素行不良ならばともかく、成績が原因での留年というやつは、基本的には各教科の成績をまともな成績で上書きしてやるしかない。

棗君が言うのをなんとかまとめて、絶句した。要するに、ほぼ全教科全減つてことだったのだ。

こいつはとんでもない量だ。留年を回避してきた諸先輩方の事情はノウハウとして溜めこまれていくけど、そのなかでもトップクラスの崖っぷちだった。おまけにレポートには、提出期限を過ぎているものすらある。ぶっちゃけほとんどアウトなんじゃないかこれは。

他校のことは知らないけど、ウチの卒業判定会議はたしか、二月末だった。なんでそんなことを知ってるかっていうと、卒業できないとなると、これは寮の配室にも影響があるから、その結果は寮会の方にも回ってくるわけだ。その『特秘』のハンコをでかでかと押されたリストをもとにした配室調整を「二末（ニマツ）の調整」、留年のことを「二末（ニマツ）」なんて隠語で読んだりする。

とにかくその会議のまえに、逆転ホームランを一発ぶちかましてやる必要がある。もう、時間がなかった。

「棗君」

「はい」

「コネがありそうな先生は？」

「こっちの方面は、特に思い当たりません……」

一番楽な方法は即座にぶつ潰れた。まあ、そうだとは思っていたけど、裏技はそう簡単には使わせてもらえないらしい。

「そうになると、残る手は二つね」

「二つ？」

「レポートと追試」

げ、という顔をする。が、それを斟酌している時間的余裕はない。私はがたりと音をたてて、椅子から立ち上がった。

「とにかく頭下げて回るわよっ！」

「回るって……今からか!？」

「残ってる先生がいたら儲けものよ!」

襟首ひつ掴んで引きずるようにして、寮を出て、校舎に向かう。もう五時半で、残っている生徒は殆どいない時間だ。棗君がなんだか喚いているけれど、それに耳を傾けている余裕はない。市中引き回しの上打ち首のショータイムだ……じゃなくって、打ち首はなんとしてでも回避しなきゃならない。

各科の準備室に片っ端から飛び込んで、棗君の後頭部を蹴倒して土下座をさせる。

「卒業させて下さいっ!」

「いうことはそれだけっ!」

「不真面目な生徒ですみませんでしたっ！」

「誠意を見せなさいよ誠意をつ!!」

「レポートでも追試でも何でもやりますこの通りです——卒業させて下さいっ!」

頭を床に打ち付けすり付けんばかりの棗君に、先生方は一人残らず呆氣にとられた。だいたい何でもそつなくこなすので有名な棗恭介がどうしたつてこのタイミングで留年——と先生方も頭を抱えていたのだろう。そこに寮長に引き連れられて土下座だ。改心したというには滑稽成分が多すぎる。

数学科に英語科に物理科にと回つてさあ次は社会科だと意気込んだ頃、教務主任の先生が泡喰つて飛び出してきた。

「一体君たちは何をしているんだねっ!」

「棗君ほら言うことはないのっ!!」

「卒業させて下さいっ!!」

教務主任先生は、うへあ、と奇妙な顔をしてドン引いた。こいつなにやつてるんだ、と顔が物語つていた。

「と、とにかく生徒指導室にきなさい」

「先生でも社会科と家庭科と情報科と地学科がまだ!」

棗君の言葉に教務主任先生は、ダメだ、こいつア逝つちまつてやがる、とばかりに頭を振った。

「わかった、その辺も声をかけて集めてあげるから……とにかくこれ以上騒ぎを大きくしないでくれ！」

なんだと、といった風な顔で見回すと、柱の影、廊下の影に人の気配が……野次馬の気配がした。あの棗恭介が頭をどつかれて土下座している！生徒たちにしてみりや、これはちよつとセンサーシヨナルなイベントだろう。誰もが興味津々に棗君を見ている。

計画通り……!!

この件、そもそも棗君が悪いのだ、内々で処理されてはこの戦いには勝てない。それなら、いつそ派手にぶちかまして大事にしてしまつて、かついくらかの同情（というか憐憫？）をひいて、学校側の選択肢を狭めてやるのだ。

本来ならバスターズの——棗君の得意とする戦法だが、それを自分のために使えないのもまた棗君だ。そいつをかわりに振り回すのが、一応はそれなりの模範生徒で通っているこの私なんだから、我ながらおもしろおかしいというか、一回限りの大技だ。まあ、そうとでも思わないとやつてられない。

生徒指導室に大集合した各科の先生方を前に、棗君の卒業させて下さい攻撃が炸裂して、すったもんだの末に先生方は、ぎりぎり二月二十八日までのスケジュールでレポートと追試を設定してくれた。ちよつと厳しい幾人かの先生は眉をひそめたが、「棗

恭介を卒業させる——レポートと追試をクリアした場合に限り」という全体の方針は何とか維持された。とある先生が、ぼそりと、「君の面倒を来年まで見たくないぞ、私は」と言つて、あー、と納得と同意の感情が広がったときには笑つた。頭が回るくせに不真面目きわまりなく礼儀正しいという、そりや先生としては扱いにくいことこの上ない生徒だろうなあ。

それから二週間は、寝る間を惜しんでのレポート作成と追試に向けた必死の復習。完全なマンツーマン授業だ。色気のかけらもありやしない。五日間でレポートを八本片づけ、週末で六教科の追試の対策をした。翌週の追試ラッシュは、直前詰め込みと、テスト終了後は次の追試に向けた特訓だ。「死ぬ……」とか弱音を吐きやがるので、「棗君はもう死んでいる！」と返したら死んだ目で「たわば」と呟いてぶつ倒れた。その日はさすがにそのまま寝かせた。まあ、確実に勝てるラインまで詰め込んだ後だったから。

とにかく二十八日、卒業判定会議の前日、最後の追試が行われた。この時期の追試で、しかも棗君一人のためということもあり、採点はその場でされた。胃が痛くなる一瞬だった。これをクリアすれば卒業、さもなきや留年だ。

胃が痛くなるような緊張、先生の○をつけたり×をつけたりする音が、しゅっしゅつと響く。そしてその答案を最後に一回眺めなおした後、先生は肅々といった。

「合格——卒業、おめでとう」

「いよつしやあ!!」

私は思わずガツツポーズで叫んだが、とうの棗君はなにもいわず、そのままその場にへなへなとへたり込んだ。

先生が立ち上がり、

「教務主任に報告してくる。君たちも疲れただろうから、ちよつと休みなさい」言う
と、教室を出ていった。

こうして、あまりにも明後日に騒々しい二月は、ようやく終わりを告げたのだった。

桜咲く三月 棗恭介の卒業

棗鈴、怒る

三月三日の桃の節句、雛祭りの日は、バスターズでの女子会が開催された。

去年までのバスターズは、女の子が棗さんだけだったこともあって、特段に雛祭りが盛大に祝われることもなかったという。ひなあられを食べるくらいで、ひな人形を飾ることもなかったらしい。棗さん曰く、「なんか、はずい」。ある意味で少年的なところのある棗さんらしいといえそう。事実上の後見人であるところの棗君の責任だろう。

……まあ、そこそこはおいといて。

雛祭りは日本の伝統行事であるので、もちろん会場は畳敷きの部屋であることが望ましい。そんなわけで選ばれたのは、例によって家庭科部室。

二木さんたちが家（平穏なほうの）から持ってきた、こぢんまりとしたひな人形を飾って、和風少女能美さんとお菓子少女神北さんの最強コンビが皆の期待を一身に背

負って調達した和菓子を食べながら。準備の時間は元家庭科部長たる私が留守番役で、たつぷりの甘酒とお汁粉をなべでぐつぐつとやっていた。こいつが結構な好評で、たくさん作りすぎたかなと思っただけ、減り具合を見る限りその心配はしなくてすみそうだった。

「あーちゃん先輩」

「ん、なに、神北さん？」

私をその名で呼ぶのは、かなちゃんと神北さんの二人だ。常軌を逸してはずかしい渾名を正々堂々と呼ぶのは、まあ、かなちゃんはその四角四面性ゆえであって、一方で神北さんはなんだろう、あの「姉御」来ヶ谷さんを『ゆいちゃん』と呼ぶのと同系列なんだろうが、まあ、とても個性的なことだよなあと思う。

「この甘酒、すつごくおいしいんですけど、何か隠し味が入ってますか？」

む、そこに気づくとはやるではないか神北君。いち料理好きの顔が我が脳内のインナースペースでむくむくと頭をもたげた。そのむこうで、能美さんが口元に手を当て、中に目をやり何か考えているような仕草をした。そして一口、甘酒にくちをつけると、ぴこーん！ とばかりに『討ち取ったたり！』の顔。

「わふーっ！ この発想はなかったのですっ！」

「あら、能美さん判った？ でも、色々な料理に入れるでしょ、能美さんも」

「はい。醤油に味噌に……さしすせそ？ わふーっ、砂糖にも合いますね！」

「そういうこと。結構王道の手よ、これ」

「私もまだまだ修行が足りないのですっ！」

「ふうむ、なるほど。さすがは天野先輩」

「淡々と来ヶ谷さんが合いの手を入れる。お気に召したか、満足そうな顔だ。」

「えーと……」

「一方の神北さんは、首をかき上げて考えこんでいる。」

「……薄荷、かなあ？ でも、ちよつと違う気もするなあ」

「惜しいわね、神北さん。近い！」

「ううん……思いつかないよ……」

「なるほど。こういうのは、洋菓子ベースの神北さんより、日本料理ベースの能美さ

んの方が得意なのかも知れない。面白いなあ。」

「これはね、生姜を入れてあるの」

「ほわあ、生姜ですか!？」

「まるで意外な答えだったか、神北さん、目を丸くする。」

「生姜って、おうどんとかお刺身につける生姜？」

「そ。薄荷とおんなじで、広い意味での香草ね」

「あ、そうか。ほんとに惜しいのかも……」

神北さん、甘酒をくんくんとしてまた一口。

「……生姜か」

「さつき能美さんも言っていたけど、生姜つてお砂糖ともよく合うのよ。生姜の砂糖漬け、なんていうのもあるし」

「ふえ……」

ちよつと想像の埒外だったかな。

「甘酒にもね、生姜を擦ったのを入れるの。そうすると、甘さは引き立っし、くどくならないし、ついでに体も温まるのよね」

「そういえば、体がぽかぽかしてる気がする……」

「やつぱり寒い冬は体が温まるあったかい飲み物がいいわね」

「色々知ってますね、あーちゃん先輩。いいなあ。お母さんみたい」

その神北さんの言葉に——あの光景がフラッシュバックした。半月前、バレンタインデー、神北さんがチョコレートを渡している風景。しかしそのチョコレートは無惨に粉々にされたのだ。わたしの知らない何かが起こって。

「……こういうの、いいと思うんだけどなあ。若い子たちにはおばさんくさいって言われるのよねえ」

「ほわあつ！ あのそういう意味じゃなくって！ 素敵だと思いますよっ」

「ありがと、神北さん」

につこりと笑顔を返す。神北さんの言葉に偽りはないと思う。私の笑顔はどうだろう。

甘酒をまた一口啜る。

うん、おいしい。

そして、ほう、とひとつ息をつく。

やはり——確認しなけりやならない。



その夕方、棗さんを誘って河原に出た。

夏に能美さんたちがペットボトル・ロケットを飛ばしていた場所だ。あの賑やかさはもうなくて、ひどく閑散としている。ペットボトル・ロケットを飛ばせるんだから、そりやそうなんだろうけど、人がいないそこは、いつもよりずっと広く感じられた。

「あの日か」

私の問いに、棗さんはなんだか首をすくめるようにして、問い返した。

「寮長はどこまで知ってる？」

「私？」

「うむ」

「私は……」

さて、記憶を探ると……二月十四日のあの衝撃のシーンが思い出された。思い出したくなかったような気もした。ちよつとだけ。

「いやア……大概おもしろおかしい展開だったわね……」

「そんなに」

「棗君たら、屋上からロープを伝つて降りてきて、窓から飛び込んできたと思つたそのままスライディング土下座をね」

「……」

棗さんが黙り込んだ。その様子を想像してゐるだろう。そして、うわアゝつてな感じのひどく恥ずかしそうな顔をして、

「うちの兄貴がご迷惑を」

「いやいや、まあ、いつものことといえばそうだし」

「そうなのか……」

「一年の時とかね」

そもその初対面がロープ懸架で窓から侵入なのだ。慣れてるといふのはそんなに嘘でもない。もつとも、棗さんはそのあたりを知らないはずで、案の定ちよつと首を

かしげて見せた。

「ふうん……あたしの知らない一年だな」

「そうなるわね」

ちよつとした優越感。大人気ないとは判りつつも。

「でも、私を知ってるのは、それだけ。それで、一体何があつて、棗君をスライディング土下座に駆り立てたのかつてね」

「確かにそれは、気になるだろうな」

「でしょ？」

顔を見合わせて、苦笑い。もちろん棗さんも、棗君のことが好きなんだろうが（兄妹として、だ）、それでもちよつとどうなんだろうと思つてしまうところはあるんだろう。もちろん私もだ。

「ええとな」

少しだけ顔を赤くした棗さん、なんだか言いにくそうな顔をしていたけれど、やがて、むすつとした口調で、言つた。

「要するになんだ、あたしが、恭介を、ぶん殴つた」

ふうむ、そうなのか……と納得しかけて目を剥いた。ぶっきらぼうな言いようにぴつたりの、なんだその、

「ぶ、ぶん殴つたア!？」

「そうだ」

今度は棗さん、開き直ったようだ。腕を組むと、ふん、と鼻息ひとつをならして、はつきりと断言する。

「ぶん殴った」

「あ、そうなの……」

毒気を抜かれた。そりやまあ、棗さんらしくもないというか、ハイキック・ツツコミなら割とよく見かける光景だけど（下着を見せないあのカタは、いったいどこで覚えたのだろう）、手を出すっていうのはなかなか——というかいちども見たことがない。

「ぶん殴つてな、あいつがぶつ倒れたところに、こうやつて襟首掴んで持ち上げて……」

右手でそんなりアクションをする。ほぼ顔の真つ正面に逆しまに持ち上げられた拳が、棗君の襟首を掴んでいるとすると……殆ど顔を近づけんばかりにしているみたいだ。睨み付けて——いるんだろう。そして棗さんは、すこしだけ暗い声で、付け加える。
「……ふざけんな、って、キレた」



棗鈴の渾身の一撃で、棗恭介は座った椅子ごとぶっ飛ばされて、無様に床に転がった。呆然と頬を押さえる。唇を切ったか、かすかに血が流れていた。そして、その横

には碎けたチョコレートの箱が転がっている。

「り、鈴……」

「あたしがどんな気持ちでそれ作ったか……おまえ、本当になにも判んなかったんだな」

鈴が底冷えのする口調で言うのと、つかつかとぶつ倒れた恭介の足元に歩み寄る。

「判らないなら言ってやる。もう今年で最後だつて思つたんだ。最後のお礼だ。もうそんなに顔を合わせることもないだろ。だから頑張つて作った。それがお前……」

そして、その襟首を乱暴に掴むと、ひねりあげた。

「留年だ!? ふざけんなッ!!」

「永遠なんてないんだ! いつまでもここで遊んでいられないんだ! そりやあたしだつて嫌だ! だけど、そうじゃないだろッ!! おまえは行かなきゃならないだろッ!!」

涙声だった。

「そんなんでどうするんだ! 心配してるんだこつちは! そんなことまるで判つてないだろッ!! それなのにおまえは……何様のつもりだッ!!」

鈴は恭介の襟首を掴み上げたまま、顔をぐいと近づけると睨め付けた。窓の向こうから差す夕陽が逆光になって、橙のなかに異様な二つの人影がくつきりと黒く映えて微動だにしなかった。

凍り付いたような時間が——どれだけ経っただろうか。恭介は襟首を掴みあげられたままだ。だが、

「……もう、いいのだろうか？」

殆ど聞こえないような声を漏らした。

「俺は……やり終えたのだろうか……」

鈴は、表情をぴくりとも変えず、その目はしつかと見開かれている。その双眸を見て、恭介は——ふっと表情を崩した。

「そうか……」

それは泣きそうな声で……。

「いつの間にか……やり終えていたのか」

そして、恭介はがくりとその場に頰くずおれて——その伏せた顔から、嗚咽が聞こえてきた。



私の頭の中で、ようやく、話が繋がった。留年と土下座とが、どうしてあのタイミングで繋がったのか——そして、口を衝いて出てきたのは、二月十四日の中心となるべきあの——粉碎された——小道具——

「……あのチョコレート、棗さんのだったんだ」

「あのつて……知ってるのか？」

「二回、見たわね。その……神北さんが渡したときと、それから、土下座キメられたあとに、見せられた。なにがあつたかは訊かなかったけど、まあ、粉々だったから、何かあつたんだろうなあとは思つて」

「見てたのか……」

「棗さんたら、棗君と神北さんの横に立つて、なんだか顔を真っ赤にしたから、どうしたのかと思つてたけど——そういうことだったのね」

「まあ、そういうことだ……」

渡されたチョコレートの製作者なんだから、しかも兄妹チョコレートにしてはちよつと気合いの入りの感じがする。たぶん神北さんにナチュラルに加速されたのかな……。

「寮長」

ふと顔を上げると、棗さんがやたらと真剣な顔をして、私を見ていた。

「ど、どうしたの？」

ちよつとむせるように答えると、棗さんの目がわずかに不安に揺らいだ。

「あの、あたしも訊きたいことがある」

「なにかしら？」

「その……な」

「うん」

「寮長は……渡したのか？」

ああ——そのこと、か。

そういえば、あの後のてんやわんやで、そのあたりの話もぜんぜん、してなかった。かなちゃんにもだ。む、そういえば……

「棗さんは、どこからその話を？」

「かなたから聞いた。恭介には言ってないぞ」

「そう……」

どうやら知らないうちに、友人たちに心配をかけてしまっているようだった。

「実はね——渡してない」

「やつぱり、そうか……」

耳をグツタリさせた猫みたいに、棗さんはうなだれた。

「あたしのせいだ……」

「仕方ないことよ。悪気があったわけじゃないし」

「でも、渡せなかったんだろ」

「それは……そうね」

「どうするんだ、寮長」

「実はあんまり考えてないんだ。二月はとんでもなく忙しかったし」

「かえすがえす兄貴が申し訳なく」

「まあ、その『兄貴』の話だからね」

「それもそうか」

梶さんはちよつとだけ納得の口調だ。そして、ぼつりと付け加える。

「あたしは、その、なんだ。きょーすけと寮長が一緒になればいいと思う」

その言葉は意外なアシスト弾だった。

「そう？」

「おにあいだ。というか、あの馬鹿兄貴につきあえるやつはそうそういない。もてるか知らんが、そんじょそこのやつだと愛想を尽かされて終わりだ」

「まあ……そうかもねえ……」

「そのあたり、寮長なら安心だ。あれだけ振り回されて……まあ、もし今でもそう思ってるんなら、だけど」

声が小さくなった。

「どうだろ、寮長」

その問いには、即答だ。

「好きよ。今でも」

「そうか……」

「あのさ」

なんだ、と棗さんがこちらを見た。ふと、訊いてみよう、という気になったのだ。そんな気分のあるときもある。

「神北さんのこと」

「こまりちゃんか」

「神北さん、棗君のこと好きなんじゃないかなあつて」

私の問いに、棗さんが黙り込んだ。

少し冷たい風が吹いて、棗さんが首をすくめ、マフラーに顎を埋めた。

「でも、こまりちゃんは恭介に渡してない。準備もしてない」

「……」

「寮長は準備した。そうだろ」

「そう、ね」

「だったら、そういうことだ」

そこに違いがあると——一線があるということか。棗さんは、またこっちを向いた。

「まだ、あるのか？」

「え、何が？」

「チョコレート。渡せなかったやつ」

「ある……わね」

「捨てたり食べたりしてないのか」

「そんな暇もなかったし」

「それは、そうだな」

顔を見合せて笑う。まったく、棗君のあの騒ぎはひどいもんだ。おかげで、チョコレートのことなんかすっかり忘れていた。

なるほど、私は捨てたり食べたり、していない。確かに、だ。

「……自分で食べちゃうのも、もったいないわね」

「そうだろ」

「そうね」

あの日、シツレンの勢いでなにかしら始末しちゃつていれば話は別だけれど、結果としてはそうじゃない。モノが残っているのだ。

ということとは、おそらくは、感情も。それなら、

「渡さなきゃならないわよね……」

呟くと、棗さんが、なんだか嬉しそうに微笑んだ。そして、それでよし、とばかりに言った。

「ああ——頑張れ、寮長！」

幸せスパイラル

三月も半ばになると、時折、芽吹き季節を予感させる、春めいた風が吹く。今日も、そんな朝だった。

実のところ、ここしばらく棗君との会話は多くない。あの怒濤の棗君卒業計画の時には、ぎやあぎやあと色々まくし立てたり、さすがにその言い方はないだろうと棗君が反論したりで（もちろん即座に叩きつぶした）、ロマンチックとは光年も程遠いにせよ、二人の会話というやつはあった。それも二月の終わりの頃の話だ。

それからは概ねバスターズの日々であって、つまりみんなの時間だった。

卒業が決まるというのは、いや、決まらないっていうのがおかしいんだけど、それなりにバスターズの人々にも考えさせるものがあつたらしくて、この半月は弾けきった大騒ぎというふうではなかった。ものごとが終る時期特有の、夕暮れの公園みたいな空気がだった。

棗さんと話をしてから——三月十四日に渡そうと、決めていた。

渡すものは、準備した。準備といっても特段することはない。なにしろ一ヶ月前に渡し損ねたあれなのだ。

別のものを用意するか、とも考えたのだけれど、考えて、やめた。これは私の気分

だ。私の気持ちはあの時から変わっていないわけだし、なんというか、やり損なったことをやり直すのに新しいものを用意するのは、なんだか違うような気がしたのだ。でも、心の奥にひとつもやもやが残っていた。それを解決できないまま三月十四日を迎えて、果たしていいものかどうか判らなかった。

そんなことをかなちゃんに相談したところ、「言わなきや判りませんよ」と優しく助言してくれた。ありがちなことだけど、でも、大切なことだ。よし、と私は心を決めた。話をしてみよう、と。

そして私は、ここに立っていた。



屋上だった。神北さんの秘密の場所だ。

ふたり、広がる町を見下ろしている。山と海に挟まれた小さな平野に、肩を寄せ合うようにして家々が並んでいる。

町は変わっていく。小さな地方都市に分類されるだろうここは、若い人たちの流出が止まらないと聞く。それでも、この町で生きているひとたちがいるのだ。

そんなことを思う。

神北さんの隣はなんだか居心地がよくて、こうやってずっと町を眺めていられる気

がする。でも、そういうわけにはいかない。こういう話は切り出しにくいけど、それは私の責任だ。すう、と息を吸った。

「あのね」

「うん」

「棗君のことなんだけど」

「恭介さん？」

「そ」

「そうかあ……」

神北さんは、どうも私の言葉を予想していたらしい。女の子ネットワークは、そういうところには敏感だ。

「なんでも訊いて。お話しできることはお話しするよ」

「そう？」

「うん」

然り。腹を割るリスクはこっちが負うべきものだ。

「……私さ、棗君のことが好きなのよね」

「うん」

「知ってた？」

「なんとなく。でも、みんな、気づいてるんじゃないかな」

「そっか……バレバレかなあ」

「バレバレですよ」

もう、屈託のない笑顔だ。こっちは声が震えてるかも知れないなんて思ってるのに、まったく。

「それでね」

「うん」

「神北さんはどうなのかなって」

言ってから、言っちゃったなあと思つた。一歩間違えば気持ちの悪い話だし、私も、一歩間違っちゃつてるかも知れない。

こういうのはひとりで黙って自爆しに行くのが礼儀、とも言えるだろう。それならこれは礼儀知らずの振る舞いだ。

「ええとね」

神北さんがゆっくり言葉を選ぶ。センチティヴな話題だ。

「私も、恭介さんのこと、好きだよ」

言葉が脳髓に浸透するまでしばらくかかった。脳天をぶん殴られた、という感触がこれかと思うまでどれだけかかったものか。数秒か数分かの永遠だ。

やがて、その永遠を打ち破るがごとく、神北さんがぼつり、言つた。

「恭介さんは、素敵な人だよ」

一体神北さんが何を言わんとしているのか判らなかつた。いや、そんなことは判っている。そのうえででも、この状況で私に何を伝えようとしているのか判らなかつた。でも、神北さんは私に語りかけてくれている。そして私と神北さんは、親友とは言わないまでも、友達であるはずだつた。仲間であるはずだつた。バスターズの、だ。果たして神北さんは口を開いた。

「あーちゃん先輩、恭介さんのことが好きなんですよね」

「そう、ね」

それは確かなことだ。私は棗君のことが好きだ。さつき神北さんに問われて答えたとおり。

「それなら、恭介さんに伝えればいいと思うんだ」

その言葉には矛盾があつた。私はそれを口にした。

「でも、神北さんは、伝えたの？」

「それがね、難しいところなんだ」

神北さんは屈託なく笑つた。あんまり屈託ないもんだから、ちよつと呆氣にとられた。

「だつて神北さん、私には、伝えればいい、つて言つたじゃない」

「うん」

「それじゃおかしい。神北さんだつてそうすればいい」

「ええとね」

神北さんはこんどはひどく寂しそうな顔をした。それでいて満足があつた。その表情の意味を私は、とりかねた。

「あーちゃん先輩にとって、恭介さんってどんなひと？」

問われている。私は答える。

「とつても好きな人よ。大好きな人」

「そうだね」

神北さんは深々と頷く。そして——その表情とはまるで相容れないことを口にした。

「私は、違うんだ」

「……？」

「私にとつて、恭介さんは、まず、りんちゃんのお兄さんなんだ。それが一番おおくて、それ以外は……二の次っていうのかな」

「二の次……」

「とつてもあたりまえな、ただの優先順位の話。あーちゃん先輩は、そうだなあ、この三ヶ月、どうでしたか？」

「三ヶ月？」

「そう。十二月、一月、二月。クリスマス・パーティーからの三ヶ月」

それはつまり、私がバスターズを居場所とした三ヶ月間だった。それは——
「……素敵な三ヶ月間だった。最後の三ヶ月間ね」

「うん。それで、これからの一年は、私にとってそうなんだよ。最後の一年間。私を私は、りんちゃんと一緒に過ごしたい。それが私の一番。恭介さんのことは好きだけど、恭介さんのために使う時間は、ないんだ」

ひゅう、とまだ少し冷たい風が吹いた。冬の名残だ。

忘れていた。この風が春になって、夏になって、秋になって、冬になって、また春になれば、神北さんたちもまた、この学校を去る。多くの時間は残されていないのだ。それを棗君のためには使えないという。

「……もちろん、一年後には判らない。もしかしたら恭介さんの方が大きくなっているかも知れない。忘れちゃうって事はたぶん、ないと思う」

「うん……そうよね、多分」

「だけど、だからこそ私は、あーちゃん先輩に、待つて、つていうことはできないよ。だって、一年つてとつても長くて、とつても短いからね。大切にしないと。もちろん、恭介さんもね」

「……」

「それに、私は思うんだ。誰かが幸せなら、私も幸せ。みんなが幸せなら、私はもつと幸せ。ね？」

ふつと頬が弛んだ。いつか神北さんから聞いたことのある言葉だ。

「なるほど、幸せスパイラル理論、か」

「いえーす、そういうことなのです」

人差し指を立てて、神北さんは頷く。

「りんちゃんがいるから、私は幸せ。あーちゃん先輩が幸せなら、私はもーつと幸せ。だから——」

私の顔をしっかりと見て、神北さんは笑う。

「いつちやいなよ、ゆーっ!」

棗恭介の逡巡（直枝理樹の補記）

さて、恭介を巡るあの大騒ぎが片付くと、もう三月。とにかく恭介卒業おめでとう、と言ってあげられそうなのは、本当にほつとしたというかなんというか、天野先輩には感謝の言葉もない。けれども——その天野先輩に残された時間は一ヶ月に満たなかった。

僕や二木さんはあまりにも天野先輩の側に立ちすぎてしまっていて、直接恭介にどうこう、という行動を取るのにはちよつとためらわれた。二木さんなんかと顔をつきあわせて色々と話もしたけれど、結局あとは天野先輩がやるだけやるしかないという結

論になった。ところが、後から聞いたところによると、どうもバスターズの何人かが、恭介の背中を押したらしい。その話を少しだけ書き残しておこうと思う。



棗鈴は、ちよつとだけ考えた末、棗恭介を呼び出すことにした。その日、三月三日の夜、閉まりかけの、そろそろ誰もいなくなつた食堂だつた。

「よう、鈴」

軽く片手を上げて、恭介が食堂に入ってきた。そのまま鈴の正面に腰を下ろす。

「で、どうした、鈴」

鈴はちよつとだけその表情を観察する。いやなもの、なさそうだ。

「……なあ、兄貴」

「ん？」

「このあいだはなんだ、その……悪かつた」

棗恭介は、その妹の言葉にちよつとばかり驚いたようだった。

「悪かつたって、なんだ、そんなことを思つてたのか」

「いや、悪いのはお前なんだが……でも、殴つただろ」

「まあ、そりゃあ、そうだ」

「だから、悪かった」

「む……」

驚きの表情は、割とすんなりと得心のそれに変わった。

「わかった。その詫びは受け取ろう」

「ああ」

「それで、それだけか？」

今度は棗鈴が目を丸くする番だった。恭介が続ける。

「喉に骨が刺さつてると、言いたいことも言えないもんだ。だろ？」

「うみゅ……まあ、そうだな」

「なんだよ、鈴」

「その……あの日だけど」

「ああ」

「人づてに聞いた話だ。なんか、寮長がチョコレートを用意してたらしい」

棗恭介が無言になった。

「どう思う、兄貴」

「どうって……どういうことだよ」

鈴は答えない。じつと恭介の瞳を覗き込む。特にリアクションも取らなかつたが、昔の鈴なら絶対にしなかつたことだ、と恭介は思う。最近是这样して、人の目をじつ

と見ることが多い。ご機嫌を伺う、じゃない。お前の真意はなんだ、と覗き込まれるのだ。

誰もがそれに耐えられるわけじゃない。目を逸らしちまうやつの方が多いだろう。でも、俺は答えてやらなきゃならない。そうじゃないか。

「……」

どう、なんだろう。

ぎゅつと手を握った。胸の奥になんだかもやしたものがあった。灼熱の溶岩とかではなかった。どちらかというと、違和感というにはぞわぞわする、といったふうだ。恭介は口をへの字に曲げて、鼻息をひとつすると、

「よく……わからん」

小さく呟いた。

「わからんか」

棗鈴は鸚鵡返しにした。恭介が真面目に考えて今の言葉をいったつてことくらいは、判る。考えちゃつてゐるつてことも判る。そんなだからおまえはダメなんだ、と鈴は思う。どうしても頭を使おうとするやつだ。棗鈴は、鈴自身がそんなに頭がよくないから、そのあたりはそれこそ、よくわからない。頭と心の使い方は、どうにもあんまり似てない兄妹だなんて思う。

もう一発撃ち込んでみるか。

「それでだ、結果はどうだったと思う。聞いて知ってるかもしれないが」

「結果？」

「チョコレートのだ」

恭介の顔が、ほんの少し、でも確かに歪んだ。

「俺は聞いてない。というか、そんなことがあったっていうのも聞いてない」

「そうか」

まあ、そりやそうだ。恭介が知っているわけがない。でも恭介はその辺りの事情を知らないから、本音を試すには丁度いい。嘘にはならないし。

鈴は黙って待った。恭介が自分の言葉を期待しているのはそりや判るけど。でも、その恭介曰くもやもやつてのは、なかなか厄介なやつなのだ。

果たして恭介は、口を開いた

「で？」

「でってなんだ」

「どうなったんだよ」

明らかに不機嫌そうな声だ。

「何がだ」

「何がってその、チョコレートに決まってる」

「知りたいか」

「そりや……」

口籠もる。だが、恭介は自分で問うたのだ。そんなくらい判るはずだ。

「……気になる」

「そうか」

うむ、と棗鈴は頷く。

「それなら教えてやろう。寮長はな」

「……」

「結局、渡せなかったらしい」

ぷひゅう、と空気の抜ける音がして恭介が食卓に突っ伏した。

「なんだそれ……」

呻き声があがる。そこにひとかけらの安心が含まれているなと棗鈴は思う。

「どう思う」

鈴は再び問う。恭介は無言だ。

「寮長はあれだ、いわゆるオクテってやつなんだな、きつと」

「そう……かもしれん」

「で、まあ——それだけだ」

一呼吸おいて、これ以上のヒントをやるべきかどうか鈴は迷ったが、結局、曆に従うことにした。

「そんなわけで、恭介」

「……」

「○対○、九回表、ランナーは知らんが、ツーアウトツーナッシング、寮長は空振りで三振だ。もうチャンスはない。恭介、つぎは九回裏だ」

裏……？ 突っ伏したままの顔を横に捻って——棗恭介がその比喻を理解するのに四秒かかった。目を剥いた。

「恭介」

その目に顔をぐつと近づけて、棗鈴は言った。

「この試合は、延長戦なしだ。でも、おまえは今ならバッターボックスに立てる」
何のことを言っているのかは明白だ。鈴は最後にもう一度、問う。

「どう思う——どうする、恭介」

そして、最後に一瞥をくれて、鈴はふわりと振り返ると学食を出て行った。後はあいつの考えることだった。それに、棗鈴としてもそれなりに満足のいく結果だった。なにしろ、最後のヒントを——出さずにすんだのだから。



そんなことがあつて、棗恭介は延々と考えていた。だがしかし、自分の抱えるもや

もやを、自分だけで解決することは到底できないと思った。それはあと何年たつてもそのままのようにも思われた。

しかし、時間は待ってくれない。止まってくれない。答えは出さねばならない。いくつもの眠れぬ夜を過ぎて、結局、棗恭介は友人を頼ることにした。おそらくは同じような悩みを抱えているであろう友人を、だ。

剣道場に足を踏み入れるのは、滅多にあることではない。ある種の神聖さを持った空間であるし、普通にしていれば体育の授業で使う体育館やバレーボールのコートとは、どうにも勝手が違う。

宮沢謙吾は剣を振っていた。

棗恭介にはいわゆる武道の心得はなかったもので、その剣の振りざまがどんなものであるのか、きちんと分析することはできなかった。ただ、その姿はきわめていつも通りの謙吾に見えた。特段なにかの迷いを振り捨てるための行為とは映らなかった。

宮沢謙吾がちらりと棗恭介の方を見た。目線が（少し待っている）と言っていた。恭介は頷くと剣道場の隅に腰を下ろし、見よう見まねの座禅を組んだ。

むかし、禅寺に二、三回通って、座ったことがある。日曜朝の座禅会だ。ただ心を澄ませ、座る。何も考えないという目的を持ってしまつては、すでに考えている。無にするとは、そういうことではない。らしい。なんともそれこそ禅問答じみていて、

きわめてブラクティカルな差し迫った問題を抱えていた当時の恭介は、そこに得るものはないと判断を下した。それ以来禅寺にはとんとご無沙汰だ。

だが、今の棗恭介は、座ってみたくなくなった。

……。

板張りのひんやりとした床が心地いい。すつと背筋を伸ばして、息を吐ききり、ひとつ深呼吸をすると、ふつと気持ちちが落ち着いた。

しかし、悶々と考え事の浮かんでくるのが凡人の凡人たる所以だ。

結局、こんなところまで足を延ばしてきて座つても、頭に浮かんでくるのは天野の顔だった。ほとんど煩惱といつても差し支えなからう。除夜の鐘で打ち払ってもらふべきだったかも知れないと恭介は思う。

視界の奥で、謙吾が剣を振っている。いかにも雑念がなさそうだ。あいつも考えることがあるように、なんであんなに超然としていられるんだ。棗恭介はなんだか友人がうらやましくなった。もつともそれは、友人のところにやってきた選択が間違っていないかったということでもある。

しばらくすると謙吾は剣道場から姿を消し、やがて、片づけられた用具一式を担いでやってきた。ゆつくりと座禅を解いて立ち上がる恭介に、謙吾が声をかける。

「待たせたな」

「いや、悪くなかった」

「そうか？　ならいいが」

そしてふたり、そのまま剣道場を後にした。

向かった先は、河原だった。ふたり、土手にどつかと腰を下ろす。目の前には橙に染まった空が漠と拡がっていた。

口を開いたのは、謙吾だった。

「座って、何か判ったか？」

「ああ」

謙吾は、ちらりと恭介を見る。

「俺は煩惱まみれだ」

しかしそう言う恭介の顔は、一向に涼やかだ。

「そうか……」

答える謙吾の顔も、また穏やかだった。

「ならば、俺から何か言う必要もないだろう」

「ところが、そうでもない」

「ほう？」

「どうしたらいいもんだか……想像がつかない」

「どう、とは」

「なにを準備してどうやって渡すのかってことさ」

「十四日にか」

「ああ。こういうのはどうも、勝手が判らない。正直、困った」

「天下の梶恭介が『困った』か。これは面白い」

「こっちは本気なんだ」

からかうような謙吾の口調に、恭介はまるで少年みたいにむくれてみせた。

「わからないんだよ。こういうのは。思い返してみれば、お前らと遊び回ってばかりいたからな」

「それはそうかも知れないが、理樹と鈴をなんとかしようとしていた男の台詞とは思えんな」

「必死だったんだよ、あの時は」

「無様極まりなくな」

「それはお互い様だろう」

「それは、そうだ」

ふたり、顔を見合わせて屈託なく笑う。

「それでまあ、どうしたらいいか判らない。だから相談にきた」

「何故俺に？」

「お前も、あるだろう」

「笹瀬川の件か」

「ああ」

「そうだな……」

今度は謙吾が空を眺める番だった。

「どうするんだ」

「うむ」

謙吾は少しだけ空のむこうを見るようにしたが、やがて少し寂しそうな顔で、
「おれは、返事をしようと思ってる」

とだけ言った。表情を変えず、恭介が問い返す。

「イエスカ、ノーか」

「イエス……だ」

それは迷いのない返事だった。

「そうか……」

「俺は前を向いて歩くことにしたよ、恭介。あいつのことは、笹瀬川だって知ってる。
それでも俺に機会をくれたんだ」

「そうなのか？」

「そうだ。十四日にな、そう言っていた」

十四日。間違いようもない、二月十四日だ。

「真っ直ぐだな」

「真っ直ぐだ。いい娘だ」

「お前には似合ってる」

「そうだといいがな」

「それで、どうするんだ」

「具体的な話か？ 無粋だな」

「具体的なところで困ってるんだ」

「まあ、そうか」

謙吾はなんだかひどくおかしそうな顔をして笑った。

「俺は、俺のやり方がある。というか、笹瀬川と俺、だな」

「ふむ？」

「あいつは礼儀正しいソフトボール部のエースだ。俺は剣道の男だ。それならそれで、筋の通しようはある。まっすぐ普通に行けばいい」

「なるほど、それは真っ当だな」

「要するに、相手と自分を見ろと言っているんだ。お前と天野先輩なら、それなりのやり方があるだろう。お前たちのことを、おまえはどう考えているんだ」

「まあ、クラスメイトだな」

「表層的な答えだ」

「一年間、寮会執行部で一緒だった」

「伝聞で知っているが、それは昔の話だろう」

「俺にしてみれば懐かしいって感じだけだな……でも、そうだ、昔の話だ」

「今は、どうだ」

「今、か……」

恭介はやれやれとばかりに首を振る。

「やつぱり、バスターズ、だろうな」

「そうか。俺も、そう思う」

「だが、それでどうするんだ。バスターズで色恋沙汰なんて今までなかった、理樹だつて、二木が入ってきたのは、その後のことだろ」

「だから、『色恋沙汰』に絞らなくていいと言っているんだ」

「……」

「思考停止か」

今後こそ謙吾は苦笑した。知ってはいたつもりだが、こいつはとんだ朴念仁だ。

「まあいい。ヒントをくれてやろう」

「頼む」

「一度しか言わないからよく聞け」

ごくろ、恭介が唾を飲んだ。

「俺がお前なら、こう言うだろう。『すべては等しくミッシェンさ』ってな」
恭介の顔に理解の色が広がった。

「ミッシェン……か!!」

「そうだ。おれたちはバスターズだ。なら、これからお前がすべきことも、またミッシェンだ。違うか？」

「違う」

今度は確信を込めて、恭介が言った。

「まったく、こんなことに気づかないなんて、どうかしてる」

「自分のことが一番見えないものさ」

「にしたって、一番根っこの部分が見えないとはな」

「そんなものだ」

「とにかく感謝だぜ、謙吾。その慧眼、やっぱり剣を振っているからか？」

「剣——か」

謙吾はふと、まるで面白い言葉を聞いたような顔でにやりとした。

「なあ、恭介」

「なんだよ、改まって」

「俺のこの剣の振り方、誰に教わったと思う？」

「誰って……道場で、師範に——」

そういうことを訊いてるのではない、と恭介は悟った。

「——誰なんだ？」

「今の俺の剣はな、二木に教わった」

「ふ、二木？」

意外な名前だったか、恭介の声は驚きだった。

「だってあいつ、剣道なんてもう、やってないだろ。その……夏以降は」

言外に、夏までの二木佳奈多の剣に学ぶところはないだろう、と問いかけている。

「秋に、一度だけ手合わせ願ったんだ——ああ、そういう意味じゃ、もしかしたらあの剣は——理樹のおかげかも知れん」

「なんだか知らないが……」

「ま、そういうことだ」

謙吾は笑う。

「俺もずいぶん救われた。おかげで笹瀬川に返事をしてやれる。恭介、お前も感謝するなら、あのふたりにしておけよ」

「直接は言えないまでもな」

「当然だ。言っても意味が判らんだろう」

「そんなものか」

得心がいったか、恭介もまた笑顔になった。ひどく晴れ晴れとした三月の上旬の日だった。



そんなわけで――寄り道はこれで終わり。それなりに長かった物語もそろそろクライマックスだ。今でも鮮明に思い出す、恭介と天野先輩の、あの三月十四日のお話を始めよう。

放課後のお茶会

その日、私は、一ヶ月前とまったく同じように、同じものをかばんに入れて部屋を出た。

なんだか教室には早く着いてしまった。もうこの時期になると、大学受験前期組は行き先が決まっていて、全校見回しても、臨戦態勢なのは数少ない後期組ばかりだ。それなりの進学校である我が校のこと、最後の博打とばかりにそっちに走るやつも結構いる。でも、彼ら彼女らは朝から晩まで特別教室に缶詰になっているから、教室に

現れるのはぼこぼこと歯抜けた空席だけだ。それが学校の教室という空間の最後の抵抗みたいに見える、なんだか苦笑いした。

そんな幾つかの空席を残して、教室が少しづつ埋まっていく。棗君は例によってあんまり早くは来ないだろう。

棗君の様子は、どうやらいつも通りだった。まあ、そりやそうか。ホワイトデーというのはあくまでも返歌の日であって、歌を贈られもせずに誰かが何かをするというのはちよつと無粋というものだ。要するに棗君には何をする動機もない。今日を意識する動機も特段、ないだろう。

ま、それでいいのだ。

いつも通りの顔をしている棗君に、いつも通りの顔をして、こいつを渡してやろう、と思う。

一ヶ月前はこんな気分じゃなかったと思う。思い出せばこつぱずかしくなるくらいに高揚していたし。まあでも、そんなの私らしくない。ちよつと浮かれすぎだ。どこまでいつても結局、私は私なのだ。



そんなこんなで、午前中の諸々が終わり、ホームルームが終わり、本日の課程は終

了となった。クラスの皆が三々五々に立ち上がり、それでも一応は授業中の雰囲気だった教室が、がやがやと放課後のそれに変わる。

私はなんとなく独りになりたくて、教室を出た。別に、なにを急ぐでもない。ちよつと気分を落ち着けてから渡せばいいのだ。この場所に居られるのも、考えてみればあと半月足らず。たまには散歩もいいだろう。

校外活動申請をしているわけでもないのに（風紀委員に怒られてしまう）、散歩のコースは学校の敷地に限られる。といっても、我が校の敷地は結構広い。東西四百メートル、南北三百メートル。一周するのにだいたい二十分だ。

マフラーを巻いて校舎を出ると、猫のたまり場、校舎裏から体育館のほうに回る。第一チェックポイントの自販機でホットコーヒーを購入。これは湯たんぽ代わりだ。そこから部室棟の裏に回って裏山のあいだを抜けるとグラウンドの隅に出る。春から秋にかけての、バスターズの主な活動場所だったところだ。まあ、当時の私はいち寮生だったわけで、その彼らを遠巻きに眺めているだけだったのだけれど。

そのままグラウンドの脇を抜けて川沿いの土手に登る。これが校舎の敷地内なのだから、ちよつと変わつてゐるかなって思う。いいところだけだ。

土手に登ると、グラウンドや、一段高い校庭を見下ろせる。今日は特に肌寒い。私のような気分が昂ぶった酔狂でもなければ、好んで外を出歩く者もない。まるで息を潜めているような冬の名残だ。風が吹き、私は首をすくめ、マフラーに埋めた。

土手は境界線だ。

右にはグラウンド、その向こうの校舎、寮、エトセトラ、エトセトラ。わたしたちの小さな世界、小さな揺りかご。

左には、川が流れていて、その向こうに町が広がっている。私はもうすぐ、そこへと出ていくのだ。

その境界線に、今、私は立っていた。

と、ぶるぶるとケータイが震えた。メールだ。

取り出すと、差出人は——棗君？

慌てて本文に目を通す。

『すまん、寮長室に呼び出された。ちよつと助けてくれ。』

——いざ鎌倉つてときに、よりによつてこれかあ……。もう苦笑いだった。まったく今度はなにをしかしたのやら。

でもまあ……。私は、うん、と背伸びをひとつした。頼ってくれてるんだから、まあ、行つてあげましょうかね。ケータイをぽこんとポケットに仕舞った。



土手をくだり、グラウンドの横、あの木のそばを通つて校舎の方へと向かった。足

どりはそれなりに軽い。なにを考える暇もなく、下駄箱をあがって、寮長室はすぐだった。いつもどおりのノックすると、天野か、と棗君の声がした。やれやれ、気軽に呼んでくれちゃって……。

「はいはい、失礼しますよつと……」

いいながら、がらがらと扉をあけて——硬直した。

窓から夕焼けが差し込んでいた。室内はまだあかりが点っていないで、それが逆光になって棗君の——他には誰もいなく、棗君ただひとりのすらりとした影がソリッドに浮かんでいた。表情はかげになってよく見えないけど、でも、こつちを見ていた。すべてがあまりにも場違いだった。

その顔がやわらかく微笑んだと思った。

「ひとつ、甘いもんでも、どうだ？」

棗君が、言った。



いつぞや話で聞いたことがある。いわゆるサブカルの方面の話だから、それこそ棗君から聞いたのかも知れない。

曰く、正義の味方と侵略者、ふたりの巨大な宇宙人が、小さなアパートの小さな一

室で小さなちやぶ台を挟んで向かい合っている——たしかに緊張感がありながら、しかしある種の滑稽さもまた内包している——ともあれそんな感じだった。

いやもう、異常だった。

ホワイトデーに男の子がスイーツを準備となれば、そいつが定番、キャンディーの類じゃなくったって、そりゃコクハクのシーンだらつてくらい、私にだって判る。誰にでも判る。最初は心臓が跳ね上がった。だって明らかに脈あり状態で、事態は今まさに進展しようとしているんだ。これで舞い上がらなかつたら、嘘だ。

だが、それにしちやこの張り詰めた空気は何だ。

誰もいない寮長室、二人でスチール机を挟んで黙々とケーキを喰っている。棗君は桜餡、私は抹茶餡、それをホイップクリームと混ぜた和洋折衷の洋菓子とも和菓子ともつかぬとにかくいわゆるスイーツ。でも、ケーキの箱を見るに近所じゃ名店で通つてるところで、まず間違いなく美味しい——はずなんだけど、そんなもんさっぱり判らん。かちやんかちやんと食器の音だけが妙に響く。背景音は蛍光灯のチリチリという音。普通はそんなもん聞こえない。どうなってるんだ一体！

一応男の子の見せ場たる三月十四日だ。しかしとうの男の子たる棗君ときたら黙っ

て何も言いやがらねえ。

極度にあがりきつてるのは見て判る。用意周到が持ち前のやつは、だいたいぶつつけ本番じゃ弱い。棗君はどつちかっていうとそちのタイプだ。準備が追いつかなかったのか、それとも何を言おうか思いつかなかったのか。どつちにしろまあ、棗君の得意な状況じゃない。

なんだか口の中が耐え難くもごもごしてきたのもあった。私は、ぼそりと提案した。「あのさ……お茶、淹れよつか？」

なにしろ、スィーツを用意した上で、ドリンクはなしときたもんだよ。水すらない。



茶箆笥代わりのスチール棚からセットを取り出して、お茶つ葉を急須にひと匙、かけっぱなしの電気ポットでこぼこぽとお湯を注ぐ。

そのあいだ、背後では棗君マジどんより、としか言いようのないどんよりが漂っていた。そりや棗君としちゃ、一世一代のアレに一世一代の凡ミスだ。どんよりするほかない。

でも——と、疑問がひとつ、ふつと浮かんた。

棗君そもそも——このお茶セットの場所って知ってたかしら？ いや、もちろん別

途用意すりゃいいんだけど、この場所で頂くものといえ、お茶と相場が決まってる。それを淹れてたのはだいたい――

「そういえばさ」

私は背中越しに、ぼんと言葉を放った。わずかな気配。

「だいたいいつも、私がお茶淹れてた気がするわ」

意外や柔らかい口調になった。

「……そうだったか？」

「そ」

そろそろ出具合もいい頃だ。お盆を持って机に戻る。急須から注がれるのは程良い薄緑の香り。その2つのうち1つを、棗君の前に、とん、と置いた。

「どうぞ」

「ああ……サンキュ」

少しおどおどして、湯呑みを手に取る。そして一口すすると棗君の顔が……ふつと、ゆるんだ。

「たしかに――そうだった」

「何がよ」

「お茶は天野の担当だったな」

「……そうよ。思い出した？」

「ああ。だいたい何かを持ち込むのは俺で、お茶が天野だ」

「ああ、そうだったわね。お煎餅とか」

「クッキーとかな」

「結構なんでもありだった気がするわ」

「さすがに——ケーキはなかったと思うけどな、こんな時じゃないと」

その言葉で、話が戻ったと私は知る。はつと棗君の顔を見るが、そこには——恐れのかげはなかった。

「まあなんだ、天野のお茶がないと始まらない……」

茶化したようにそう言いかけて……言葉が止まった。

「いや、」

その顔がかわった。今までに一度も見ることがない、顔だった。思わず息が止まった。時間が止まった。止まって——その口がひらいた。

「天野、好きだ。俺とつきあってほしい」

ド直球だった。やられた、と思った。こんなの聞いてない。その顔が、男の顔、だつてことに一瞬あとに気づいて、私は慄然としてぞわりと震えた。

が、長くは続かなかった。

「だめ……か？」

その一言に、私は——くすり、と笑う。棗君のその、ひどく不安そうな瞳。ああこの人は、本当にまるで判つてないんだなあ……と思うと——でも、それもなんだか素敵だった。鞆は机の上だった。手を伸ばし、ごそごそとやると、取り出す。もちろん、一月前に渡し損ねてしまったチョコレートを、だ。そして特に気負うこともなく、ごくごく自然に、私はそれを突き出した。

「はい、これ」

「……？」

棗君が黙つて受け取る。

「一月前、渡せなかったやつ。ちゃんとやつておくけど、本命よ？」

手元のそいつを、棗君はまじまじと見つめた。それから私の顔に目線をやると、また手元に視線を戻す。

sonでもつて、何も言わないと思つたら、いつのまにわなわなと震え出すと、急に椅子を蹴つて立ち上がり——ガタツシャーン!! と派手な音をたててパイプ椅子が吹っ飛んで——そのまま硬直した。

机に両手をついてこつちを——椅子に座つたままの私を呆然と見下ろしている。硬直している。やれやれだ。いやもう、ほんと——

「そんなわけだからさ」

私は言つて立ち上がる。そして、机をぐるりと回つて棗君の横に立つと、

「よろしくね、棗君」

言つて、その頬にちいさな口づけをした――



――パシャリ。

シャッターの音、ついで、何か紙が吐き出されるような、ジーツという音。窓のほうからだ。

棗君が猛然と振り返った。その視線の先にいたのは――棗さんだった。その手にはインスタントカメラ。悪戯な目をにやにやとさせて、言う。

「しょーこは押さえた。言い逃れはできんぞ」

「り、鈴……！！ いつの間に!？」

「寮長室を借り切ったことか？ 理樹とかなたに聞いた。そうしたら、お前がなにを考えてるかくらい、わかる」

汗をだらりと流して棗君が引き攣った声。

「鈴。いい子だからそれを渡すんだ」

「いやだ」

端的にして簡潔なその返答に、きゅぴーん、と空気が凍り付いた。そのふたりの間

に一枚の枯れ葉が舞う。数秒、床に落着する、その微かな音――

「鈴ーッ!?」「お前らずらかるぞっ!!」

二人同時に叫んで、棗君は鉄砲玉の如く飛び出して――窓枠に足を引っかけて、ずんがらがつしゃーん、とばかりに向こう側に転げ落ちた。その向こうで駆けていくのは、棗さん……それだけじゃなかった。バスターズのみんなだった。棗さんに直枝君は当然のこと、かなちゃんまで勢揃いだった。

「み、みんな知ってた……のか……」

尻餅をついたまま、棗君が魂の抜けたような声で呟いた。

窓の方に歩み寄り、そんな棗君の姿を私は見下ろす。やれやれ……と思わないでもない。だけど、こんなドタバタも、私たちにはお似合いだろうなとも、私はまた思う。窓枠に肘を突いて私は、みんなの後ろ姿を眺めた。気がついてみれば、なんだかとても素敵な気分だった。そして私は、彼らの後ろ姿に向かつて――ありがとう、と呟いたのだった。

エピソード 少年たちとの別れ（直枝理樹の補記）

そんなわけで、このお話はそろそろおしまいだ。あのあとで恭介と天野先輩に何があつたかを訊くのは、さすがに野暮つてもものだろう。だから最後に、卒業式の日のお話を、幕ということにさせてもらおうと思う。



卒業式の日には、野球をした。

何かを賭けた勝負とか、そういうものでもなかった。ただただみんなでボールを追いかけて走り回った。恭介も鈴も天野先輩も、もちろん二木さんもだ。

やがて夕暮れ時になり、日が沈み、大きめのファール・フライがどこに飛んだかわからなくなつて、それで僕たちの試合は終わった。ノーサイド、おおきな円陣を組んで、バスターズ、オーツ！ と唱和する。それから部室に戻り、缶ジュースでささやかな乾杯をして、僕たちはグラウンドを後にした。

僕の部屋に集まって、夕飯は恒例の鍋だった。トマト鍋、カレー鍋、トンコツ鍋にタジン鍋とあらゆる鍋に手を出してきた僕たちだけど、今日は水炊きというシンプル

なチョイスだった。今期最後の鍋だからな、と買い出しから戻った来ヶ谷さんが猫のように目を細めた。たしかに、これ以上暖かくなったら、鍋はちよつとお預けになるだろう。夏が過ぎて、また木枯らしが吹く頃まで。

夜十一時を回った頃、すこし会話が途切れたところを見計らつて、葉留佳さんが「今日はそろそろお開きにしましょうや。恭介さんも天野先輩も、明日は早いんでやんしょ？」とおどけた口調でいった。少しだけ寂しそうな声だった。それを契機に、みんなは三々五々に部屋に帰つていった。最後の晚餐だった。

翌朝は早く起きた。

恭介と寮の入り口で待ち合わせると、町に向かった。カラスが鳴く声ばかりが、朝の透명한空に響く。往来する人々はまだ少なく、町全体があくびをしているような時間だった。

恭介とは、会話はなかった。ただふたり、黙つて一緒に歩いた。

レンタカー屋について、手続きを済ませると、まだ眠そうな目をした店員さんが、ちよつと大きめの軽トラックに案内してくれた。このトラックに、恭介と天野先輩、二人分の荷物を載せて、まずは大阪まで天野先輩を送つていく。それからそのまま東京まで走るといふ。その行動力はさすが恭介だ。かなわないなあ、と思う。

ともあれ、恭介は運転席に、僕は助手席に乗り、軽トラは走り出した。思い返して

みれば、恭介の助手席に乗るのは、まだ二回目だった。

寮に戻る途中、信号待ちの時間、ふと、恭介が僕の方を向いた。

「理樹、ありがとうな」

「ありがとうって……何がさ」

「まあその……色々だよ、色々」

天野先輩の件かな？ めずらしく恭介が照れくさそうにするので、僕は思わず笑った。恭介がちよつとだけ不満そうにする。

「なんだよ、理樹」

「いいんじゃない、お互い様だし、いつものことでしょ」

「ま、それはそうか」

なんだか飄々とした調子で恭介が言う。言うべきことを言った、みたいな感じがした。やつぱり、天野先輩の件は大変だったんだろうなあ、と思う。

そのうち、信号が青に変わり、恭介はアクセルを軽く踏み、クラッチを繋いで、車はまた走り出した。窓の外を風景が流れていく。田んぼと家が混じる、この町の風景だ。そんななか、前を向いたまま、誰にいうでもないふうに、恭介がぼつりと言った。

「バスターズを、頼む」

一瞬返事に詰まる。が、言わなきゃいけない。ひとことだけだ。

「うん」

頷くと、恭介は唇の端っただけで、少し笑ったようだった。

寮に戻ると、気の早い三年生たちが引つ越しの準備を始めていた。この時期の寮の風物詩だった。そんな中、真人と謙吾がいつもの格好で中庭に出てきていた。

「よし、やるか」

「うむ」

「俺の筋肉に任せろって！」

そうして荷物の積み出しが始まった。

恭介の部屋の荷物は八割がた荷造りが終わっていて、段ボールの二、三箱と、あとは最後の日用品をボストンバッグに詰めて、掃除機やら炊飯器、ちいさな冷蔵庫なんかの電化製品が残るだけだった。机とベッドは作り付け、調理室は別にあるから、実は運び出さなきゃならない重いものは特にない。とにかく片っ端からやつつけて、荷台に詰めていく。

真人と謙吾の手に掛かれれば、恭介の部屋の荷物が片づくのに半時間もかからなかった。やがて空っぽになった部屋を眺めて、恭介が満足そうに笑う。

「お疲れさん」

その言葉を聞いて、真人が疑問符を浮かべる。

「ん？ 誰がだよ」

「色々。なにしろ三年間世話になったからな」

「そんなもんか……」

よく納得がいけないふうの真人に、謙吾が笑って言う。

「なに、真人もあと一年もすれば、判る」

「そんなもんかねえ」

「そんなもんさ、だろう、恭介」

「そうかもな」

あくまでもさらりと恭介が言った。

それが終わった頃、女子寮の二木さんから電話が入った。天野先輩の荷造りがだいたい終わつたというのだ。やがてバスターズの女性陣が、荷物を担いでわらわらと女子寮から出てきた。天野先輩もまた、重い荷物はない。女性陣だけで十分に運び出せる。女性陣が何往復もしているところ、恭介の荷物よりもいくらか多いと見えて、なるほど女性は身の回りのものが多いものだと思つて、何だかおかしくなつた。でも、天野先輩の荷物もそれで片付いた。

出立の準備は整つた。

バスターズの皆が集まる中で、恭介と天野先輩が軽トラックの横に並んで立つて、ふう、と息を吐いた。この朝が忙しいことは判りきっているから、昨日の夜までに、皆

それぞれに別れの言葉を交わしている。言うべきこと、伝えるべきことはもう、残ってはいない。

「みんな、元気でやれよ」

恭介が変わらぬ調子で、飾らぬ言葉で言うと、皆がそれぞれに頷いた。

「それじゃあな」

それだけを言うと、恭介は軽トラの運転席に乗り込んだ。天野先輩は助手席だ。恭介がエンジンをかけると、ぶるんと車体は震え、天野先輩がひらひらと手を振ると、クラッチが噛み、トラックはゆつくりと走り出した。そのままゆるゆると目の前を通り過ぎ、僕たちの目の前から去っていく。そして校門を出ると、門柱のむこうに、すうっと消えた。やがて、安っぽいエンジン音がゆつくりと遠くなつて、それがいつしか聞こえなくなると——そこに残つたのは、埋めようのない空白だった。

ひとつの季節が終わつたのだ。

「行っちゃったな……」

「ああ……」

真人と謙吾が、ぽつり、と言った。

「やれやれ、ですネ」

葉留佳さんもまた、なんだか困ったような顔だ。見ると——みんな、なにか所在なさげと茫然自失のあいこのこみたいな顔をしている。どうしたらいいか判らないのだ。恭介は僕たちのリーダーだった。

そのとき、脳裏を過ぎるものがあつた。他ならぬ、恭介の言葉だった。

『バスターズを、頼む』

僕は——ようやく自分の為すべきことを見つけた。僕たちにはまだ、時間が残されている。恐らくはかけがえのない時間が。それが過ぎ去るものだということを、恭介は教えてくれたんだ。

「それじゃあさ」

皆が僕のほうを見た。

「まずは、ゴールデンウィークかな」

「ゴールデンウィーク？」

二木さんが鸚鵡返しに問う。

「そう。遊びに行こうよ。恭介のところに、みんなで」

「ぱあつと、皆の顔に理解が広がった。」

「おう、いいじゃねえか。あいつをびつくりさせてやろうぜ！」

「それでこそ、バスターズだな」

真人が大きく頷き、謙吾がとても嬉しそうに笑う。

「みんなも行くでしょ？」

「もちろん！」

誰もが口々に賛意を示してくれた。得難い仲間だった。大きく頷く。

「それじゃ——」

新しい一年が、これから始まる。もう二度とはない青春^{イマ}が。それへの万感の思いを込めて、僕はその言葉を口にした。

「——ミッション・スタートだ！」

『あーちゃん先輩の恋の空騒ぎ！』

完

あとがきに代えて 棗恭介と虚構世界と永遠に関する試論

はじめまして、あるいはお世話になっております。サークル鶏卵工房 瀧川新惟（たきがわ あらこれ）です。

この度は拙作『あーちゃん先輩の恋の空騒ぎ！』を手にとりいただき、ありがとうございます。

タイトルの通り、本作は棗恭介×あーちゃん先輩のカップリングを扱った話になっています。

なにしろ、あーちゃん先輩は実にいいキャラです。追加ヒロインの候補でもあったそうで、プロットは起こしてあるから依頼があれば書ける、と城桐先生がブログに書いておられました。実際シナリオを読んでもみると、ん？ と引つかかるところが何カ所かあって、きちんと設定されているのだなあということを読み取ることができます（これは僕の深読み癖かもしれませんが……）。

さて、あーちゃん先輩の話を書くに当たって——最大の壁は、その恋の相手である
棗恭介でした。

恭介って奴ア、実に難しい男です。行動のプライオリティが、一に鈴、二に理樹、三
にバスターズときたもんです。色気のある話を書く余地があんまりない（そのもど
かしさが、恭介を書く、描くという欲求を刺激しているのがまた手に負えないんです
けど）。

そしてやはり、恭介のこととなると、虚構世界のマスター、という話をせざるを得
ません。これは『リトルバスターズ！』という作品を扱う以上、避けて通れない。

さて、虚構世界のことになると——ちよつと穿った話になります——僕はどうも、
『リトルバスターズ！』の物語で納得がいつていない点があるのです。それは、オーラ
スエンドに描かれる修学旅行が、現実の世界であるという保証がどこにもないところ
です。虚構世界の多重構造のなかにいるだけ、という可能性がある。これは多くの論
者が指摘していることで、特段に新しい視点ではありません。

でも、これはとても怖いことです。要するに、直枝理樹と棗鈴は、棗恭介という超
越的装置によつて、永遠に揺りかごのなかで夢を見させられている可能性があるわけ
ですから。この疑問はつまり、『リトルバスターズ！』という物語の健全性、そのものに
対する疑問になつてしまうわけです。

そもそも、バスターズのみんなで、揃って楽しいことの続きをしに出かける、というエンディング自体が、極めて虚構世界的なんです。『ここからは一冊しか持つて行けないよ。それでよかったのかい?』から始まり、『誰がいても、誰がいなくなっても、僕は唄うよ』ときて、オチは『ここからも書き続けていけばいいよ。それが君のものだから』なんて、ちよつと納得できない(古いファンのひとには、「カメレオンの玩具」のイメージ、といえば通じるでしょうか)。

ですから、永遠の揺りかごたるバスターズから、誰かひとりでもいい、旅立つ話は、『リトルバスターズ!』という物語にとつて必須だったはずです。そして、その役目を背負うべきなのはきつと、バスターズのリーダーであり、虚構世界のマスターであつた棗恭介に他ならない。

『リトルバスターズ!』という物語のために、棗恭介はバスターズから旅立たねばならんのです。そして、そのために用意されたキャラクター装置が、実にあーちゃん先輩だったのではないかと、僕は思うのです。

あーちゃん先輩は、虚構世界の繰り返しに於いては、まったくのサブキャラクターです。虚構の物語には一切関わっていない。虚構世界装置に関わらない、その意味では極めて健全な立ち位置にあるキャラクターです。

対極にあるのが、小毬さんでしょう。以前、恋愛ゲーム評論サークル theoria 主宰、then-d さんのところに書かせていただいた恭こま小咄があるのですが、要約すると「恭介と小毬さんが、ふたりで虚構世界を維持し続ける話 (with らぶらぶ)」でした。このような構造が成立してしまう小毬さんでは、世界の健全性を確実に保証するのはちよつと難しい (そのある種の非健全性が、美しい幻想物語になり得るという点は、いち恭こま好きとして言及しておきたいと思います)。

そこで登場するのが、虚構世界装置に関わらないキャラクター装置、あーちゃん先輩です。この健全なキャラクター装置が、棗恭介をバスターズから (悪い言い方をすれば) 蹴り出すことによつて、『リトルバスターズ!』の物語の健全性を、外挿的に付与することが、できるのです (いささか脱線気味に付け加えると、結果的にそれは、恭介に対する本質的な救いをももたらします)。

前作 (『二木佳奈多と獄門島の夏』) のあとがきでもちよつとだけ言及しましたが、虚構世界装置の影響をもろに受けてしまったはるかなシナリオ、クドリヤフカシナリオ担当の城桐先生が、そんなキャラクター装置を、一種の安全弁として実装していたとしても、僕は納得こそすれ、驚きはしないでしょう。

そんなことを、ほぼ書き上がった頃に思っていました。虚構世界関連を一切抜きにして恭介の話をした本作も、そんなに間違つてなかったかな、なんて。

また、バスターズをめぐる人間関係が、全体としてどんな風が変わっていくのか、というのも、瀧川の書きたかったことのひとつです。

本作では理樹と二木さんのカップルが寮長をしているからこそ、ヘタレキャラのあーちゃん先輩も一念発起して恭介攻略作戦に打って出たわけです。もちろん、他の可能性もあります。理樹と鈴がくっついていれば、恭介と小毬さんがくっつくのがある意味自然かと思えますし、理樹と葉留佳さんがくっついていれば、恭介と二木さんがくっつく可能性もまたある。極論、はるかなお友達エンド（からのほるかな姉妹ガチ百合展開）で、ヘタレ理樹に業を煮やした恭介が鈴とくっつく、という展開なら、理樹とあーちゃん先輩がくっつくルートもあり得そうですが、これは鬱話になるかなあ——などと、色々な想像は出来ますが——要するにバスターズだって、変わらざるを得ない。彼らのネバーランドであつた虚構世界は、もうどこにもないんです。

しかし、だからこそ。その永遠性ではなく、隠されてしまった非永遠性にこそ——「さようなら、リトルバスターズ」——『リトルバスターズ!』のほんとうに見るべき点——この青春^{イマ}を駆け抜けろ!——あるのではないか、と瀧川は思っているのです。

まあ、それらは実際のところ後付けで、あーちゃん先輩マジ天使、というところからはじまったお話ではあります。若干キャラ崩壊気味のところもありますが、楽しんでいただければ幸いなのです。

さて、ネタバレはこれくらいにして、謝辞を。

まず、あーちゃん先輩の生みの親である、城桐央先生、そして Key/Visual Art's の皆様に。

様々なアドバイスを頂いた Project TRI の沙 P 氏に。

色々と身を削って相談に乗って貰ったしょーいち氏に。

昨年夏に恭こま小咄を書かせていただいた theend 氏に。

その元ネタのツイートにレスポンスを下さったによる氏に。

ごはん担当の Sendaken “骨” Sendakensen 氏に。

お世話になっております同人作家の皆様。

そしてなにより、この本を手を取っていただいた皆様に。

心より感謝御礼申し上げます。ありがとうございました。

それでは、全く未定の次回作にてお会いできることを楽しみにしています。

二〇二二年四月

瀧川 新惟



鶏卵文庫

あーちゃん先輩の恋の空騒ぎ！

2012年4月8日 初版第一刷発行

- 著者 瀧川新惟
- 原作 Key/Visual Art's
- 製作 サークル鶏卵工房

発行人：瀧川新惟

a.takigawa@lostwinter.info

発行元：サークル鶏卵工房

<http://lostwinter.info/>

印刷所：株式会社ポプルス

<http://www.inv.co.jp/~popls/>

※本誌は、Key/Visual Art's 『リトルバスターズ！』
及び派生作品の二次創作です。
